静岡大学

地域課題解決支援プロジェクト成果報告書

第9号

目　次

成果報告書第9号の刊行にあたって

地域課題解決支援プロジェクトの概要 …… 3

地域課題一覧

公開シンポジウム「地域課題に取り組むしかけと場づくりを考える」 …… 9

松崎町における地域づくりの課題と可能性～2030松崎プロジェクト～
コロナ禍における地域課題解決×関係人口創出
東伊豆町における課題意識とこれから
みんなのチャレンジ基地ICLa（イクラ）の挑戦
株式会社こども会議（仮）の挑戦
パネル・ディスカッション

地域課題解決支援プロジェクト・各地の進捗状況 …… 45

静岡大学×和歌山大学研究フォーラム
「半島地域における交流・協働の拠点づくりを考える」 …… 47

静岡大学未来社会デザイン機構の展開
紀伊半島価値共創基幹（Kii-Plus）を中核とする多元的地域展開
東部サテライトを拠点にした取り組みと今後の展開
紀伊半島の歴史・文化を活かした地域と大学の連携
パネル・ディスカッション

地域課題解決支援プロジェクトの節目にあたって

静岡大学地域創造教育センター

2024

成果報告書第９号の刊行にあたって

静岡大学学長
日詰　一幸

本学は、令和6年度に創立75周年を迎えます。7年前の平成29年に「地域志向大学」宣言を行いましたが、地域志向という方針は、創立以来の本学の精神を継承し発展させるものであり、地域に根差した大学という本学の方向性を改めて確認するものでした。本学にとって、地域連携・社会貢献は、これまでも、またこれからも変わらず果たすべき役割となっています。

平成23年度に学生・教職員が地域社会と協働で取り組む地域活性化活動を支援する「地域連携応援プロジェクト」を開始し、今年度までのべ228件の応募に対し、これまで167件を採択して支援を行ってきました。平成25年度からは、これまで大学との接点がない地域からも広く課題を公募する「地域課題解決支援プロジェクト」を立ち上げました。これまでの公募で県内各地から計42件の応募をいただき、課題提案地域を訪ね聞き取りを行って、地域課題データベースを作成・公開しています。そして、興味・関心を持った教職員・学生とのマッチングをはかり、年度をまたいで継続的に諸課題に取り組んでおり、なかには10年にわたって取り組んでいる課題もあります。各取り組みの成果も積み上がり、このほど成果報告書第9号を刊行する運びとなりました。

新型コロナの感染状況は本学の教育・研究活動のあり方を大きく左右しましたが、学外との交流が主となる地域連携・社会貢献活動に、特に強い影響を及ぼしました。課題の現場である地域に出かけることから始まる解決支援の取り組みで、コロナ禍に影響されなかったものはありません。

授業の一環である地域創造学環フィールドワークはようやく平常に戻りつつありますが、今度は地域創造学環の募集停止と新学部への移行等があり、地域に出かけるフィールドワークの規模が縮小傾向にあります。そんな中でも、地域課題解決支援プロジェクトの選定地域になっている伊豆半島地域では、様々な活動が行われました。

プロジェクトの主な担い手は各学部・地域創造学環の学生・教職員ですが、初期から参画した静大フューチャーセンター、最近では令和２年に立ち上がった未来社会デザイン機構、東部サテライト「三余塾」が大きな役割を果たしつつあります。東部サテライトが立地する伊豆市、「2030松崎プロジェクト」を進める松崎町など、様々な課題が山積する伊豆半島地域で活動を展開しながら、共通の課題を有する地域・大学、地元の高校とも連携し、これからの地域のあり方を考えていきます。和歌山大学との研究フォーラムの様子も収録しましたが、本学と和歌山大学は4年間にわたり連携を進めてきました。

これまで刊行した成果報告書でも述べたように、大学の構成員が恒常的に社会連携・地域貢献活動に携わることで、教育・研究のあり方が深化・拡充し、次なる社会連携につながる循環をつくることが本学の目指している方向性です。今回の報告書で取り上げた種々の取組もようやく地域に根付こうとしているところですが、ご一読の上、ご助言、ご示唆を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

地域課題解決支援プロジェクトの概要

「地域課題解決支援プロジェクト」は、地域社会が抱える課題を大学が再発見し、大学のもつ様々な資源を活かしながら地域と大学が連携し、対応策をともに考え、協働することによって課題解決を支援する事業です。大学と地域との新たな連携を立ち上げるべく、これまで大学と接点がなかった地域や団体も含め、広く学外から地域課題を公募し、県内全域から27件（準備不足のため辞退された1件を除く）の応募があり、重点的に取り組む課題群をモデル事業として取り組みました。

モデル事業以外の課題についても、提案地域に赴いてヒアリングを行い、地域課題データベースとして学内外に広報し、興味関心をもつ教職員・学生とのマッチングをはかってきました。

第1期の地域課題に取り組む中で、継続的に地域とかかわった学生たちの成長がみられました。そこで、これまでの地域課題に引き続き取り組みながら、平成28年度には第2期公募として、継続的に学生を受け入れていただける地域課題の募集を行い、全15件の課題が寄せられました。

寄せられた42件の提案課題については、ウェブサイトにて一般公開中であり、学内では各研究室・学生とのマッチングを進めています。学内外を問わず、各課題にご協力いただける研究室・教職員・学生・その他関係機関の皆様は、当センターまでご連絡ください。担当者がコーディネートをいたします。

・ウェブサイトURL：http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_index.html

・連絡先：TEL 054-238-4817、E-mail：kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp

地域課題一覧

≪第1期≫

No.	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
1	夢の里みつかわあぐりぃ（袋井市）	三川地区の課題は、『三川が誇る3つの財産（農業・環境・人）をより合わせ、欲しい、行きたい、住みたい地区を創る』こと。人との絆を大切に、心通い温もりのあるまちづくりに取り組みたい。	①出会いの場の提供をし、結婚する人を増やす方策 ②袋井市地域の活性化方策 ③地産地消の推進のための方策
2	御前崎市役所	御前崎市では過去の人口増加を背景に、原子力関連交付金等により公共施設の整備を進めたが、少子高齢化や人口減少により公共施設のあり方が変化した。公共施設マネジメントへの取組が必要である。	①今後の当市の財政状況分析 ②公共施設マネジメントの可能性及び取組手法 ③公共施設の費用便益分析
3	ユークロニア株式会社（静岡市）	県内の小中学校では睡眠不足からくる問題が顕在化している。「睡眠授業」の依頼が増えているが、研修にはマンパワーが不足。地域の課題として睡眠を整えることができる仕組み作りが必要である。	①睡眠教育の標準化や効果検証 ②教育者の育成 ③静岡独自の睡眠問題の調査により、地域にあった生活スタイルを探る。
4	NPO複合力（静岡市）	両河内地域の高齢化は進み、休講農地が増えている。森林公園「やすらぎの森」は、老朽化にもかかわらず年間30万人が訪れる。脱・限界集落の手がかりを得て、地域を活性化する手立てを考えたい。	①農産物の品質を高め、商品化する栽培知識技術。竹林等を伐採し、循環型資源とする知識技術。 ②グリーンツーリズムを活性化するための知識技術 ③大学生など若いマンパワーが恒常的に来園する方策
5	静岡市北部生涯学習センター美和分館	潜在的な利用者ニーズの把握が十分ではない。広く地域住民の生涯学習に対するニーズ把握のため調査を企画した。それにより、一層充実した学びの機会を地域に提供し、地域コミュニティ活動の推進につなげたい。	地域住民に対するアンケート調査への助言及び分析

6	静岡市立登呂博物館	リニューアルオープン後、年々来館者数が減少している。イメージ・キャラクターを使った誘客活動を行ってきたが、マンネリ状態になっている。また、多様化する来館者に対応するため、多言語仕様の資料が必要となる。	①イメージキャラクターを活用した教育普及事業の開催への支援。 ②登呂遺跡および登呂博物館の概要を紹介した多言語対応パンフレットの作成とHPの構築
7	NPO法人 富士川っ子の会 （富士市）	子育て支援中心の活動を、今後は生涯学習の観点から事業を広めていく必要がある。当NPO、行政、企業が協働できるようなテーマで解決を図る活動を展開する。活動拠点の確保、会員の若返り施策と後継者の育成が課題。	①当団体、行政、企業との協働により、団体の若返りと活動の幅を広げ、定款に示す事業展開の具体化。 ②活動拠点の確保。
9	袋井市三川自治会連合会	高齢者が地域社会に飛び出せない、“生き甲斐や社会貢献”の機会が確保できない。	①高齢者の意識調査 ②高齢者のライフスタイルの解析 ③高齢者の社会進出の仕掛けづくり ④全国での成功（失敗）事例の紹介 ⑤街づくりワークショップ等への共同参加
10	南伊豆新生機構 （南伊豆町）	①未利用の土地の有効活用がされていない。 ②地場産業が稼働していないため人口が流出している。 ③人材が育っていないため、外部の人材との交流がうまくできていない。 ④行政の協力体制がない。	①知的アドバイスの支援 ②人材の支援 ③資金の支援
11	焼津市役所総務部政策企画課	焼津市では、高度成長期の急激な人口増を背景に公共施設の整備を進めてきたが、老朽化が進んでいる。効果的に公共施設をマネジメントしていく取組が求められている。	地域の人口推移の検証や施設の利用状況を詳細に分析し、老朽化を迎えている集会施設の複合化案について提案頂き、市民への説明、話合いを経て、建設計画を実現可能レベルに調整
12	浮橋地域のスローフードを考える会 （伊豆の国市）	中山間地の活性化	①大学生の視点から、中山間地を幅広い世代にアピールするための意見がほしい。 ②ワークショップを取り入れながら、地元の自然を最大限に利用し、農業・観光へと循環させるプランを検討してほしい。
13	株式会社アイ・クリエイティブ／ジョブトレーニング事業 （静岡市）	①ニート（若年無業者）増加問題。 ②静岡県耕作放棄地増加問題。	①大学に望むこと…ニート・ひきこもりや発達障害などの教育心理の知恵を貸してほしい。 ②ジョブトレーニングが提供するもの…ゼミ等の一環として参加してもらうことで、実態現場＋学びの場を提供する。
14	松崎町	町内にはなまこ壁を配した歴史的建造物が残されている。所有者の高齢化、維持のコスト高等で取り壊すことが多い。町の財産ではあるが個人の所有物である歴史的建造物を、いかに後世に残していくべきか悩んでいる。	最小の費用で最大の効果のある維持や修繕方法を一緒に考え、古民家を利用したまちづくり手法と収益事業のアドバイスや、学生による町おこしや収益事業の模索など。
15	松崎町	町民の森「牛原山」を利活用したいが、中途半端に行政主導で整備してきたため町民の利用が少ない。眺望はよく晴れていれば展望台からは富士山も望める素晴らしい山だが、利用されない。	人が集まる仕掛けや、町民が自ら維持や修繕に携われる方法を一緒に考え、里山の素晴らしさを内外に発信し、愛され利用される森にしたい。アドバイスや学生の知力、体力、気力を町おこしに活かしたい。
16	松崎町	松崎町では、ソフト、ハード両面からの防災施策が急務である。津波対策として水門の建設や防潮堤の嵩上げなど必要な事業だが、景観などの問題で全体の理解が得られない。	防災機能だけの無機質な防潮堤や水門を、どうしたら景観に配慮したデザインや機能を持たせることができるか、一緒に考えてほしい。
17	松崎町	過疎化・少子高齢化により、当町もご多分に漏れず耕作放棄地が急増してきている。このままでは町内の農地が荒地だらけになり、今年度加盟を認められた「日本で最も美しい村」連合に恥ずかしい姿をさらしかねない。	耕作放棄地の解消だけでなく、永続的に利活用し続けることができる仕掛けづくりを期待する。当町での有効な作物の選別や耕作方法の指導、学生による農業体験事業化などでの協力がほしい。
18	松崎町商工会	松崎町の中心市街地である商店街が、過疎化・少子高齢化によりどんどん寂れている。このままではゴーストタウン化してしまう。現在でも転居し、空き地になるところが後を絶たない。空き店舗も多く、シャッター商店街になりつつある。	商店街の魅力発掘と、買い物弱者である高齢者への商店街への買い物支援法。商店街のアート誘致、コミュニティ公園化について助言がほしい。全体的なデザインについても関わってほしい。
19	浜松都市環境フォーラム （浜松市）	浜松市はマイカーに依存した都市となっている。深刻な渋滞問題が予測され、抜本的な交通対策が急務である。工業都市として発展してきた浜松が、今後も持続的に発展していくには観光・文化都市としてのまちづくりが必要になる。	持続可能な都市づくりは、行政・民間が扱いにくい空白の分野で、大学の持つ知的・人的資源を活用して研究する価値が高く、実現を前提に「特区」の認定を受けられるような研究を期待したい。

20	伊豆半島ジオパーク推進協議会	伊豆半島ジオパークの進捗を判断する評価指標や調査方法の不足。貴重な資源の保全、教育、防災、地域振興等、様々な分野での取組があるが、活動の検証とフィードバックが難しい。	伊豆半島ジオパークの活動の進捗状況を把握し、フィードバックするのにどのような調査や指標が適当なのか、大学の知的、人的資源を活かしたモデル調査の実施、各種資料の収集と分析等。
21	三保の松原フューチャーセンター（静岡市）	①三保の松原の保全。 ②三保の魅力を知り、次世代へ伝えていく仕組みづくり。 ③三保住民の安全な生活環境の確保。 三保で活動している団体は数多く存在するが、横の連携が取れておらず、協働できるきっかけがほしい。	①耕作放棄地を活用し、三保自生の松から植樹用の松を育て、商品化するための支援。 ②子供や住民が気軽に参加できるイベントを開催し、地域の関わりを強化するための支援。
22	焼津市市民活動交流センター運営協議会	焼津市内には市民団体が数多くあるが、団体相互の交流が少なく、協働もできていない。焼津市の抱える様々な問題に行政、企業、市民が協働して解決策を模索するようになれば、もっと良いまちになると思われる。	市民活動の実態を知り、その活動を直接・間接に支援できる人材育成を依頼したい。センターへの支援として、情報発信能力の強化、交流会の企画立案、市民が参加しやすい方法論の検討などがある。
23	静岡市葵生涯学習センター	①「生涯学習」の学習格差の解消 ②「生涯学習」に興味・関心がない地域住民に「生涯学習」に取り組んでいただけるよう支援していく	①地域の現状調査の一連の事業の中で、調査方法や課題解消への取組方法、評価方法へのアドバイスがほしい。 ②大学生等の若年層の認知を高める手法を開発、事業実施をする。
24	伊豆を愛する会（南伊豆町）	ジオサイト候補地の里山を所有しているが、安全面の不安を理由に、南伊豆町観光協会と行政は消極的である。これまで500名以上の方が問題なく見学しており、地域の不安を取り除くために力を貸してほしい。	①岩石構造専門家の派遣をお願いしたい。 ②石切り場には、昔の人が文字を掘った跡が何か所かあり、解明されていないことも多く、歴史文化の専門家の派遣をお願いしたい。
25	静岡県／松崎町	①棚田保全・活用－石部地区の棚田を保全するとともに活用を検討。 ②特産品を活用して加工品づくりと販路拡大までを検討。 ③伝統芸能保存。 ④大学と地域のネットワーク化。	①既存のつながりでは生み出されていない部分の開拓に期待。 ②新しい視点で工夫を加えた加工品を開発してほしい。 ③継続的課題解決活動に取り組み、地元との連携を築いてほしい。
26	静岡県／東伊豆町	①エコタウンとしての売り出しに向けたガイドシステムの研究。 ②地域づくりインターンとしての学生の参加。 ③オリーブの里づくりへの大学の参画。	①エコ資源の活用方法の提案。 ②従来より長期的な関わりが可能な大学生の派遣と、長期的な関わりを求める。 ③オリーブの栽培の可能性について、植樹の段階からの研究を希望。
27	静岡県／南伊豆町	①竹の子振興方策の検討－産地化に取り組んでいるが、竹林の利活用についての研究が必要。 ②過疎地域における公共交通サービスの在り方の検討が課題。	①従来と異なる新たな竹の子の活用策の提案に期待。 ②集落が分散し、主要道路周辺のみを運行するのではカバーしきれない公共交通網維持の問題の検討に期待。

≪第２期≫

No.	応募団体/関連団体	現在困っていること（地域課題）について	大学に期待する支援について
1	東伊豆町観光協会（東伊豆町）	東伊豆のジオスポット・細野高原の「すすき祭り」は、町民による活動が実を結び集客が伸び始めた現在、さらなる活動の展開が課題となる。町内へ観光客を誘導するための食品開発・土産物の展開などを通して、細野高原・東伊豆町の価値を高めていきたい。	学生たちには細野高原イベント委員会へ参画という形での支援を期待する。参画することによって、実行委員会や地域住民と交流を図るとともに、地域の実態を学生たちの目線で捉え、問題提起・解決方法の提案・提案の実行を実行委員会や当団体とともに作り上げていきたい。
2	静岡市葵生涯学習センター 指定管理者（公財）静岡市文化振興財団	静岡市生涯学習センターは地域住民が豊かな人生を送るための場として活用されているが、学生・勤労者層は利用率が低い。すべての地域住民の生涯学習活動を充実し、地域と密着した活動とするため、事業の企画立案・運営に地域住民自身、特に若年層が参画することが重要である。	①市民協働・若者参画による生涯学習の活性化のため継続的な意識調査において、企画・実施・分析作業を支援してほしい。 ②若年層に対して、施設や生涯学習の認知を高めるための手法を開発・事業実施をしているが、そのプロセスに参画してほしい。 ③実習生制度への学生参加を推進してほしい。
3	富士のさとの森づくり実行委員会（御殿場市）	国立中央青少年交流の家には様々な樹木が存在するが、一定の考え方をもって植栽するべきであるとの意見が寄せられている。すでにグランドデザインが一応存在しているが、これをひとつのたたき台にしてコンセプトを固めていくことが必要である。	①学生の意見を反映した森づくりのグランドデザインの再構築作業 ②グランドデザイン再構築に必要な森林の伐採等の作業 ③既存の草花の生育等に配慮した環境の専門家の指導、助言（整備時期、整備内容の決定）

4	松崎町	旧依田邸は築300年以上の歴史をもつ建造物で、伊豆半島の発展の原点であり、歴史的・文化的な価値が高いが、修繕・保存という課題に直面している。また町の地域資源として活用し、まちおこしの拠点とする方策を立案・実行することも課題である。	最少の費用で最大の効果のある維持や修繕方法を一緒に考え、歴史ある建造物を利用したまちづくり手法を提案してほしい。教職員・学生を送り出してフィールドワークとして支援していただきたい。
5	松崎町	当町では近隣に大学がなく、せっかく素晴らしい公開講座などがあっても、移動時間を考えると参加をあきらめるしかない。また、大学生との交流に時間とコストがかかるため、いつ何時でも交流が持てる状態にない。	今夏（2016年7月）オープンした、シェアオフィス「ふれあいとーふや。」において、静大の公開講座を受講できるように配信を検討していただきたい。大学生との交流にも使っていただきたい。
6	松崎町	松崎町が抱える課題として、人口集中地域から遠いこと、交通手段が整っていないことがあげられる。そうしたハンディキャップを克服して交流を進める方法としてのICTの活用が考えられる。光ファイバー網の整備をしたが、利活用の具体的な方法が見つからずにいる。	防災や観光、福祉をICT技術で地方の不利、不便さを解消できる技術や提案の提供。
7	松崎町	全国で活発に行われているふるさと納税だが、当町では返礼品競争ではないふるさと納税本来の趣旨を踏まえた活性化を検討しているが、思ったように納税額が伸びない。	外部から見た松崎町の魅力を探り、そのうえでどのような返礼品やどうしたら納税満足度があがるかを一緒に研究してほしい。
8	松崎町	町内に大学の施設や研究室などがないため、産官学の連携した取り組みができない。また、仕事が少ないため若い人が出ていく。	新しい働き方や隙間産業などを学生と一緒に考案していただきたい。 例：耕作放棄地や放棄果樹園を集約し、都市部の週末農業体験のニーズへ繋げるなど。
9	茶夢来（さむらい）（菊川市）	環境整備や農業を核とした新たなライフスタイルを実現する地域づくりが必要となっており、食と農の拠点創造、食育の場づくりを目指している。地域住民の意識調査やニーズ調査をベースに、地域住民が一体となった取り組みを行っていきたい。	農業を核とした食育、地域食材を活用した商品開発、レシピ開発、ノルディックウォーキングを活用した地域健康づくりと観光開発など地域が一体となったまちづくりを目指したい。菊川ブランドのストーリー性の創造に大学の支援をいただきたい。
10	NPO法人 富士川っ子の会 （富士市）	地域全体に「かわっこカフェ」の存在を周知し、自由に集える居場所であることを認知させる手立てを見出すことが課題である。参加者には「かわっこカフェ」の存在意義が理解されつつあるが、地域住民に「一度は行ってみようと思わせる仕組みの工夫」が必要である。	遊び塾と「かわっこカフェ」の活動を通して、次の点を明確にしたアドバイス。 ①地域に求められている居場所とはどんなものか ②それはどのように形作られるべきか ③地域での連携で欠かせないものは何か
11	NPO法人 富士川っ子の会 （富士市）	富士市の高齢化率は全国平均程度だが、要介護者数が多く深刻な問題となっている。解決法として、高齢者が後期高齢者の介護を担当するようにして、循環型の介護要員を確保するという構想のもとで活動を進めている。	課題に対応する団体設立の可能性と実現のために必要なことのアドバイスをいただきたい。 ①介護者と要介護者の区分方法 ②適正報酬額の算出 ③団体の設立及びあるべき介護支援形態
12	自立快活プログラム実施　自立援助ルーム 訪問レストランf （浜松市北区）	障碍に対しての理解と認知が低すぎ、まだ障碍者であることをカミングアウトできない社会性が問題である。自立して一人暮らしする障碍者も増えてきたが、結果的に介助者の手を借りるため、介助者本位のサービスを受けている。本来的な意味での自立援助が必要である。	①事業自体が本格始動していないので、まず、グレーゾーンにどれくらいの障碍者が存在しているのか示してほしい。 ②障碍者のための恋愛対策に共に踏み込んでほしい。 ③理解促進を深めるための方策を検討してほしい。
13	認定NPO法人 クリエイティブサポートレッツ （浜松市西区）	障害福祉サービス事業所「アルス・ノヴァ」では、毎日30名以上の障害を抱えた方々が通ってきている。「多様で寛容な社会」の実現のため、できるだけ多くの人にこの場を体感してもらいたいが、一般の方々に足を運んでもらうことが難しい。	①学生たち自身が障害福祉施設を体験・体感してほしい。 ②その体験をもとに、どうしたら自分の知り合いが障害福祉施設に関心をもつのか考え、実際に身近な人を誘ってきてもらいたい。 ③広く一般の人に関心をもってもらうための方法を共に考え実行していきたい。
15	南伊豆町	伊豆半島最南端に位置し、人口減少と地方経済の縮減が続き、その克服が基本的課題である。一方、豊かな自然環境をはじめとした地域資源も有し、大都市圏との連携を取りながら健康創造のまちづくりを進めているが、大学と連携することによってそうした取り組みを加速できる。	宿泊型のフィールドワークや長期休暇を利用したインターンシップ等を企画し、南伊豆ならではの地域資源を活かしたまちづくりに関わってほしい。

16	藤枝市役所	年間150万人の来園者がある蓮華時池公園や日本遺産の旧東海道及びその構成文化財である神社仏閣等を有しているが、周辺商店街への回遊性がほとんどないのが現状である。歴史と文化を核とした地域ブランド力の強化と観光交流の促進、商店街活性化による地域経済力の向上、更には生活環境の改善など総合的な再生を図る。	市が実施するハード事業（公共空間の高質化や景観向上、市有地の整備等）と連動し、「回遊性向上による商店街の活性化」をキーワードに地域ブランディングを図るため、学生の継続的な参画と関わりをお願いしたい。

地域課題をきっかけに、それぞれの地域に入り、住民の方と交流し、課題解決を一緒に考えることを通して、学生たちは大きく成長しています。

これまでに取り組んできた各課題の進捗状況は、こちらからご確認ください。

http://www.lc.shizuoka.ac.jp/areastudies_history_list.php

公開シンポジウム

地域課題に取り組むしかけと場づくりを考える ～継続と展開に注目して～

日　　時：2022年12月27日（火）13:00～16:00
開催方法：Zoomによるオンライン形式
コーディネーター：阿部耕也（静岡大学地域創造教育センター長）
プログラム：
（1）地域連携・課題解決支援の事例報告
　報告1「松崎町における地域づくりの課題と可能性～2030松崎プロジェクト～」
　　報告者：齋藤一憲（松崎町企画観光課）
　　冨川友秀（静岡県立松崎高等学校）
　　藤井天汰郎（静岡県立松崎高等学校2年）
　　上嶋正貴（静岡県立松崎高等学校1年）
　報告2「コロナ禍における地域課題解決×関係人口創出」
　　報告者：山口一実（南伊豆町地方創生室）
　　松本恒明（南伊豆町伊浜区長）
　報告3「東伊豆町における課題意識とこれから」
　　報告者：荒武優希（合同会社so-an代表）
　報告4「みんなのチャレンジ基地ICLa（イクラ）の挑戦
　　～「挑戦と応援が循環するチャレンジにやさしい静岡」を目指して～」
　　報告者：宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター教授）
　報告5「株式会社こども会議（仮）の挑戦」
　　報告者：安池中也（株式会社こども会議（仮））
　　泉 綾子（株式会社こども会議（仮））
（2）パネル・ディスカッション
　　パネリスト：報告者、課題提案者

阿部（コーディネーター）――ただ今から、地域課題解決支援プロジェクト公開シンポジウム2022「地域課題に取り組むしかけと場づくりを考える～継続と展開に注目して～」を開催します。

地域課題解決支援プロジェクトは2013年から始まりました。当時、第1期の地域課題の提案依頼のチラシを作って県内各地に配布し、ホームページ等にも載せて、新聞等にも掲載してもらいました。2013年12月27日には、「あなたの地域の課題を教えてください！」、一緒に考えましょうというチラシを県内に配布しつつ、手を挙げてくれるところはあるだろうか、一つもなかったら大変だと思いながら、どきどきして待っていました。幸い、第1期は28、第2期は16と多くの提案をいただき、地域課題解決支援プロジェクトを始めました。

特に松崎町、南伊豆町、東伊豆町など、伊豆半島地域、特に賀茂地域から多くの課題提案がありました。今10年目となるのですが、地域の方々の多大な協力をいただきながら進めています。今日は現在の進捗状況を報告いただきます。

提案地域に教職員と学生が一緒に出かけていくというときに、最初に手を挙げて参加してくれたのが学生支援センターの宇賀田先生をはじめとした静大フューチャーセンターのメンバー

でした。その取り組みもまたさまざまな新しい展開があるので、それについてもお話しいただきます。

また、直接課題提案いただいたわけではないのですが、いろいろ進めていく中で、子どもたちが地域の課題を探したり、発見したり、対応したりする取り組みがあるのだと非常に驚いて、株式会社こども会議（仮）にも3年前ぐらいからシンポジウムに参加していただいています。

本日は、パネリストの方々から報告いただいた後、パネル・ディスカッションでは、地域連携論という授業の一環でもあるので、学生、各地域からご参加いただいている方からの質問やご意見もいただきたいと思います。

最初は、「松崎町における地域づくりの課題と可能性」というテーマで、松崎町企画観光課の斎藤一憲さん、県立松崎高等学校の冨川友秀先生、生徒の藤井天汰郎さんからご報告いただきます。

報告 1

松崎町における地域づくりの課題と可能性
～2030 松崎プロジェクト～

齋藤一憲（松崎町企画観光課）
冨川友秀（静岡県立松崎高等学校教諭）
藤井天汰郎（静岡県立松崎高等学校2年）
上嶋正貴（静岡県立松崎高等学校1年）

（斎藤）

地域課題解決支援プロジェクトが2013年に始まり、松崎町は最初から手を挙げています。今も続いている静岡大学の地域創造学環のフィールドワークが大本になった活動ではあるのですが、静岡大学との関わりも強くなってきて、「2030松崎プロジェクト」が始まりました。高校生との関わりや大学生との関わりが強くなっています。「2030松崎プロジェクト」について簡単に説明します。

1．2030松崎プロジェクト

2020年11月に松崎町、静岡大学、松崎町観光協会、伊豆半島ジオガイド協会が包括連携協定を結びました。サステナブル・ツーリズムを大きなテーマとして、持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）への貢献を一緒にやっていきましょうという協定です。

そこから、サステナブル・ツーリズム、観光を考えるためには、まちづくり全体を考えなければいけないということで、新たな挑戦として生まれたのがこの「2030松崎プロジェクト」です。「子どもたち（次世代）と住み続けられるまちを共に築く」ことを大きな目標として、中学生や高校生の思い描く将来を大人と一緒にかなえていきます。バックキャストといわれる手法を使って行っています。

図1　ワークショップの様子

対話を中心に、2021年1月からワークショップをずっと開催してきていて、今年で3年目になります（図1）。高校生が考えるゴールを定めて、それを再編したりしています。チーム活動なども行われています。

元々あったゴールの「2030松崎ゴールs 2.0」は、1「松崎の自然・安らぎ・体験のオンリーワンが育ち、何度でも来たくなる『中毒性』のあるまちになっている」、2「『ささる』観光を多様な世代がプロデュースし、多様な発信とPRを展開している」、3「エコ・ツーリズムとサステ

図2　2030松崎ゴールs2.0（「2030松崎ゴールs1.0から継続しているもの（左）と追加されたもの（右））

ナブル・ツーリズムが実現している」、4「地域の交通ネットワークと都市との相互アクセスが整備されている」、5「地域の資源・資産のユニークな価値が発見され、活用されている」、6「伝統の魅力が広く共有され、『祭り』などが継承されている」、7「のう（農）とりょう（漁・猟）の活動が受け継がれ、食べ物が新鮮でおいしい」、8「地区・世代を超えた人間関係が守られている」、9「子育てをしやすいまちである」、10「多様な選択肢のなかから、やりがいのある仕事に就ける」、11「都会的な飲食・買い物も楽しめる」、12「高齢者になっても活躍できるまちである」、13「三余塾の伝統が受け継がれ、市民たちの学び合いの場がある」でした（図2）。

それに途中で追加されたゴールが、14「防災への取り組み」、15「エネルギーが地域内で循環し、無駄なエネルギーを使わない生活が普及している」、16「経済：地域産業・起業・連携　『地域通貨』や『起業支援』」、17「定住・移住　職とケア　『I・Z・Uターン』誘致」、18「情報機器（ICT）のサポートを気軽に受けられる町にする」です。このようにゴールを定めて、それぞれチームで活動して、年に2回、中間と最終の発表会を行っています。成果報告会の様子は新聞にも載りました。

具体的には、のう（農）とりょう（漁・猟）のチームが、「菜の花エコプロジェクト」を行っています。耕作放棄地対策をテーマに、遊休農地に菜の花を植えて、菜の花でお客さんに喜んでもらい、プラス、採れた菜種をバイオディーゼル燃料として活用していくというプロジェクトです。この取り組みも新聞記事に載りました。子どもにも参加してもらっています。

三余塾のチームは、いろいろな勉強会を開いています。ある回は防災についてで、「非常時のための家庭用備蓄について、そして非常食を食べてみよう」をテーマに、非常食を用意してみんなで食べてみました。

エコツーリズム・サステナブルツーリズムのチームでは、すべて自分たちで歩いてツアーを作っています。まだお客さんを呼ぶところまではいっていないのですが、今後、お客さんを呼んだツアーを開催していく予定です。

また、新しく「ぷらっと2030カフェ」を実施しています（図3）。これは静岡大学の先生が頑張ってくれていて、毎月2回、金曜日の11〜15時に、プロジェクトに参加したい方、まちづくりについて語りたい方、何でも相談・相談したい方など、誰でも参加できるカフェを、「ふれあいとーふや。」というところで開いております。

図3　ぷらっと2030カフェ開催案内

プロジェクトを動かしているうちに、課題がだんだん浮き彫りになってきました。資金面のこと、まちづくりは何のためにやっているのか、どうすれば今参加していない方々に参加してもらえるのか、高校生や中学生との関わり方などが課題になっています。特に高校生との関わりについて、今課題になっていることを解決するために、松崎高校の冨川先生にご尽力いただいて、高校1年生を対象にした「西豆（さいず）学」（地域学）で協働して取り組みをさせていただけることになりましたので、冨川先生からそちらのご報告をしてもらいます。

2. 松崎高校での取り組み
（冨川）

続いて、松崎高校での取り組みについて、松崎高校の教員である冨川からお話しします。このような活動を行う上では、やはり若い人の声が非常に大事です。「2030松崎プロジェクト」の2030というのは、「2030年のまちづくりを見据えた」という意味で、実際に2030年にこのま

ちに住む現在の中学生や高校生の意見を取り入れることは非常に重要です。ただ、意見がなかなか出ない、参加できないという問題があるので、それについて高校側でどのように一緒にやっていったかについてお話しできればと思います。

まず松崎高校について紹介します。生徒数は全部で201名で、小さい方の学校の部類に入るかと思います。伊豆半島の西側にある松崎町に位置する高校で、地域の中学校二つと連携型の中高一貫教育を行っています。教員や部活動の交流や中高生の合同行事の実施など、地域とのつながりが深い学校です。

今年から、特に高校では新しい学習指導要領で授業を行うことになり、学校では「社会に開かれた教育課程」が求められています。教職課程の科目を取っている方はご存じかと思いますが、これはそのまま、社会に開かれた学校と言ってもいいかと思います。では、学校を社会に開かれた存在にするにはどうすればいいかというと、文部科学省はこのように言っています。「①よりよい学校教育を通じて、よりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有します」「②これからの社会を創り出していく子どもたちに必要な資質・能力が何かを明らかにし、それを学校で育成します」「③地域と連携・協働しながら目指すべき教育活動を実現します」。この中で③が特に大事になってくるのではないかと思います。

では学校としてどのようなことをすればいいのかというと、まずは教科での活動、授業が第一です。それから部活動も地域に貢献することができる活動の一つです。もう一つ、私としてはこれが大きな存在だと思っているのですが、総合的な探究の時間です。もしかしたら総合的な学習の時間と言った方が、上の学年の方には分かりやすいかもしれません。大学3年生までだと、探究の時間と呼んでいたのではないかと思いますが、かつての総合的な学習の時間で、松崎高校では連携中学校と一緒に、この授業を「西豆学」という名前で呼んでいます。

どのようなことをしているかというと、松崎町の石部地区の棚田で実習したり、インターンシップをしたりしています。この中でも特にキャリア教育、探究活動が、社会と大きくつながりが持てる部分になるのではないかと思います。ここがキーポイントです。

探究活動とは何かというと、よく「究」という字が「求」という字に間違えられてしまうのですが、究める「探究」です。探究とは、「物事の真相・価値・在り方などを深く考えて、すじ道をたどって明らかにすること」と辞書に載っています。どのようになっているかというと、まず問題があるところを自分で考えて課題を設定し、情報を集め、情報を整理し、周囲とのいろいろな関係を用いて意見交換をし、そしてまとめていきます。ただ、ここで終わりではなくて、まとめたものからまた新しい課題が見つかるので、それについてどんどん調べていって、このスパイラルを回していくというものが探究活動です（図4）。いわゆるPDCAサイクルを回すことです。

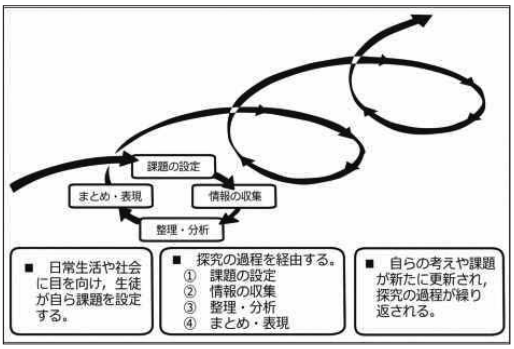

図4　探究における生徒の学習の姿
（出典）文部科学省「今、求められる力を高める総合的な学習の展開」

この探究活動を行うに当たり、松崎高校では本年度より「2030松崎プロジェクト」の方に協力してもらうことになりました。生徒にいろいろな方面で問題を提言してもらい、まちの方々からご意見をいただきながらいろいろなことをやっていきます。高校での活動で特に大事な点としては、行動に移すことが挙げられます。中学でも似たようなことはしているのですが、中学では考えるだけで終わってしまう、提言で終わってしまうので、行動に移し実行するというところに重きを置きました。キーフレーズとして「1コ 何かをやってみよう！！」を掲げて、

生徒はいろいろ考えて実行に移す活動を現在行っています。

松崎プロジェクトのGoalsは現在18個ありますが、その中で今回協力していただけるチームは3、5、7、12、13の5チームと、広報活動を担うメディア・広報チームです。その中で、高校生が週に1回、いろいろなことを考えながら何かを実行します。

本日はその中で実際に活動している1年生の生徒も来ています。探究活動で「2030松崎プロジェクト」に入って活躍している生徒もいます。本日は現在2年生の、メディア・広報チームとチーム18のICTのところで活躍している生徒から、この後、活動の事例報告があります。

3. 情報チーム、メディア・広報チームの活動

（藤井）

静岡県立松崎高校2年生の藤井天汰郎です。僕は「2030松崎プロジェクト」に参加しています。その中でも情報チームとメディア・広報チームの二つに参加しています。今回はその二つのチームでやってきたこと、そして今後の展望について話したいと思います。

情報チームでは、ICTをテーマに、松崎町を、パソコンやスマートフォンなどの情報機器を利用したことのない方や、初心者の方でも気軽にサポートを受けられるまちにし、情報機器によって生活の質を向上させ、町民の情報格差を解消することを目標に活動しています。現在は、ICTの発展により、情報機器を使用することで、多種多様なサービスを利用することができますが、高齢者のインターネット利用率は、いまだに低いままとなっています。

松崎町の高齢化率は48.9％と、人口の約半分が高齢者のため、今後ICTのさらなる発展により、情報機器の利用が今まで以上に重要となる時代が来たとき、操作方法や仕組みが分からず、一人では多くのことができなくなってしまう人がたくさん出てしまうのではないかと懸念しています。

そこで私たち情報チームでは、主に高齢者や若年層の方々に向けて、IT相談会を企画し、今年（2022年）の8月に試験的にではありますが実施しました。この企画は、IT関連で困っていることがある方に来ていただき、そこでご相談を聞いて私たちが解決に導くといったもので、このときも実際に高齢者の方にスマホの相談に来ていただいたのですが、私たちで解決することができました。今後はこのような相談内容や、それに対する解決方法などを蓄積することによって、どの世代がどのようなことに困りやすいのかを把握し、それをどのように解決すればよいのかをマニュアル化することによって、よりスムーズで正確な対応ができるのではないかと考えています。また、今後はチームメンバー以外にも、近隣学校のパソコン部など、情報機器が得意な中高生にもボランティアとして参加してもらい、このような企画をもっと高頻度で開催できればと計画を練っているところです。

続いて、メディア・広報チームについてです。メディア・広報チームは、基本的にはプロジェクト外へのPR活動を行っています。広報誌である「松崎ミライ通信」をはじめ、ブログやSNS等でイベントの告知をしたり、各チームの活動報告、宣伝を行ったりしています（図5）。

図5　松崎ミライ通信

私はカメラとパソコンが趣味なので、イベントやワークショップで写真を撮影したり、プロジェクトのホームページなどを作成したりしてきたのですが、私が今までやってきたことは、基本的にチームでのイベントや他のチームの活動をバックアップするといったものでした。これもとても大切なことだと思いま

すが、今度は自分からもっと積極的に活動を広げていきたいと思っています。

そこで、私が今後メディア・広報チームとしてやりたいと考え、計画しているのは、松崎町の各名所の動画作製とPRです。この計画では、松崎町の各名所の説明やアピールポイントなどをまとめた動画を制作し、観光客がその名所に訪れた際に、その場所がどういうところで、どのようなところがすごいのかということがすぐに分かるように、動画のQRコードを設置するといったものです。さらに、この動画に広告を付け収入を得られるようにし、松崎町以外にも展開することができれば、これをビジネスモデルとした会社もつくれるのではないかと考えています。最後の方は話が少し大きくなり過ぎたかもしれませんが、高校生であってもこのような壮大なことを構想し、真剣に議論できるといったところも「2030松崎プロジェクト」の素晴らしい点だと思っています。この発表をご覧になって、少しでも興味を持っていただいた方と一緒に活動できればとても楽しいなと思っています。

報告２

コロナ禍における地域課題解決×関係人口創出

山口一実（南伊豆町地方創生室）
松本恒明（南伊豆町伊浜区長）

１．賀茂地域の人口推移

（山口）

今回も人口の問題を中心にお話しできればと思います。伊豆半島の南部地域、賀茂地域では下田市を中心に人口の移動が起こっています。近年では特に下田市から河津町への流出が多くなっていて、さらにそこから賀茂地域外への流出が進んでいます（図1）。

それぞれの地域から賀茂地域の中心地、下田市への流出が多くなっており、さらにはそこから域外への流出が多くなっているという状況です。

図1　賀茂地域の人の動き

南伊豆町でもやはり同じような現象が起きています。郊外から中心地、南伊豆町役場のある辺りにだんだん人が集まってきて、そこからさらに下田市、河津町、それから域外に人口流出が続いています。

人口減少が確実に進んでいるという話をこれまでしてきましたが、国立社会保障・人口問題研究所の人口推計を見ると、賀茂地域に限っては、人口減少の率が比較的緩やかになっている、上振れが起きているという状況になってきています。賀茂地域の人口は、推計では2020年の5万9779人から2025年には5万3467人に減少していくという曲線を描いていますが、2022年の実際の人口は5万9418人で、推計の曲線よりも少し上の位置にあります。この流れでいくと、2045年は、推計の3万1481人よりも少し多くなっている状況も期待できるのではないかと考えているところです。

地域ごとに見てみると、西伊豆町が2020年時点で7084人でしたが、2022年時点では7153人で、2020年時点を上回っています。その他の各地区においても、国立社会保障・人口問題研究所の推計人口よりも若干上に位置しています。賀茂地域全体で減少曲線が緩やかに進んでいくことによって、人口減少幅が少なくなる可能性も見えてきました。この理由の一つは、新型コロナウイルス感染症の影響です。東京圏外に流出している人口の一部が、賀茂地域にも来ているということです。もう一つは、賀茂地域それぞれの移住定住などの頑張りです。それによって人口減少が少なからずとどめられているということも言えるのではないかと思っています。

住民の方が望んでいるのは人口増加ではなく、今の暮らしを継続することです。住民の方が暮らしにくくならないことをまず意識して、課題に取り組んでいます。今回は南伊豆町内にある伊浜地区の事例をベースにお話ししたいと思っています。

２．関係人口について

人口の中でも、近年、国は関係人口に着目しています。南伊豆町としても、関係人口には、定住人口プラスαの期待をしています。関係人口がいわれ始めて相当時間もたっているので、

皆さまも認知されている言葉になってきたのではないかと思いますが、交流人口と定住人口の間にある方々といわれています。定義付けがはっきりしていない部分もあるので、関係人口という言葉はいろいろな意味があると捉えています。南伊豆町でも、関係人口を増やすためのいろいろな施策を行っています。

まず、コロナ禍においては、オンラインを中心とした関係人口づくりのプロジェクトに取り組みました。オンラインの交流会を行ったり、学生の地域内でのワークショップをフルリモートで実施したりしました。コロナ禍においては、オンラインツールが非常に活躍しました。オンラインツールの活躍・台頭によって、都市部の方が仕事を持ったまま地方に移住するケースも多く現れ始めている状況です。

一方で、観光の状況を少しご覧になっていただきたいと思います。昭和63年〜令和3年の観光交流客の推移を見ると、令和元年〜令和2年にコロナ禍で一気に減った観光交流客が、令和3年に少し回復してきています。Go Toキャンペーンあるいは各市町独自のクーポン券発行などの要素も含めて、少しずつ回復の兆しが見られています。今年（2022年）のお正月の帰省についても、コロナ前の7〜8割に回復したという話もあるので、人流の抑制が緩まってきたというのも大きな要因ではないかと思います。

宿泊客数はまだまだ低迷が続いており、減少を続けているものの、下田市においては、令和2年から令和3年の間で若干の上昇が見られるなど、宿泊客数も少しずつ回復しています。これもやはりクーポン発行などの影響も含めてこのような状況になっていると言えると思います。

これまでに南伊豆町で取り組んできた関係人口の構築のための取り組みを幾つかご紹介します。一つ目は、2021（令和3）年11月から取り組んでいる、「ミナミイズワーホリ！」というワーキングホリデーの事業です。2021年度は5組6人、述べ67日間、南伊豆町に訪れて、仕事をしながら滞在されました。2022年度も7月から実施しており、12月時点で7組9人、述べ62日間、仕事をしながら滞在されました。

二つ目は、地域おこし協力隊関連事業です。3年間活動を行う一般的な「地域おこし協力隊」が現在3名います。短期間でお試しで地域おこし協力隊を体験する「お試し地域おこし協力隊」を今年度は1名受け入れています。南伊豆町では隊員の採用時に活用しています。また、2週間の滞在期間を設けて、地域おこし協力隊の活動を体験していただく「地域おこし協力隊インターン」という制度があり、こちらも今年度から取り組みを開始して、現在20名程度が参加予定です。

三つ目は、企業との連携による関係人口の構築です。これは松崎町と一緒に取り組んでいます。総務省の「中間支援組織の提案型モデル事業」に採択された、つながる地域づくり研修所と連携して、大手商社、松崎町との3者で、自治体と民間の事務処理手法の違いについてオンラインと実地にて研修を行い、関係人口構築に向けた動きを進めています。

3. 伊浜地区での活動

ここから伊浜地区の話に移ります。伊浜地区でも、これまで人口減少を食い止める施策にさまざま取り組んできた中で、2021年、伊浜地区の段々畑を使ったレモン栽培が始まりました。雇用した地域おこし協力隊を中心に、レモン栽培を2021年の秋から行っており、「第3回レモンでも植えよう会」を2022年11月に行いました（図2）。

図2　イベント告知チラシ

静岡大学のフィールドワークも例年継続して行っていただいて

います。コロナ禍で少し中断したこともありましたが、今年も大学生に伊浜にお越しいただいて、伊浜地域について学んでいただくとともに、住民の方と一緒に地域づくりについて考えていただきました。

伊浜地域のこれからの人口減少について考えていくきっかけとして、伊浜の中で空き家になっていく家を予測した地図も用いました。学生が活動するフィールドづくりやレモン栽培を通して、学生と共に協働していく仕組みをつくり、人口減少に歯止めをかける、関係人口を構築するような取り組みをしています。

今回、伊浜区長の松本さんにお越しいただいているので、伊浜地区での学生の活動について、少しお話しいただければと思っています。

（松本）

伊浜地区と静岡大学の学生さんとのお付き合いは、もう4〜5年前からで、まさに真冬の西風が吹きすさぶ中で始まりました。西風と言うと、ややもすればわれわれはマイナス要因と考えるのですが、静岡大学の先生や皆さんからレクチャーを受けた「地元学」は、無い物ねだりはやめましょう、あるものを探して価値を磨いて創造していきましょうという考え方で、そのように考えるようになって今のわれわれがあります。西風一つ取っても、われわれは、潮が舞って洗濯物が干せない、金属がさびるというマイナス要因だと考えますが、西風がなければ、岩のりが付かない、ヒジキが付かない、また、西風があるから霜が降りないと発想を変えるだけで、考え方が全然違ってきます。そういった中で春夏秋冬、4回、約400枚のかるたを作りました（図3）。いろいろな活動をしていくと、当然交流も深まり、見方が変わってくるということで、現在に至っています。

図3　静大生のフィールドワークの様子

そのように、発想を変えていくだけで世界が変わってくる、見方が変わってくるということがあります。何十年どころかそれこそ何百年という生活が続いている中で培ってきたものですから、当然一朝一夕には解決していかないのですが、私は区長になって1年目ですけれども、この1年だけでも地域の中の雰囲気がだいぶ変わってきました。

われわれ伊浜地区の今年の主要活動の中の1項目が、地域おこし協力隊のバックアップで、事あるごとに役員、地区住民が動いています。詳しくは言えませんが、空き家対策にも一石を投じるような活動も出てきました。私が同じことを言っても「おまえらなんか」という発想がどこかにあると思うのですが、地域おこし協力隊の32〜33歳の若者が、違った目で見て言うと、また違った響きが出てきて、いろいろなアイデアが浮かんできます。

先ほど松崎町の高校生の方からもあったのですけれども、やはりIT、光通信の効果が非常に大きいです。当然、伊浜地区にも光が入っています。私が東京から帰ってきて仕事をしていたときは、光どころかFM放送もまともになかった時代でした。Windows 95、98の時代から、自宅でNetflixが見られる、ビデオオンデマンドができるように変わったこの世界は非常に武器になると思います。そのようなことを感じながら、今、活動しています。

（山口）

伊浜地区においては、ここ数年、静岡大学の学生の皆さんに参画いただいて、さまざまな取り組みをしています。私の目から見ても、伊浜地区で暮らす方々、特に60代、70代の役員の方が、

いろいろな面で学生と協働して活動していく中で、本当に元気になっているし、新しいIT、新しい分野にチャレンジしているなという感覚を持っています。松本区長もさまざまな活動をされていると思いますが、今後、伊浜で進めていきたいようなことは何かありますか。

（松本）

伊浜の海岸に行くと、漂着したブイや浮きが並んでいます。公道から自宅への30mぐらいにずらずらとあります。ごみがきれいとは言いませんが、ある意味、地区のデザインの一環としてアート空間を創設していきたいと思っています。四国の神山町の「神山アーティスト・イン・レジデンス」や瀬戸内のイメージも少しあるのですが、消滅集落といわれたところに突然アート空間が出ても面白いなという発想です。自宅から公共空間、自宅から海岸、そういったイメージを一つ持っています。

4．今後の取り組み

（山口）

今回ご参加いただいている方にも、ぜひ一度伊浜に訪れていただきまして、伊浜の地域の状況等を見ていただければありがたいなと思います。最後に私の方から二つだけ宣伝です。

一つは、若旅プロジェクトが、賀茂地域のツアー参加者を募集しています。ツアー日程は2月20〜22日で、格安料金ですごく濃い賀茂地域の魅力に触れることができると思います。大学生限定なので、大学生の皆さまにご参加いただければありがたいです。

もう一つは「南伊豆パスポート」です。2023年度から新しいものができるので、またお手に取っていただければ幸です。

報告３

東伊豆町における課題意識とこれから

荒武優希（合同会社so-an代表）

1．はじめに

私は東伊豆町で、静岡大学の地域創造学環のフィードワークの受け入れをしています。今回は、松崎町、南伊豆町に続き、同じ賀茂地区の自治体の紹介や私どもの事業の紹介をさせてもらえたらと思います。

私どもが活動しているのが、東伊豆町にある稲取という港町です。伊豆半島からさらに半島状に飛び出したような場所です。私自身は、学生時代にこの町の空き家を利活用するプロジェクトに関わったのがきっかけで移住に至りました。南伊豆町のお話にもあった地域おこし協力隊という制度を使って、東伊豆町に移住しました。任期が3年で終了し、独立・起業するという形で、今は空き家を利活用しながら宿泊事業をメインに活動してます。

愉快な仲間たちと暮らしながら、暮らしの中に仕事もありながら、いかに有意義に、この移住した東伊豆という土地で暮らしながら、その暮らしをさまざまな形で、訪れてくれた皆さんに追体験してもらえるかという活動を、宿やフィールドワークの受け入れの中で行っています。

2．東伊豆町稲取地区について

東伊豆町をご紹介します。東海岸は伊豆急行が走っている関係で、アクセスは他の地方の地域に比べると恵まれていると思います。東京から踊り子号で2時間半です。人口は減少傾向で推移しています。今後20年で東伊豆町は5000人の人口が減るといわれており、その減少スピードを抑えることは大事だと思いつつ、減ってしまうことに変わりはないので、減った先で、いかに残った人たちが豊かに暮らしていけるかを探求している最中です。

伊豆半島は本当に特異な地形です。伊豆半島ジオパークは、とても魅力的な景色が広がっています。稲取地区の半島状に突き出した稲取岬という地区から伊豆半島の本土を見ると、手前に町が見えて、海を挟んで山が見えるという不思議な景色に出会えます。

産業は観光業が主ですが、かつてから根強く続いている海や山のなりわいが今もなお息づいているエリアです。稲取地区は海運業が盛んだったこともあり、かつての港町の風情がまだまだ残っています。高齢化して空き家が増えている状況ではありますが、今もまだ昔ながらの暮らしを営まれている皆さんが暮らすエリアになっています。このエリアは、これから先の町の振興の在り方とどう結び付けていくかが、個人的なミッションというか命題になっています。やはり伊豆の観光というと、おいしい海の幸・山の幸や温泉など、押しなべて同じような観光スタイルがつくられています。それはそれでとても大切な産業で、伊豆をブランディング化する上では大切なことだと思うのですが、われわれとしては、既存の観光産業の皆さんが培ってきたものとは別軸で、この町らしい観光の在り方、滞在の在り方を深めていくことが大事なのではないかと思っています。松崎町でされている2030松崎プロジェクトや、西豆学という活動はとても興味があり、西豆学の東伊豆版もぜひやりたいと思っています。

3. 活動内容

私は元々、建築を学んでいた学生であったという土壌もあり、地域の空き家の増加や、空き家が取り壊されて町並みが失われてしまうことに課題意識を持って、空き家の利活用に臨む活動をしています。

稲取は、温泉旅館が栄えているエリアと、海湾工事で整備されている漁港エリアがあり、それらは観光スポットになっているのですが、その中間の港町の風情が残っているエリアが、これから先のこの町の観光の在り方を再定義する上で非常に大切な、この町のアイデンティティが残っている場所なのではないかと考えています。

そのような中で、私は今、東伊豆町で空き家を利活用した施設を5軒運営しています（図1）。2軒がNPOで運営しているシェアキッチン、シェアオフィスで、3軒が起業した会社で運営している宿泊施設です。

図1　空き家を利活用した施設の運営（5軒）

拠点運営を中心に、メンバーにジオガイドがいる関係で、滞在してくださるお客さんや視察で訪れてくれる皆さんに伊豆の自然を紹介するような事業をしています。また、滞在のコーディネートということで、静岡大学をはじめとする大学の滞在のご支援や、美術作家の滞在の受け入れなどもさせてもらったりしています。

今回、静岡大学のシンポジウムに呼んでもらうに当たり、私自身も学生時代に地域で活動させてもらった発展で今に至っており、その経緯を一つ参考にしてもらえる部分があるのではないかと思ったので、過去のお話もさせてもらいます。

さかのぼること2014年からこの町で空き家改修をする活動をさせてもらい、卒業のタイミングに地域おこし協力隊になって、NPOを立ち上げたり、合同会社を立ち上げたりして活動しています（図2）。

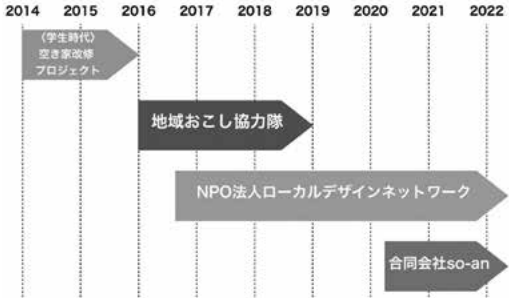

図2　これまでの活動年表

学生時代は、実地での建築を提案するような機会が乏しく、自分の思いを込めてつくった提案が机上の空論で終わってしまうことにすごくもやもやを感じていました。大学院まで進学したのですが、そのタイミングで、実地で自分たちの提案を実現するような活動を自主的に行いました。大学で機会がないからと文句を言うのではなく、自主的につくろうということで、「空き家改修プロジェクト」という学生団体を同級生たちと一緒に立ち上げました。今も続いていて、活動して9年目を迎えています。

地域の中でいろいろな失敗を積み重ねながら、町の人たちに非常にお世話になりながら、町の大切な建物を触らせてもらう経験をさせてもらいました。作ってからが建物の始まりなので、自分たちは作っておしまいなのか、出来上がってからの運営についても自分たちが関わることができないかという思いから、NPOを立ち上げて、シェアキッチンとして出来上がった場所の運営を担うことになりました。

そのタイミングで私は卒業して、この町に移住して、町の紹介で地域おこし協力隊になって、私自身はNPOにも所属しながら、地域おこし協力隊として活動し、地域振興に努めてきました。いざ地域おこし協力隊になってからは、シェアキッチンの「ダイロクキッチン」をいろいろな

町の人たちに認知してもらうために、料理教室を中心としたイベントを組んでみたりしました。

また、ダイロクキッチンの外側にも飛び出しました。地域の若手の観光事業所に勤める社員が早期離職してしまうという課題がある中で、そういった人たちの横のつながりをつくることで定着が図れるのではないかと考え、同期会という形で、若手社員の地域研修をさせてもらいました（図3）。

図3　観光業に勤める若手社員の早期離職問題に取り組む

さらに、空き店舗活用×歩行者天国イベント「雛フェス」を実施し、地元の商工会の人たちと、稲取の町のメインストリートの商店街のシャッターを2日限定で全部開けて、その中に出展者に入ってもらったり、通りを歩行者天国にしてイベントをつくったりしました（図4）。とても思い出に残っているイベントです。このような取り組みをする中で、町の中で、私の存在意義を見いだしてくださる方がちらほらと出てきて、何とか地域おこし協力隊の任期が終わった後も、お仕事をもらいながら、この町に居続けさせてもらっているような状況です。

図4　空き店舗活用×歩行者天国イベント「雛フェス」

地域おこし協力隊期間中や学生時代に養われたのは、やりたいことと困りごとに共通の答えを見つける力です。私は自分のやりたいことと、活動先の困り事の両方にかかる部分に、できることが詰まっているのではないかと思っています。地域おこし協力隊中は、このかかっている部分を見つけることに集中していました。私としては、空き家問題、空き家をどうポジティブに捉え直して地域の魅力に代えていけるかという取り組みがやっていきたいことだと考えました（図5）。

図5　古き良き港町の家屋を地域資産として捉えなおし次世代産業へ継承していく

4. 合同会社so-an

それで合同会社so-anという、宿泊施設の運営を中心とした事業所を立ち上げました。古き良き港町の家屋を地域資産として捉え直し、次世代産業、観光産業につないでいくことが自分のミッションだと思って活動しています。

運営している宿泊施設の1軒目は、「港町暮らし体感宿　湊庵 錆御納戸 -so-an sabionand-」です。元々空き家だった2階建ての家を大家さんから借りて運営しています。ここは土地と建物の持ち主が違って、土地の大家さんは地域のお寺さんで、地域のお寺さんの土地を、この建物の持ち主である大家さんが借りて家を建てているという場所になっています。本当は人に貸したり、この土地の上で商売をしたりしてはいけないという契約が結ばれているのですが、この宿を始める前4年間ぐらい、この町で活動させてもらう中で、評価をいただけていたのか、「荒武たちがやる活動だったら宿にしてもいいんじゃないか」という形で、お寺さんからもお許しをいただいて、おおっぴろげに宿をさせてもらっています。

この1軒目を始めるタイミングで伊豆新聞に取り上げてもらい、伊豆新聞を見た方からその日に「うちの空き家も活用できませんか」という相談をもらってできたのが、2軒目の「リノベー

ションハブ　湊庵 赤橙-so-an sekito-」です。カフェ付きの宿です。飲食機能がある、菓子製造の営業許可を取った施設に泊まれるという場所です。一棟貸しの1号店とはまた別のテイストで、一人や二人で泊まれるような宿です。妻がカフェを運営しています。うちの子はここで毎日子育てをしています。日々、旅で訪れるお客さんやフィールドワークで訪れてくれる学生に遊んでもらったりしながら、地域の皆さんに育ててもらっています。

3軒目は、「ジオコテージ　so-an morie」です。コテージとキャンプサイトを併設した施設です。

学生時代につくったシェアキッチンのダイロクキッチンは、今は地域の皆さんが集まるようなコミュニティのスペースとして運営しています。

「海の見えるシェアオフィス　EAST DOCK」は、後輩の学生たちがつくってくれた場所です。首都圏で在宅ワークなどされているような皆さんが、伊豆に羽を伸ばしに行きたいというときに働きに来られるシェアオフィスを用意しています。コロナ禍ではあったのですが、対策に気を付けながら、コロナ禍で移住してくれたメンバー、宿に泊まりに来てくれたお客さん、地元のメンバーなどが交流できるような場所としても機能しています。このような空間があるから、この町に住んでみたいと思ってくれる人たちが徐々に増えてきているような状態です。

so-anにはジオガイドがいます。また、私は移住をして6年ほどたつ関係で、地域の人たちともご縁が深いという強みがあります。妻はお菓子作りが上手です。私たちは、そのような個人のメンバーの特性と、運営している拠点の特性も生かしながら、この町を訪れてくれる皆さんに、いかに有意義な滞在体験を提供できるかをサービスとして作っている事業者になります。

自然に触れる、この町に住んでいる同年代と交流してみる、地元の人たちとつながってみるという体験をされる方に好んで過ごしていただいています。静岡大学がされているフィールドワークの延長のような滞在を宿のサービスとして提供しているというような感覚です。

5. 地域課題の捉え方

最後に、課題意識のお話をします。「20/6241」。2021年度、東伊豆町全体の世帯数6241に対して、子どもが生まれた世帯数は20でした。およそ0.3％で、1000組に3組だけ子どもが生まれたというデータになっています。うちの子が、この20人のうちの1人です。今までも東伊豆町で20〜30代はとても少なかったので、マイノリティだったと思っているのですが、この数字を見たときに、人口が少ないといわれている地域の中で、さらに少ない数字に当たる人間になったのだなと思いました。これはネガティブにもポジティブにも捉えられると思うのですが、私としては、このような活動をしている関係もあって、ポジティブに捉えていきたいと考えています。子ども1人に対する大人の数が非常に多い、子どもが生まれた世帯に関わってくれる他の世帯がとても多いという見方もできるのではないかと思います。

「リノベーションハブ　湊庵 赤橙-so-an sekito-」のカフェには、阿部先生にもよく足を運んでいただいているのですが、町の中にとどまらず、宿に泊まりに来てくれるお客さんにも、子どもを囲んでもらえるような機会が大変多くて、このような風景にこそ、地方で子育てする強みを見いだしていけるのではないか感じています。これは本当に子育てという文脈を切り取ったときの話ではあるのですが、他の地域の課題についても同様にネガポジ反転できるような考え方がたくさんあるのではないかと思っています。南伊豆町の松本さんも同様のお話をされていて、まさにそのとおりだなと思っております。いかに地域課題をポジティブなものとして捉えるか、それを逆手に取った取り組みを築いていけるかということが大切なことなのではないかと考えています。

報告４

みんなのチャレンジ基地 ICLa（イクラ）の挑戦
～「挑戦と応援が循環するチャレンジにやさしい静岡」を目指して～

宇賀田栄次（静岡大学学生支援センター教授）

1．みんなのチャレンジ基地ICLaとは

静岡大学の学生の皆さんには、「みんなのチャレンジ基地ICLa」と聞くと、「あの場所かな」と思っていただけるかもしれません。静岡大学の静岡キャンパスから約1.5kmの場所にある施設です。かなり大きな建物の3階が、みんなのチャレンジ基地ICLaです。みんなのチャレンジ基地ICLaは、若者一人一人の、自分らしいチャレンジを後押しする拠点で、若者が希望を持って社会を冒険していく「基地」をコンセプトとした場です。

なぜこのような拠点をつくりたかったのかというところからお話しします。私は静大フューチャーセンターという取り組みを約10年前から学生と一緒にやってきました。私の研究室を拠点にしていたのですが、もう少し広い場所が大学の近くにあるといいと思って物件を探していました。また、コロナ禍で、学生の環境が随分変わったという実感がありました。それから、今回連携をしていくNPO法人ESUNEの事務所移転が重なり、学生をサポートしてくれるESUNEが近くにいるといいなということが私の頭の中でいろいろ結び付いて、静岡鉄道、アイザワ証券、ESUNEに声をかけて、このような拠点をつくらないかというお話をしたのが昨年度（2021年度）になります。

当初、プロジェクト名を付けなければいけないということで、incubation、innovation、challenge、cross border、laboratoryという、この施設をつくるに当たってコンセプトになるようなキーワードを集めて、そこからICLaプロジェクトと名付けました（図1）。また、静岡鉄道が静岡駅あるいは新静岡駅近くに「＝ODEN（イコールオデン）」というコワーキングスペースをつくっているので、オデンとイクラで近くていいのではないかと考えました。

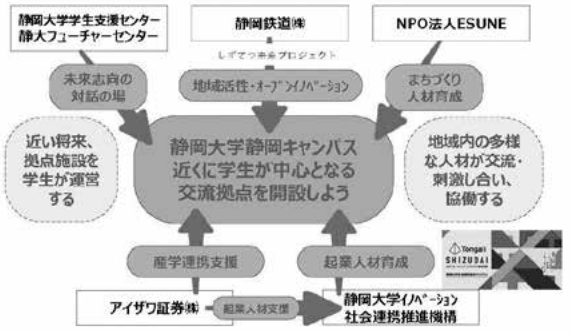

図1　ICLaプロジェクト（2021年～）

大学の中では、イノベーション社会連携推進機構に連携をお願いして、それぞれの立場が、それぞれこういうことをここでできるのではないかということを持ちよりながら作りました。

2．静大フューチャーセンターについて

フューチャーセンターは、1990年代に北欧の会社が始めた、自由な発想でプロトタイプを実験する場が発祥といわれています。その後、日本では大震災をきっかけに、NPO活動が盛んになる中で、フューチャーセンターが少しずつ広がってきました。

2013年8月に、私と有志の学生により、静岡大学フューチャーセンターをスタートしました。私が大学の教員になったのが2011年2月なので、約2年後です。私の狭い研究室に学生や社会人が集まって、定期的に対話の場を繰り広げていました。地域に出かけて行う出張フューチャーセンターも数多く開催し、コロナ前まで100回以上の対話の場を創出しました。南伊豆町の山

口さんにとてもお世話になり、南伊豆町でも開催しました。コロナ後はオンラインでのイベントを行いました。

このフューチャーセンターという活動は、学生と社会人がフラットな形で接する場をつくっていきたいという思いがあってスタートしました。7年前には松崎町に呼んでいただいて、地域に飛び出して対話の場をつくっていきました。南伊豆町に行ったのは5年前です。「多様性」「対話」「未来志向」をキーワードに対話の場を設けており、大きな特徴は、学生がファシリテーションをすることです。学生が進行する中で、いろいろな方が集まって、その課題やテーマについて話をしていくという場です。研究室という狭いところを飛び出した場をつくりたかったというのが一つありました。

もう一つの問題意識として、学生を取り巻く環境が随分変わったと感じていました。ベネッセ教育総合研究所「第4回大学生の学習・生活実態調査報告書」（2022年7月発表）では、コロナが大きなきっかけと言えると思いますが、学内の友人が非常に少なくなってきた、つながりが薄くなってきたという結果が出ています。例えばサークルも、コロナで入るきっかけを失ってしまった、つながりたいのだけれども、なかなかタイミングやきっかけがないのだということも聞いていました。

また、私はキャリアや就活についても担当しているのですが、私の周りで、特に3年生や2年生で、「学生のうちに何かやってみたい」「就活が迫るまでに何かやっておきたい」と考える学生や、1年生も含めて、「今の生活を変えていきたい」「何かやってみたい」と考える学生が少なくないという実感がありました。社会や未来に対して不安を感じ、自分自身の世界を広げたい大学生が一定数いるのではないかと感じました。

3. ICLaの施設の様子

ICLaの施設は約30坪あります。元々、工務店の打ち合わせスペースだったところを借りています。そこにテーブルや椅子を置いています。和室もあります。道路に面したところは非常に景色も良く、向かって左に富士山、向かって右に静岡大学が見えます。

ここで学生たちが集まっていろいろな話をしたり、アクティブ・ブック・ダイアローグ（ABD）で本を分割して読み合わせて勉強したり、社会人の方が来て話をしたり、打ち合わせをしたりします。和室で昼寝する学生もいます。そのように自由に使っている場所です。

実質9月から引っ越しを始めて、徐々に備品を入れてスタートしています。この和室では、プロジェクトの第1号として、「あむラボ」という名前で、静岡大学の人文の学生が探求学習の学習塾を開いています（図2）。週に2日、小学生がこの施設にやってきます。そのメンターは大学生がしています。

図2　大学生×小中学生

それから大学生同士の打ち合わせ、雑談、食事会、飲み会などにも使っています。高校生も遊びに来てくれるようになりました。高校生と大学生が課題や進路のことなど、いろいろ話をしています。また、大学生の企画で、社会人の方を講師としていろいろな交流会を開いたりしています。そんな形で、かなり幅広い年代が、月間で180〜200人もこの施設に足を運んでくれています。

私としては、何かやりたい学生がここを起点に、例えば社会人と何かを一緒に企画したり、起業したり、誰かが何かをやっていることに刺激を受けて何か行動を起こしてくれたらという思いを持っています。何かをしたり起業したりすることが目標ではなく、この施

設をきっかけに、自分らしい学生生活、納得のいく進路選択につながったらいいなと考えています。

学生がふらっと集まっていろいろ話をしたり、時間を忘れていろいろ話をしたり、学生が話を聞きたい社会人を呼んだりするのは、実は大学の中では実践がなかなか難しいのです。そこで大学の近い場所で、学生のホームグラウンドとは言いませんが、アウェーな感じのない場所で、学生の何かやっていきたいという思いを花咲かせたいと考えて、この施設をつくって運用しています。

4. Discordを使ったオンラインコミュニケーション

当初の予定にはなかったのですが、Discordというアプリを使って、オンラインのコミュニケーションのスペースを作りました。これがICLaという物理的な場以外に機能していると思っています。どうして物理的な場所だと、そこに行かなければ人に会えませんが、オンラインのコミュニケーションを取り入れることで、パソコン上で、SNS上で人とつながることができます。このDiscordに関しては、今、高校生も入っています。社会人については、サポーターになるとここに入っていただけて、学生とチャットでいろいろ話をしたり、「こんな情報あるよ」「これどう思う？」ということも発信してもらっています。

いろいろカテゴリーがあるのですが、例えば「#今日のいくら」「#お助け・イベント掲示板」「#プランク図書館」などがあります。これは全部学生が運営しています。「#今日のいくら」というのは、「今日ICLaでこんなことがあった」「こんな人が来た」「こんなおいしそうなものをいただきました」ということや、富士山の写真などを自由に載せています。

業務連絡や会議のツールとしても使っています。Discordは、定例会というカテゴリーを押すと、ボタン一つで会議が始まります。いつも運営の会議はZoomやTeamsは使っていません。学生同士の企画部や学生同士の連絡網といったカテゴリーで進んでいます。

また、「興味関心・好きなこと」「スタッフの個室」というカテゴリーもあります。「スタッフの個室」では、学生が自分の自由な発信をしています。例えば今、「興味関心・好きなこと」では、「竹問題について語りたい」「CotenRadioで哲学・思想を学びまshow」「リターナブル食器の事業をしたい！」などが20個以上挙がっています。学生が「こんなことに今興味があるんだけど、ちょっと語りませんか」「これをやっていく仲間が欲しいんだけど」ということを自分で載せると、そこに違う学生やサポーターの社会人がいろいろな情報を持ってきて、今、半分ぐらいが実際にプロジェクトとして動き始めています。例えばリターナブル食器の事業、子ども食堂プロジェクト、金融の勉強会、静岡を盛り上げるラジオなどです。ラジオは地元の高校生が発案してくれた事業です。

このように、物理的な場以外にオンラインでのコミュニケーションの場があるということは、つながりを維持していく、「何かやりたい」を発展させていく上で非常に有効だと感じています。

5.「何かやりたい」が「やってみよう」に変わるために

「何かやりたい」という学生が「やってみよう」に変わるために必要な要素は、場と仲間と情報なのではないかと感じています（図3）。仲間というのは、とても大事だと思っています。応援する人もサポーターも必要なのですが、一緒にやってくれる仲間がいるだけで、その思いが前に進んでいきます。試行したり、思考したり、雑談も含めて話ができる場をリアルやオンラインでつくるということが必要です。そして、確かな情報も重要です。今の大学生、高校生は、情報収集はわれわれより数段長けていますが、情報はリアルなものばかりではありません。情

報を、リアルに実践した人が伝えてくれると、それは確かなものになっていきます。

恐らく、車のようにエンジンとタイヤとハンドルが必要なのだと思います。それさえあれば動き出していくのではないか、安心して遠くまで行けるのではないかと思っています。そのエンジンとタイヤとハンドルに代わるのが、場であり、仲間であり、情報なのではないかと仮説を立てています。その中で、ただ交流するのではなく、なぜそれをやりたいのか、あるいはそこでやっていく自分がどうしたいのかということも、他人と話しながら、自分なりの意味を言語化できると、さらにその思いが強くなってくるような気がしています。

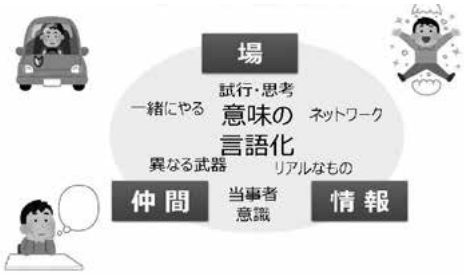

図3　「何かやりたい」が「やってみよう」に変わるために必要な要素

プロジェクト創出の仕組みですが、まずは、やってみたいということを、ICLaのスタッフと話します。今は社会人だけでなく学生のスタッフも何人もいます。そして、「こうなったらいいんじゃないか」というのを一緒にプロジェクト化していきます。さらに、それへの参加を外に呼びかけていきます。また、他人のプロジェクトを見て、「やってみたい」に気付いていきます。そのような循環が、恐らく何かやっていくプロジェクトにつながっていくのではないかと考えています。「支援する」のではなく、「共につくる」という思いを持っているスタッフがいかに周りにいるかということが、その何かをやりたい人の出発点になるのではないかと、いつもICLaの運営会議で共有しています。そして意味の言語化、場というものをオンラインでもつくることは非常に有効なのではないかと感じています。

図4　ICLaイベント告知チラシ

「年末年始もICLa漬け」というチラシを学生が作ったのですが、ICLaは年末も営業しています。年明けは、「プロジェクトマルシェ」を行います。ICLaから始まった三つのプロジェクトを囲んで、交流や対話を楽しむ会です。これはオンラインでもつなぐ予定です。興味があればInstagramもご覧ください。

6. サポーター制度

ICLaでは、サポーター制度をつくりました。ICLaにちなんだ名前で、個人サポータープランは「ヤマメ」、非営利団体サポータープランは「ニジマス」、法人・事業者サポータープランは「サーモン」「シルバーサーモン」「キングサーモン」です。何かをやってみたい、チャレンジしたいという学生を一緒にサポートしていけたらと思っています。何かあればお問い合わせください。

報告５

株式会社こども会議（仮）の挑戦

安池中也（株式会社こども会議（仮））
泉　綾子（株式会社こども会議（仮））

１．株式会社こども会議（仮）について

（安池）

最初に、株式会社こども会議（仮）とは何なのかということを簡単にお話しします。「株式会社こども会議(仮)」までが正式名称です。これは2020年5月に、俳優、日本語教師、アナウンサー、IT系企業マネージャー、経営者など、異業種の大人たちが、子どもたちの「できる！」を信じて立ち上げた仮の株式会社です。当時はコロナ禍真っただ中で、2020年5月の緊急事態宣言が出たときに、子どもたちは社会に必要とされているのだ、「大人の仕事の邪魔にならないように」ではなく、「キミの力が必要だ！」ということを子どもたちに伝えたいという思いで立ち上げました。4月30日に構想したものが、スピードをもって5月5日に立ち上がりました。

子どもたちとは何歳なのかというと、ここまでの報告では大学生、高校生が活躍しているという話もありましたが、こども会議（仮）の場合は、ぐっと年齢が下がります。下は3歳から上は15歳までの子どもたち、私たちの言葉で言うと社員たちが、年齢に関係なく仕事をしています。私たちは、このこども会議（仮）の中で、「お仕事というのは誰かのお困り事を解決して、笑顔をつくっていくことなんだよ」ということを伝えています。他の社員の話を聞き、自分で考え、自分の考えを発言し、それを行動に移して、大人を巻き込みながら具体化していく、具現化していく、そんな流れを、会社という世界観をつくることで、自然と体感できるようになっています。

今、正社員（子ども）は122人です。それを支える株主（大人）は110名＋法人5社です。参加国は11カ国です。組織図は、真ん中に株式会社こども会議（仮）本社（オンライン）があり、各事業部があります（図1）。また、オフラインの地域事務所があります。地域事業所の二子玉川について、この後、泉さんに報告してもらいます。

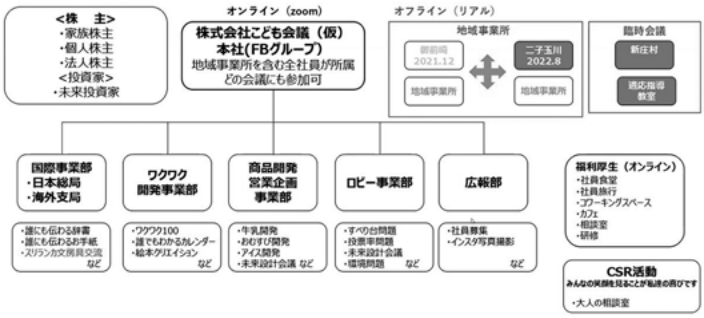

図1　株式会社こども会議（仮）組織図

２．二子玉川事業所

（泉）

地域事業所の第2弾として、二子玉川事業所が今年（2022年）の夏にできました。「にこたま」と呼ばれている二子玉川地区は、東京都世田谷区にあります。われわれの地域事業所は、子どもたちの「できる！」を信じてくださっている方々がいる場所につくるようにしています。ですので、自分たちが二子玉川でやろうと決めたわけではないのです。今回、信じてくださった

方は東神開発株式会社です。玉川高島屋ショッピングセンターという、二子玉川にある非常に大きいショッピングセンターを運営している会社です。その方々が、われわれの理念に賛同して協賛してくださって、かつ、「玉川高島屋を地域の人たちにお返ししたい」という思いを持っていらっしゃったということが分かりました。われわれもこの思いに賛同して、「では事業所という形でこども会議（仮）をつくって、地域の人たちにお返しをするということを実際に具現化してみましょう」となりました。高島屋を拠点とするのですが、高島屋のために何か動くというよりは、自分たちでやりたいことや好きなことをやっていく中で、二子玉川を自分たちのまちにしていくという取り組みになっています。

子どもたちには、「誰かの役に立ちたい」「喜んでほしい」「楽しいことが大好きなんだ」という純粋な気持ちがあります。子どもたちのそのような気持ちが触媒となって、これまで目的がないと出会うことがなかったであろう「大人と大人」「大人とこども」を自然とつなげてくれます。この力は、大人がつくってしまっている企業、行政、学校、国などの境界を軽々と越えていくと私たちは思っています。

二子玉川は、大資本が集う消費の町です。ショッピングセンターは高島屋以外にも、東急の方でつくっている二子玉川ライズがあります。皆さんお使いだと思いますが楽天の本社もあります。ものすごく美しく整備された公園もあります。多摩川が近くを通っているので、緑も、もちろんたくさん残っているのですが、その近辺にタワーマンションもたくさん建っていて、住んでいる人もたくさんいます。

二子玉川がある世田谷区は人口はずっとうなぎ上りだったのですが、コロナ禍の影響か、2022年は少し減っています。少しと言ってもマイナス約4000人で、結構な人数が出ているなという感じはするのですが、やはり都会から移住して田舎暮らしをしたいという方も多くいたのではないかと私は推測しています。そんなまちです。とにかく人はとても多いです。

そんな中で、東神開発株式会社からは、「おしごと」もいただいています。協賛していただくと、「おしごと」の議題を出すという権利をもらえますが、いただいた「おしごと」は、「デパートではたくさんごみが出るので、ごみのリサイクルを今もしてますが、この活動をもっと広げていきたいと思っています。もっとごみや環境について知ったり、学んだり、体験できたりする場所をつくりたいのだけれども、どういうものをつくっていいか、頭が凝り固まってしまって分かりません。このようなことに興味がない子に興味を持ってもらうためにはどうしたらいいですか」という内容です。それに対して、「リサイクル音楽会」と「SDGsゆうえんち」という面白いタイトルの企画をこども社員たちが出してくれて、これが見事に採用されました。二子玉川事業所の中で、これから、この「リサイクル音楽会」と「SDGsゆうえんち」をつくっていく活動をしていきたいと思っています。

事業所の体制としては、二子玉川事業所の中で子どもたちが「おしごと」をして、大人は運営事務局という形で後方支援をしていきます。あくまで主役は子どもです。こども会議（仮）の本社に既にいる子どもたちも合流したり、地域の方々とも交流をしたりしながらやっていきたいと思っているところです。

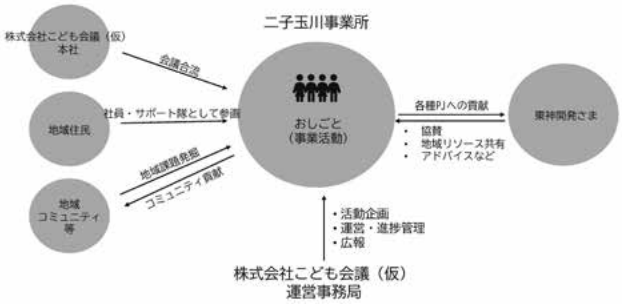

図2　二子玉川事業所の体制

2022年8月から社員の募集を始めました。コネもつても何もない中で、地元の子どもたちを

集めるために、チラシ配りやホームページ作成など地道な活動をして、今、二子玉川事業所専門の社員が約25名集まりました。その集まってくれた子どもたちと、既に会社があるという形ではなく、「これからみんなで会社の事業所を立ち上げていきます」という形で、まず事業所の理念、事業所のロゴ、名刺を作り、みんなにお披露目のパーティをする企画を立てたところまでが、12月までの成果となっています。ここから子どもたちが、リサイクル音楽会の準備を2023年夏の開催に向けて進めます。これが終わったら、「SDGsゆうえんち」の企画を始めます。ですので、来年、もしまたこのシンポジウムに出席させていただけるのであれば、リサイクル音楽会のご報告が十分できるかと思っております。

運営にあたって工夫した点は、4点あります。1点目は、われわれスタッフだけではなく、サポート隊を一緒に募集したことです。何かしたいと思ってくれている人がいたら、ぜひ手伝ってくださいという形で、近隣の方に声をかけています。その人たちに対しては、どのように参画をしたらいいのかというメニューを先に出して、その中から選んで参加してもらいます。最初から役割をこちらの方で作って提供することで、皆さんかなり積極的に手伝ってくださいました。このようなものは、手放しで「手伝います」と言ってボランティアの方が来ても、受け入れる側が準備ができていないと、どうしていいのか分からない、良きに計らってほしいけれど、なかなか動いてくれないというジレンマもあると聞いたので、あらかじめメニューを出してやっていただくことで、われわれが何をしたいかということもよく分かって、自立的に動いてくださるようになりました。

2点目は、子どもの力を今まで以上に発揮してもらうため、ヨコとナナメの関係性を強化できる運営をしたことです。これは後でまた詳しくご紹介します。

3点目は、「おしごと」として、子どもの集中力の限界ぎりぎりを狙う時間構成とすることです。最初、2時間ぶっ通しでやったら、子どもが悲鳴を上げたことがあったので、子どものぎりぎりはどこなのか、われわれの方で調整をして、試行錯誤していろいろ変えたりしました。子どもの学校の授業は今45分なので、45分ぐらいだったら集中できるだろうということで、そういったことも苦心しながらやっております。

4点目は、大人のファシリテーションは、必ず視座を多角的に切り替えることです。これは本当に難しい話なので、できたらいいなという形で、工夫してできましたということではないのですが、まず、発言・行動などの事象・事実をきちんと見ます。うろちょろしている子がいたら休憩を入れるなどします。二つ目に、事象として表れていない内心の声・価値観・感情・非言語のメッセージをなるべく見るように注意を傾けています。もしかしたら悲しい思いをしている子がいるかもしれない、そういったものにもきちんと目を配りながらやっていくということです。三つ目は、しっかりと一つの会議の中で成果をつくり上げることです。ゴールを明確にして、やり切ったと子どもたちに思ってもらえるような運営をするということです。四つ目は、さらに中長期的な全体の成果に意識を向けることです。その場限りの会議がうまく終わればいいだけではなく、中長期的な目標もあったりするので、そういった全体の成果を意識しながら、この会議ではこれでいいのかということに常に心を配りながらファシリテーションするという、非常に難しいことをしています。

3.「おしごと」の様子

東神開発は、かなり豪華な会議室と幹部役員が座るような椅子をわざわざ用意してくださいました。丸い机で会議をしていて、お仕事感を出しています（図3）。

これは先ほどの「ヨコとナナメの関係性を強化できる運営をする」ということのナナメの部

分ですが、子どもたちに、子どもたちをサポートする大人の名札を作ってもらいました。子どもがそれぞれの人の好きなものや名前を聞いて、その人のオリジナルの名札を作りました。大人はそれを首にかけます。このように、親や学校の先生ではない、全然関係のない大人との関係性を一個一個つくっていくという工夫をしています。

図3　会議の様子

二子玉川事業所の理念づくりの際には、字が書けない社員には絵で表現してもらいました。子どもたちがこのような会社にしたいということを話し合って、理念は「みんなのために　みんなできがるにはなしあえて　おしろいかいしゃ」に決まりました。

その次に、理念を表すロゴの案を作ってもらいました。「ちきゅう」「びょうどう」の絵があったり、ニコちゃんマークの絵があったり、子どもが会議をしている様子の絵があったりとか、いろいろなものを子どもたちは絵に表現してくれたので、それを合体させてロゴが完成しました。

名刺も社員に作ってもらいました。名前と肩書きを書いてもらっています。自分はどんな役割で、どんなものが好きで、どんな立場でこの会議に参加しているのだということをきちんと言葉にして、それを名刺に書き込んで、名刺交換ができる準備をしました。

お披露目のパーティでは、子どもたちが大人に挨拶をして、作った名刺で名刺交換をしました（図4）。トレーディングカードのように名刺を一生懸命集めていました。そのように、ゲームのような雰囲気も出しながら名刺交換をしてもらいました。

図4　大人と名刺交換

子どもたちは企画で、お披露目パーティはパーティだから何か景品が欲しいと考えました。景品といっても、買うのではなく、自分の家にある、もう使わないけれど、もらったら誰かが喜ぶのではないかというものを持ってきて、それを景品にしようというアイデアを出してくれました。大量の商品が集まって、アップサイクルになったので、子どもたちのアイデアはすごいなと思いました。パーティの始めと終わりの挨拶も、子どもたちが一生懸命考えてくれました。

この間、子どもたちと忘年会をしたのですが、二子玉事業所で何が一番楽しかったかと聞いたら、会議ではなく、「パーティの後にやった、「だるまさんがころんだ」が一番楽しかった」と言われて、まあ、そうですよねと、なるほどと思った次第です。やはりオンラインで画面を通してやっているだけだと、なかなか子どもたちも仲良くなりづらいところが、こうやって外で遊ぶと、一気に仲良くなるということで、非常にほほえましい光景が見られました。

4. 活動を通じて分かったこと

二子玉川事業所の活動を通じて分かったことの1点目は、子どもはゲーム性を絡めると、アドレナリンが大量に出て、大いなる力を発揮するということです。普段の何倍もの力が出るのだということが分かりました。

2点目は、子どもたちの意向を最大限重視することが大事であるということです。自分たちで決めたことでないと、やはり子どもたちは面白くないのです。大人は「こんな企画があったらいい」と何となく想像しながらファシリテーションするのですが、本当に意向を大事にすると、子どもたちがノリノリになってくれます。

3点目は、オンライン会議とリアル会議では成果が大きく異なるということです。それぞれの特性と良さに目を向けて、狙う成果を使い分けていくといいのではないかと思います。会議で意見を言うことはオンラインの方がやりやすいのですが、どうしても横のつながりができにくいので、フィジカルなふれあいができるリアル会議の場では、まじめな意見を言い合うというよりは、ゲームなど、横のつながりがたくさんできるようなものを中心にして、オンラインとリアル、ハイブリッドでやるといいのではないかと思ったりしています。

4点目は、大人が意図的に仕掛ける部分と子どものなりゆきを大事にする部分の均一的なバランスが大事だということです。やはり大人が無策でやってもなかなか進まないところもあったりするので、あくまで場をつくったり、ちょっと仕掛けを仕込んだりといったところも大事にしつつ、子どもの瞬間風速的なアイデアも非常に大事なので、そこをうまくバランスを取りながらやっていくといいのではないかと思いました。

5. 今後に向けての課題

今回のプロジェクトは、皆さん方の今までの発表にあったような地元密着型にしようと思ったのですが、実際ふたを開けてみると、近郊のエリアから子どもたちが集まってきてくれています。電車で来たりするので、普段、顔を合わせる仲にはならないのです。都心でのまちづくりの活動は、当初想定していた地元密着型とはまた趣が異なることもあるので、それを踏まえて、実際に二子玉川のエリアの方々とどうやって関わりをつくっていけばいいのかという点に悩んでいます。

課題の2点目は、地域のコーディネーター（先住民）や自治体、世田谷区役所などとの関わり合いをどうするかです。われわれも神奈川県に住んでいたり、安池さんは静岡県に住んでいたりするので、この地域に割り当てる時間が圧倒的に不足しています。そこはどうしようもないところでもあるので、では、そのない中でどうするか。先ほどネガポジ転換という話もありましたが、どうやってオリジナルの関わり合いを目指していけるかというところで悩んでいます。

3点目は、二子玉川は大きな資本がつくり上げたとても美しいまちなのですが、われわれのような資本ではない力が、その二子玉川を自分たちのまちにするのだという目的に向けて、どうやって力を出していけるか、その作用点はどこにあるのかということです。初めての取り組みなので、われわれもまだ試行錯誤しつつやっているところです。これからもいろいろなチャレンジをしながらやっていこうと思っています。

（安池）

今、二子玉川は大きな資本がつくり上げたという話がありました。実はその真逆の、岡山県・新庄村という日本で二つ目に小さな村で臨時会議を行っています。村民は1000人弱、児童数が32人という村です。この村で、自分たちはどうありたいのか、どんな村にしていきたいのか、そんなことを子どもたちと臨時会議という形で議論したりしています。

他にも、静岡市の「はばたく教室」という適応指導教室で、臨時会議をしています。

大きな資本が動いているような二子玉川と真逆にあるような小さな場所にも子どもたちは必

ずいるので、このような子どもたちを誰一人取り残すことなく、臨時会議という形で、みんながとにかく社会には必要なのだ、誰一人欠けては困るのだ、みんなの力が必要なのだということを私たちは訴え続けたいと思っています。

6. 株式会社こども会議（仮）の挑戦

株式会社こども会議（仮）は、「(仮)」が取れる日を目指しています。この「(仮)」は、仮の会議という意味ではなく、現段階では仮の株式会社であるという思いを込めて付けています。何年か後、「泉さん、安池さん、もういいです。僕たち、私たちに、この会社を任せてください」という社員が現れたときに、初めてこの「(仮)」が取れて、「株式会社こども会議」になって、子どもたちがこの会社を運営していく。そんな日を私たちは夢見ています。今日参加してくれる皆さんの前にも、「株式会社こども会議」という名刺を持ったこども社員たちが現れる日が必ず来るはずなので、一緒に楽しみにしていただければと思います。

パネルディスカッション

阿部――この公開シンポジウムは、毎回パネリスト、報告者を入れ替えておらず、継続してお話をいただいいているので、進捗が分かることが非常にいいところだなと思っています。

最初は、報告者相互でご質問、感想、ご意見等をいただく時間を設けたいと思います。ここを確認したい、ひょっとするとコラボできるのではないかなど、いろいろな種があるのではないかと思うので、どなたからでもお願いします。

荒武――どの団体の皆さんにも、昨年（2021年）に引き続き、いろいろ勉強になるお話を伺わせてもらいました。松崎町の松崎高校2年生の藤井さんにご質問があります。探究の時間について、先生から藤井さんのお話の前に伺ったのですが、松崎町は地元ですか。

藤井――僕は隣の西伊豆町が出身で、高校から松崎に来ました。

荒武――なるほど。地域のことをより深く学べる時間が週1回、探究の時間としてあるということを聞いて、最初、藤井さんご自身はどう思われましたか。周りのご友人たちも、どのような反応をされていたのかを伺ってみたいです。また、その授業に参加して、地域に深く関わってみる前と、みた後のご自身の違いを教えていただけたらと思います。隣にいる生徒さんにもぜひ伺いたいです。

藤井――西豆学で松崎町について探究学習をするのは基本的に1年生で、僕も1年生のときにしました。高校に入って、金曜日の5、6時間目に学習がありました。中学校のときにも「総合的な学習の時間」はありましたが、高校に入って、より松崎町、地元のことに絞って集中的にできるというのは、個人的にはすごく面白いなと思っています。僕も、この場所にいるように、地域の課題に興味があったので、それはすごく楽しみだなと捉えていました。

1年生のときの学習の内容は、各グループもしくは個人で、松崎町を含め、地元の課題について調べて、それを発表するというものでした。実際にそれをやってみての感想としては、発表して終わってしまうところがとても多いということです。例えば「観光者向けの観光プランを立てました」というのがあっても、実際にそれを実行するということはなかったのです。ですので、実際に実行するというのが今年の課題です。今、西豆学と2030松崎プロジェクトとの連携プロジェクトになって、具体的に生徒が考えて実行していくというふうになってきたので、これはいい流れだと個人的には思っています。

実際に今1年生として受けている身としてはどうですか。

上嶋――僕は今1年生で、西豆学を通じて2030松崎プロジェクトに関して、みんなと話しているのですが、僕のチームでは、町の体育館の鍵を役場から借りてわざわざ戻すのが面倒くさいので、暗証番号を打ってそのままロック解除できるようなシステムを入れたいという声がみんなから挙がりました。そして、チームでは、役場に実際にそれを言いに行ってどうなるかというところまで進みました。ですので、やはり中学校のときの西豆学と比べて実行するというのができていると思います。

荒武――アクションがまた新しいアクションにつながると思うと、わくわくしてきますね。

泉――宇賀田さんにお伺いしたいです。高校生と大学生の自発的な行動がものすごく活発になっていることが最後の方に分かって、すごいなと思いました。どんどん好きなこととか、こんなことを話そうというのが盛り上がっていっているということだったのですが、大人がどのような役割を果たして、どのようなスタンスでやると、あのように活性化したのでしょうか。それとも、自発的にどんどん盛り上がっていったのでしょうか。関わる大人の立場として留意されたことがあれば教えていただきたいです。

宇賀田――大人の関わり方は、見守るだけですかね。必要なお金や資源は大人ができるだけ費やすということなのでしょうけれども。例えば小学生が来ていて、そこで大学生が探究学習を教えているのですが、大人が子どもにというのは、私の中ではやはり遠くて、大人がどんなに心理的な安全の中でいろいろな場をつくっていっても、彼らの動きを引き出すには、大学生と小学生、大学生と中学生のように、もっと近い年齢の人を挟んでいく、クッションにしていく、通訳にする必要があるのだろうという感覚はあります。こども会議（仮）さんもそうですが、われわれは彼らが学び合うことを信頼することが一番なのかなと思っています。彼らを見ていて、彼らが生き生きするには、多分、大人が何か関わるというよりは、彼らが学び合う環境、そして、年齢の近い人たちが関わるということをできるだけ創発するのがいいのではないかというのは何となくは感じていますが、それが正解かどうかは分かりません。

泉――そうすると、最初のきっかけづくりのような感じでしょうか。

宇賀田――そうですね。でも、きっかけも、われわれがつくっているというよりも、オンラインのコミュニケーションの中で、学生から「こんなことやりたい」という意見が出て、学生スタッフから「あ、それいいんじゃない」と最初のコメントが入ると、さらにコメントが畳みかけて入ってくる感じがするので、私のところでは、大人の出番はだいぶ後でいいのではないかなという感じもしています。

齋藤――南伊豆町伊浜区長の松本さんにお伺いしたいことがあります。地域おこし協力隊や大学生の受け入れは、松崎町で言うと、キーマンというか、そういうことが好きな方が個人的に関わるというのはよくある話ですが、伊浜区の、それらを地区として全面的にバックアップする体制、よそ者を受け入れる体制というのはすごいですよね。松崎町ではちょっとあり得ないかなと思います。そのような受け入れ体制は、南伊豆町全体の話なのか、伊浜が特別なのか。どのようにしてその体制が出来上がってきたのかを教えていただきたいと思います。

松本――もしかしたら南伊豆町でもレアケースかもしれません。私が個人的によそ者好きというところもあるのですが、静岡大学との関わりの中で、地元学という考え方について、今は静岡大学を去って島根に戻られた皆田潔先生からレクチャーを受けました。土着のわれわれが土の人、外から来る人が風の人というイメージを持っている中で、私はよそから来る風を新しく感じる、新鮮に感じる性格があるものですから、受け入れることは何ら拒否しませんでした。

また、私は今、区長ですが、区長を務める以前から静岡大学の方々とふれあっていた関係で、私が今年区長になったときに、区の総会で今年の伊浜区の活動方針を7項目ぐらい挙げて、地域おこし協力隊を全面的にバックアップするという議決を得たのです。ですから、区長として

大手を振ってバックアップできるのです。当然、役場との連携があって、役場からのバックアップを受けているというのが大きいのですが、今までなかった新しい風が入ってくることは、伊浜地区の発展に絶対に寄与するはずだという、ある意味、確信的なものがあったということです。ですから、そういった条件がうまく合致したというようなことだと私は思っています。

それから、利害関係人、ステークホルダー、地域の多様な主体による働きかけが肝だと思っています。「静岡大学が何かやってくれるんじゃないの？」ではなくて、「静岡大学はあくまでもきっかけをつくって支援をしてくれるのだ。われわれが動かないと価値がまったく創造できていかないのだ」という認識を、われわれ地区の役員が持ったことが大きいと思います。

齋藤――今、地元だけで成り立っていかない地域は、松崎町にしてもそうですが、まちづくりの根本として、よその方を受け入れる体制が一番必要なのではないかと強く感じていて、非常に参考になりました。今度また勉強させてください。

阿部――伊浜にはわれわれは風の人として行くのですが、自然に受け入れられます。学生たちが言っていたのですが、学生として受け入れるというよりも、孫まではいきませんが、学生以上の何かとして受け入れてくださる感じがあります。非常に居心地が良くて甘えることが多いです。授業としてしつらえられていないのに、行きたいという学生はたくさんいます。授業としてのフィールドワークは、いいところもたくさんあります。継続的で、いろいろなプランで実行できるのですが、ひょっとすると授業ではないという点も非常にいいのかなと、その良さもあるのかなというふうに思いました。特に伊浜のようなところと組み合わせると、非常にいいのではないかと思います。

これが授業として行くとなると、お互いちょっと違う構えになるのかなという気もします。これはなかなかバランスが難しいですが、学生が地域に出て行くときに、どのような仕組みで、どのようにサポートをすればいいのか、あるいは、一緒に楽しめばいいのかというのは、それぞれによって違うのかもしれないなと、賀茂地域の三つの自治体に受け入れていただくときに、そんなことも考えました。他にいかがでしょうか。

宇賀田――学生の皆さんにぜひ聞きたいことがあります。私は松崎町も南伊豆町も大変お世話になっていて、7年前や5年前、地域創造学環の1期生ができたあたりは、「地域」というキーワードは、若い人たちが動き出していくモチベーションになっていました。しかし最近は、「地域」ではなく、「自分が何かをやってみたい」「誰かのために」といったものが若い人たちの最初のモチベーションになってきているのではないかという感覚があります。こども会議(仮)も、まさに面白いから参加するという子どもたちが多いと思います。大人はどうしても、地域のために、地域活性化のためになど、地域という言葉を使いたがるのですが、地域という言葉は若者の最初の動機を形成しないのではないかということを何となく最近思っていて、それに対して、誰か何か意見を言ってくれませんか。

藤井――僕としては、モチベーションとしては地域の活性化ということも、もちろんあるのですが、個人的には、高校生という一般的にはまだ大きいことができない世代にもかかわらず、このように大きなことを考えたり、実際に行動に移したりしていけるところに、すごく大きな魅力があると思っています。自分の高校の生徒だけではなく、例えば静岡大学生の方や地域の方と一緒に何かを進めていくということ自体にも価値があると思っていますし、それ自体がす

ごく楽しいので参加しているというのもあります。

上嶋――2030松崎プロジェクトに入った理由としては、松崎町に自分の意見を伝えたいということがありました。それでチームに入って、「自分はこういうのをやってみたい」と言ったら、「それいいね」と言われて、それでみんなと共に行動できるのが楽しいという実感があったから、僕は活動しています。

阿部――大学生の方はどうですかね。高校生として松崎プロジェクトに参加して、今大学生としてフィールドワークに行っているという人が一人、二人いると思います。昨年、高校3年生で、今大学1年生の方。個人を指名しているようですけれど、お願いします。

菊池――菊池です。私のモチベーションは、自分の出身地やフィールドワーク先の人たちの思いです。私も自分の町を大切に思っているし、今、高校生たちもすごく真剣に町のことを思いながら考えているし、一緒にフィールドワークをしている大学生たちも課題に対して真剣に向き合っていて、解決のために何か貢献したいという思いがあります。地元の人たちも、地域課題に対して何とかしたいという思いがあります。そのような地域住民など一人一人の気持ちが、このような活動につながっている大事なことなのではないかと私は思っています。

阿部――今、改めてそのように伺うと、どこで何をするかではなく、どんな人がいて、誰とどのようにしたいかということが大事なのかもしれないと思いました。授業の中で、「地域連携という言い方はそもそも大学の方言だろう。地域から見ると、地域連携という言い方は変だ」という話をしていたのですが、ひょっとすると「地域」というのも大学の方言かもしれませんね。特に私の場合は、「地域創造教育センター」というところにいて、地域と大学との連携という仕事をしていますが、「地域」というのは、大学の中で、そのようなことが仕事だと思っている人間の方言かもしれません。そのような単位で動いていないかもしれないと今思いました。今からセンターの名前を変えようかな。

他に、いかがでしょうか。では、ここからはフロアからもいただきます。また指名に近い絞り込みをしてもいいですか。今紹介いただいた取り組みについて、例えば東伊豆町に生徒を連れていかれたり、視察に行ったりしている方もいるのではないかと思います。その方がもし今回の参加者の中にいるとしたら、どんな感想を持たれましたか。

杉山――多分、個人指名ですね。掛川工業高校の杉山と申します。今日は本当にありがとうございました。知っている方も何人かいて、すごい発表で面白いなと思って聞いておりました。掛川市は人口10万人ぐらいのまちなのですが、私は子どもの居場所を商店街の中につくりたいという思いで、秋には東伊豆町の荒武さんのところに行ったり、個人的には松崎町に行ったり、静岡大学のICLaに行ったりして、それぞれの地域でいろいろな活動をされている方のことを見て、自分の地域、掛川にふさわしいものはどんなものかを考えています。ただ他の人たちが実践していることをそのままやるのではなくて、地域としてアレンジしてやるということがすごく大事なのではないかと思っています。

だから、掛川のまちのことをよく知らなければいけないし、それぞれの場所で実践している方のところを参考にしなければいけないなということで、今いろいろな町をさまよっています。そしてこういった機会にはちょっと顔を出させていただいています。

私がこのごろ思うのは、先ほどの阿部先生の地域の話の延長だと、そこには人の暮らしというものがあって、そうした暮らしをより豊かなものにしなければ、いくら地域活動で人が集まっていても意味がないのではないかということです。地域をかき交ぜるというか、多世代の人たちが一つの場をつくって、そこでいろいろな豊かさをつくる。お金があれば豊かという問題ではなくて、人と人とのつながりという中で豊かさをつくれる場がそれぞれの地域にあればいいなと思っています。それぞれの地域がお互いに連携しながら一つの形として、豊かな地域社会というか、それぞれのコミュニティをつくっていければと思っています。今日もいろいろな方のお話を聞いて非常に参考になりました。

駒木――松崎町の高校生に質問があります。今の段階で、進路はどのように考えているかお聞きしたいです。松崎町のことについていろいろ考えていると思うので、今後どのようにされたいのか気になりました。

藤井――僕は趣味でパソコンがすごく好きで、進路としてはそちらに進もうと思っているのですが、この活動自体はとても好きなので、大学に進んでも、2030松崎プロジェクトなど、学校外のプロジェクトの方で地域には継続的に関わっていきたいと思っています。もし地域のことには一見関係がないような自分のやりたい方の道に行っても、もしかしたらそれがこのプロジェクトに役立つかもしれませんし、自分が好きなことについての能力を何か違う形で、地域やこの活動自体に生かせればと思っています。

上嶋――僕はもしかしたら松崎町を出てしまうかもしれないのですが、2030松崎プロジェクトに参加した以上は、2030年のときの松崎町を見てみたいので、2030年になったら、一度松崎町に戻ってきた方がいいかなと思っています。

阿部――2030松崎プロジェクトは、時間を決めて、将来を見据えて、どんな姿になっているかを描いて、皆さんがゴールも決めてくれたところですから、これは責任を持って、ひょっとして海外で仕事をしていても、オンラインでも何でも見に来てくださいね。松崎町の人間ではないのですが、そんなふうに思います。そうすると、齋藤さんはじめ町役場の方々もうかうかしていられないので、しっかりやらないといけなくなりますね。

大学生だけでなく、若いうちから、幼いうちから、まちづくりや地域の課題解決、みんなの笑顔を増やす活動をすることを考えたときに、小学生をどうするかは全然想像がつかなかったのですが、株式会社こども会議（仮）がされた取り組みがすごくて、本当にびっくりしました。私はこの間、株主総会に出ました。お金をまったく出していないのに出ているのですが、そこで、「大学生はどんな生活を送っていて、何を楽しみにどんな目標で毎日学んでいるのかをインタビューしに来てくれますか」と社員さんに言ったら、即答で「絶対行く」と言ってくれました。ちょっと幅を広げて高校生でもいいですね。松崎高校の高校生でもいいですし、もっと上の世代でもいいかしれません。社員さんには、株式会社こども会議（仮）で普段接する方々とまた違う、それ以外の、株主でもない方々に、どんどんインタビューしてほしいと思います。今回受講してくれた学生たち、参加された方々全員に、株式会社こども会議（仮）の社員さんからインタビューしてもらうという課題を振るかもしれないので、ご協力よろしくお願いします。

報告を聞いている中でも気付いていると思いますが、普通のシンポジウムやフォーラムと違って、今、報告をいただいた方々のところは、どのプロジェクトにも、どの地域にも、行こうと

思えばすぐ行けます。ウエルカムです。ICLaもそうですし、2030松崎プロジェクトも、松崎という地名が付いていますが、実際にはオンラインでの参加の仕方もあります。関係人口というのでしょうか、浜松の情報学部から来る学生もいますし、移住者もいます。あるいはオンラインで、「ゴールの〇番目に参加したい」ということであっても、2030松崎プロジェクトはウエルカムなのです。そんな形で参加できます。

株式会社こども会議（仮）も、年齢は戻すわけにはいかないので社員になるのはなかなか難しいと思いますが、株主にはなれますし、いろいろな形があります。

荒武さんのところも、学生たちが行っても、フィールドワークでなくても、いろいろ対応いただいていますし、東伊豆学生サミットなどもされていますし、いろいろな形で学生もそれらに参加できます。

南伊豆町も個人で行くのは大変かもしれませんが、行ったら、松本さんはじめ、本当にウエルカムだと思います。われわれの学生と一緒に交ざって行けば、割とやりやすいですし、山口さんが伊浜を紹介してくださったのですが、杉並区などいろいろな地域外の人たちが入ってくる環境をどんどんつくっている場所です。

今回のパネリストの方々のところは、どのような形でも行けるので、ぜひ参加してください。フォーラムで、大企業などいろいろなプロジェクトを進めている人が出てきたら、ホームページで調べることはできても、そこにのこのこ行けないということがありますが、今回のパネリストの方々の取り組みは参加しやすいと思うので、ぜひこれからもよろしくお願いいたします。

杉山――情報提供させてください。2023年2月13日（月）に、下田高校で、トークフォークダンスという企画が開催されます。賀茂郡の人はぜひいらしてください。トークフォークダンスというのは、地域と人と人をつなぐ非常に面白い取り組みで、裾野高校で行ったものが今度下田高校でも開催されるということで、今、地域の人を募集しています。下田高校の稲葉先生が中心になっています。これは地域の高校生をつなぐ非常に面白い企画だと思います。私も参加しようかなと思っているので、もし興味がある人は、問い合わせていただければと思います。裾野市の小田圭介さんという、地域活動を熱心にされている方が広めようとしているもので、当日、小田さんも参加されます。もし興味があればぜひ参加いただきたいと思います。

阿部――他に情報提供でも結構ですし、ご質問、ご意見、コメント等ありますでしょうか。

宇賀田――株式会社こども会議（仮）の今後に向けての課題の、地元ということについては、私は解がないのですが、ICLaの活動をしていて、最近、「地域」ということは、むしろ大人のある種エゴではないかという問題意識を持っています。取り組みがどんどん広がっていって最終的に地域に帰結する、地域に飛び火していくということを想定していけばいいのではないかと思っています。われわれも近い課題を持っているので、まずは安池さん、泉さんから、「もしかしたらこんなやり方があるのではないか」と思っていることがあればお聞きしたいです。

阿部――私も興味があります。よろしくお願いします。

安池――私が最初にこども会議（仮）をつくったときは、地域事業所というのをイメージしていて、オンラインでスタートしたのですが、オンラインがいいとは思っていなくて、オンラインを切った後に、いかに地域に散らばっていくかということの仕掛けをとにかくたくさんネタ

帳に書いたのです。それを今一個一個やっているだけで、そのシーンを作るということしか考えていないので、妙案かどうかというのがちょっとよく分からなくて。最終的に、子どもたちが「自分たちは必要とされているのだ」ということが分かればいいと思っています。私たちは、ある一人の人の思いに共感して、その場所がたまたま二子玉川や新庄村になったりしました。地域というのは人の固まりでしかなくて、その人がどこにいるかということだと思っているので、地域というよりは、子どもたちに人の思いをどう伝えるかが大事だと思っています。何の返事をしているかよく分からなくなってしまいました。泉さん、助けてください。

泉――地域という言葉自体がエゴというのは、今ずしっときたのですが、本当にそうだなと思いますね。結果的に、地域で何か盛り上がったりすればいいというだけの話で、そもそも地域の活性は何が目的なのか、人口が減っていくけれども、「それは何でまずいんだっけ」ということがあります。もちろん自治体の存続などいろいろあると思うのですが、それもこれも結局、大人が過去につくり出してしまった行政の区画の枠組みなどの話の中での困りごとだったりします。現状の延長線上で考えていくとそれは不都合が生じてくるし、難しいけれど、これからの世代を引き継いでいくのは今の子どもたちなので、その子どもたちがどうしたいか、子どもの本当の意見をどうやって吸い上げられるかというところに尽きるのではないかという気がしています。それをうまく橋渡しをする場をつくっていけたらと、私たちは思っているのではないかなと何となく思います。あまり回答になっていないかもしれません。

阿部――でも、地域も大事なのではないかと思います。こども会議（仮）で、社員さんの妹が滑り台でいつも頭をぶつけてしまうので、ここだけではなくて全部そうなのかということを藤枝市で調べましたよね。そのときはインターネットなどではなく、社員さんが自分の住んでいる地域の公園を調べました。それはすごく大事なことです。インターネットを使えば地域以外のこともいろいろ調べることができて、遠くとコミュニケーションができると感動しますが、地域では、その子が自分の住んでいるところに出かけていって調べることができます。あるいは天神屋さんのオリジナルのおにぎりをこども会議（仮）で企画して作って、その反響を見たくて、近くの天神屋をはしごしておにぎりを買いましたが、それも地域なのですよね。だから両方必要で、頭でっかちにならないためには地域という言葉はすごく大事だと思います。

伊浜にしても、松本さんたちがいるのは、あの地形の、あの風景が見える、夕日が見える伊浜なので、松本さんたちといろいろなところに行って、いろいろ考えるというのは、私はあの地域と切り離せないのです。だから、こども会議（仮）でも地域事業所という考え方が出てきたのだと思いますし、頭でっかちにならずに根を生やす意味でも、両方必要なのではないかと考えています。そんなふうに地域のことをもう少し考えたいと私も思います。ありがとうございます。

また、受講者の方々、参加者の方々は、どのプロジェクトにも参加できるというふうに言いましたけれど、パネリスト相互で行き来することもできると思いました。2030松崎プロジェクトのゴールの中に、都会的なカフェや交流できるスペースをつくりたいということがあったと思いますが、東伊豆町稲取で、そのヒントになるような、横浜や東京などから来て、地元の方々も交流できるようなスペースを荒武さんたちが作っています。大きめの車を借りて松崎町に行って、40～50分走ると、東伊豆町稲取に着くので、そのようなつながり方もパネリスト相互でできるのではないかと思います。高校生の生徒さんもそういうのに参加したり、企画したりしてもらえればと思います。西伊豆、松崎もいいですけれど、南伊豆もいいですよ。伊浜の辺

りもすごくいいですね。

そんな話をしているうちに、最後の時間になってしまいました。クロージングに当たり、一言ずつお話をいただきたいと思います。

安池――こども会議（仮）はまだスタートして3年目ですが、社員さんも確実に増えています。先ほど言った地域というのは、子どもたちにとって今その瞬間の全世界に近いところが正直あって、学校と家がすべてのようなところがあるので、オンラインで世界でつながりつつ、自分の地元にはその世界に負けないぐらい素敵なところがあるということを子どもたちに感じてほしいと思いながら地域事業所を立ち上げたので、これからも地域事業所を立ち上げていきたいと思います。一方で、子どもたちを集めて短期の臨時会議を開き、その地域の課題を見つけていくということもやっていきます。こども会議（仮）は、いつでも出張するので、ぜひぜひいつでも呼んでいただけたらと思います。今日は本当にどうもありがとうございました。

泉――私はこども会議（仮）とは別に、地域おこし協力隊の中間支援の仕事もしています。今日のお話を興味深く聞かせていただきました。その土地の物語やストーリーが絶対にあるはずで、それを過去の歴史からひも解いていって、いかに大事にしていけるかというところが、人を呼び寄せるところなのではないかと考えています。地域おこし協力隊がうまくいっているところは、私の経験ではそんなところです。どこへ行っても、空き家対策や農業の耕作放棄地の問題など、大体似たようなところがあったりするので、エリアの魅力のようなものをもっともっと歴史から掘り下げていくと、すごくたくさんの宝物が詰まっている気がします。そんなことを思いながら聞いておりました。貴重な機会をいただき、ありがとうございます。阿部先生、来年も呼んでください。

阿部――はい、よろしくお願いします。

宇賀田――今日はありがとうございました。私のもやもやをいろいろ申し上げて混乱させたかもしれません。今聞いていらっしゃる学生の皆さんには、思いを持った人に一人でも多く会いに行ってほしいと思います。それから、地域という話がいろいろ出ていて、私は伊浜に行かせてもらってギネス世界記録への挑戦の場にも立ち会ったり、松崎にも行かせてもらったりしているのですが、やはり、その土地に行かないと感じられないものもあります。学生のうちに旅行したいとか、いろいろなところへ行きたいと思っている学生の方はいらっしゃると思うので、人に会いに行ってもいいし、土地を見に行ってもいいし、そういった中では松崎、南伊豆、東伊豆は本当にお勧めです。

以前、南伊豆でヒリゾ浜を紹介していただいて、私は入ることができなかったのですが、その話を昔自分の子どもにしていて、今、その子どもは大学生で県外にいるのですが、私の知らない間にヒリゾ浜に行っていました。今年の夏にヒリゾ浜に行ってきたという事後報告があって、本当にうらやましい限りです。せっかく静岡大学にいる間に、賀茂地区にぜひ足を運んでみるといいと思います。ICLaにも、ぜひふらっと立ち寄ってください。何するわけではなく、ぶらぶらしてお菓子を食べていればいいかなと思いますので、お待ちしております。

荒武――普段、地域のことを考えたり、多世代が交流できる場をつくっていこうという思いを持ったりしながら暮らしてはいるのですが、何しろ食べていかなくてはいけないという状態も

あって、足元の事業のことを最近はずっと考えてしまっていたので、今回の場はとても刺激的でした。いろいろな形でその土地土地に関わり、社会にインパクトを出そうとされている皆さんのお話が聞けて、自分の原体験を振り返ると、自分がやりたいという思いを形にできる場、一緒に何かしたいと思う人がいた場がたまたまその地域だったということを考えさせられました。そのような顔が見える人たちのために生きていきたいと思います。また、こども会議（仮）の皆さんのお話もありましたが、自分も子どもが生まれたからこそ、次の世代に良い形でバトンを渡していくことをしっかり考えながら、この町、この土地でアクションを起こしていきたいと考えることができました。参加されている学生の皆さん、高校生の皆さんにとってもそういう場所が見つかるといいな、そういう思いを持って取り組めることが見つけられるといいなと思いました。今日はありがとうございました。

阿部――ありがとうございました。それでは、南伊豆町からよろしくお願いします。

松本――今日はありがとうございました。こういった会議に初めて参加させていただきまして、非常に刺激をもらって、また明日から新たな気持ちでいろいろな活動に励んでいきたいと思います。

先ほど阿部先生からもお話がありましたが、私の地区は南西に開けたところですので、季節風は強烈です。先日、強風波浪注意報が出ましたが、あれは実は爆風爆波警報レベルで、私の自宅のBSのアンテナが横を向いてしまい、今朝直しました。お勧めは2月末までです。「みなみの桜と菜の花まつり」を見ながら、ぜひ伊浜の西風を体験してください。お待ちしています。

山口――安池さん、お久しぶりです。ご無沙汰しています。先ほど来、地域というお話が出ていますが、私も、こども会議（仮）の地域事業所を立ち上げたいということで、安池さんといろいろお話をさせていただいていたところです。私としては、地域にこだわりたいというところがあります。人は物理的に存在するもので、どこに存在するかというと、やはり地域になってきます。人として存在するからには地域があるだろうと思ってます。そこの地域で活躍できることが何かしらあるのではないかと考えています。南伊豆地域の地域事業所を立ち上げたいと思いつつも、なかなかうまくいっていません。子どもの数が少ないというのもあります。これは外部からのお力もお借りしながらやっていければと思っています。

南伊豆町でここ最近、外部からの人材登用や、外部から人に来ていただいて町にとどまっていただくということを積極的に進めているのは、地域の人は、外部からの刺激や問いかけがなければ、地域の良さや自分の持っているアイデンティティになかなか気付けないのではないかと思っているからで、その点でも外部からの人材登用を進めていきたいと強く思っているところです。

最後にもう一つ宣伝です。南伊豆町ではワーキングホリデーで地方創生室のインターンの仕事も提供しています。南伊豆町の地方創生室で働いてみたいという方がいらっしゃれば、「南伊豆ワーホリ」で検索してください。宿泊費は町が出します。お越しいただければありがたいです。よろしくお願いします。ありがとうございました。

阿部――ありがとうございました。それでは、松崎町からよろしくお願いします。

齋藤――昨年もそうですが、今日は非常に勉強になりました。やはり現地に行かなければ分か

らないということで、私も南だったり東だったり、2030松崎プロジェクトのメンバーを連れていきたいと思っていますし、静岡大学にも行かせていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

藤井――今日はありがとうございました。僕はこういうシンポジウムに参加するのが初めてだったのですが、いろいろな方の発表を聞いて、とても刺激になりました。特に、考えるだけで終わらせないで、しっかりと行動し実現している方がすごく多くて、僕も今考えていることをしっかり形にすることを大切にしていきたいと思います。

上嶋――僕もこの活動に参加するのは初めてなのですが、今日皆さんから聞いた話を生かして、2030松崎プロジェクトの活動を良いものにつなげていこうと思います。今日はありがとうございました。

冨川――昨年に続き、2回目の機会をいただき、ありがとうございました。昨年度、学校でこのような活動をぜひやりたいと考えていたものが今年やれるようになって、少し進歩したところを皆さんにお伝えできて良かったです。その結果、昨年は3年生と2年生が来ていたのですが、今年は2年生と1年生ということで、今後、先につながるような子どもたちも出てきているので、このようなことをこれからも続けていければと思います。本日はありがとうございました。

阿部――どうもありがとうございました。パネリストの方々に拍手あるいはリアクションボタンの拍手をよろしくお願いいたします。アンケートも既にいろいろな形で来ているかもしれませんが、もし余裕がある方はダウンロードして書いてください。

今回も本当に良いお話をたくさんお聞きしました。私の個人的な話を言うと、この授業は3日間あって、12月25日からやっているので、「また準備が大変だ」と思いながら、あまりメリークリスマスという雰囲気ではありませんでした。この最後の公開シンポジウムが終わると、1年終わったという感じがします。本当は安池さんなどは今、本業が一番忙しい時期なのかもしれないのですが、私は勝手にここで一段落したと思って、皆さんに「よいお年を」と言ってしまいますが、今年度もどうもありがとうございました。もし可能なら、また来年度もどうぞよろしくお願いいたします。

地域課題解決支援プロジェクト・各地の進捗状況

■松崎町

□フィールドワーク

松崎町は、地域課題解決支援プロジェクトにおいて最も早くから組織的に関わった地域であるが、2016年からは地域創造学環フィールドワークの受け入れ地となった。フィールドワークは「商店街のにぎわいの創出」「観光と防災の両立」の2テーマで実施され、現在は2年・3年の学生14名の体制で実施されている。2023年度のフィールドワーク日程は以下の通りである。

〇フィールドワーク・商店街グループ

・4月9-10日、6月23-24日、9月23日、10月27-28日、1月26-27日、3月29-30日

〇フィールドワーク・観光と防災グループ

・5月14日、6月24日、11月19日、12月20日、1月30日

□2030松崎プロジェクト

静岡大学（未来社会デザイン機構）、松崎町、松崎町観光協会、伊豆半島ジオパーク推進協議会が連携し2020年末から始めたプロジェクトで、フォーラムやワークショップ、13のゴールに分かれたグループによる活動、松崎高校の探究学習「西豆学」との連動事業、コミュニティスペースふれあいとうふや。での「ぷらっとカフェ」、「風待ちカフェ」等が実施され、プロジェクトについては中間報告会、最終報告会等も実施された。

■東伊豆町

東伊豆町における取り組みは、地域課題解決支援プロジェクト（第1期公募）への応募、同地を会場とした公開シンポジウム、東伊豆ガイドツアー等の実施を経て、2017年度後期からフィールドワーク受け入れへとつながった。2023年度のフィールドワーク日程は以下の通りである。

□フィールドワーク「地域の魅力の再発見と発信への取り組み～地域の人と外部の人との架け橋として～」

2年･3年の計9名の学生が東伊豆フィールドワークを実施中である。これまで実施されたフィールドワークの日程は以下の通りである。

・6月17-18日、7月8-9日、9月26-27日、11月25-26日、12月9-10日、2月6-7日

□フィールドワークから派生した取り組み

下記のようにフィールドワークから派生した取り組みも行った。

・首都圏の高校との高大連携フィールドワーク（3月7-9日）

・東伊豆魅力発見大学校（3月9日）

・東伊豆学生サミット（3月15日、ハイブリッド方式による開催）

■南伊豆町

南伊豆町では、第2期公募に対する課題提案をきっかけに地域創造教育センター、大学教育センターの教職員が商店街空き店舗やサテライトオフィスの視察、伊浜地区のまち歩き等を行っ

た。その後、地域創造学環の学生や静大FCのメンバーが南伊豆町で展開する地域活性化の取り組みに参加したり、伊浜地区での地域人材育成事業に参加するなど関係を深めている。昨年度末から今年度にかけて下記の事業を行った。
・トコリンピック参加（10月8日）
・公開シンポジウム「地域課題をめぐる取り組みの持続可能性を考える」招聘（12月27日）

■伊豆半島ジオパーク
伊豆半島ジオパーク推進協議会からの提案課題は、地域課題解決支援プロジェクト（第1期）のモデル事業に選定され、いくつかの事業が展開した。地域創造学環が開設されてからは、伊豆半島全体をフィールドとするフィールドワークが展開しており、2年・3年の計6名が活動している。2023年度の取り組みの日程は以下の通りである。
・4月1日、5月20-21日、6月10-11日、7月22日、9月18日、10月14-15日、11月11-12日、12月9-10日、3月9日

■御前崎市
課題提案自治体の一つである御前崎市では、2018年度から「御前崎市スポーツ振興プロジェクト～スポーツによる交流人口の拡大と産業振興の推進～」をテーマとした地域創造学環フィールドワークが展開し、2年・3年の計8名が活動している。2023年度の活動日程は以下の通りである。
・6月29日、7月16日、8月25日、9月22日、10月6日、10月14日

■賀茂キャンパス
静岡大学、静岡県立大学、静岡文化芸術大学等、県内大学が賀茂地域で様々な活動を展開できるよう、静岡県・賀茂地域局は昨年1月、下田市に「賀茂キャンパス（賀茂地域大学交流拠点施設）」を開設し、賀茂キャンパス開所式ならびに賀茂キャンパス活用推進委員会キックオフ会議を行った（成果報告書第5号参照）。

静岡大学×和歌山大学研究フォーラム

半島地域における交流・協働の拠点づくりを考える

日　　時：2023年2月19日（日）14:00～17:15
開催方法：下田総合庁舎（対面会場）とオンラインのハイブリッド開催
プログラム：
（1）開会挨拶　　日詰一幸（静岡大学長）
（2）第1部：報告
　報告1「静岡大学未来社会デザイン機構の展開」
　　塩尻信義（静岡大学理事・未来社会デザイン機構長）
　報告2「紀伊半島価値共創基幹（Kii-Plus）を中核とする多元的地域展開」
　　伊東千尋（和歌山大学長・紀伊半島価値共創基幹長）
　報告3「東部サテライトを拠点にした取り組みと今後の展開」
　　内山智尋（静岡大学未来社会デザイン機構講師）
　報告4「紀伊半島の歴史・文化を活かした地域と大学の連携」
　　吉村旭輝（和歌山大学紀州経済史文化史研究所准教授）
（3）第2部：パネル・ディスカッション
　パネリスト：上記報告者
　コメンテーター：小栗有子（鹿児島大学法文学部准教授）
　コーディネーター：阿部耕也（静岡大学地域創造教育センター長）
（5）閉会挨拶　　丹沢哲郎（静岡大学未来社会デザイン機構副機構長）

開会挨拶

日詰一幸（静岡大学長）

本日は大変な悪天候で足元も悪い中、静岡大学・和歌山大学が共催する研究フォーラムにお越しいただき、誠にありがとうございます。皆さまを心より歓迎します。また、伊東学長はじめ、和歌山大学の皆さまには、遠路この下田までお越しいただき、重ねてお礼申し上げます。

実は伊東学長とは何回もお会いしています。伊東学長はご出身が三島ということですので、地元にお帰りになったという感じではございますが、今日は和歌山大学を代表されて、ご発表ならびにパネルディスカッションへのご出席をいただきます。本当にありがとうございます。

本日は静岡県の賀茂地域局のご協力をいただいて、下田市にある賀茂キャンパスを使わせていただき、対面とリモートのハイブリッド方式で開催させていただいています。これまで2回ほど対面でと考えていたのですが、やはり新型コロナウイルスのことがあり、ようやく今日、このように対面のフォーラムを開催することができ、大変うれしく思っております。

特に静岡大学と和歌山大学の関係者の皆さまが、こうして対面で交流できるのは大変貴重な機会であり、同じ半島を抱える大学として、これからも引き続き、年に1回ということではなく、

時に応じて頻繁に交流させていただければありがたいです。

ところで静岡大学は、キャンパスのある静岡県の中部・西部だけではなく、東部や伊豆半島でもさまざまな活動を展開しております。最近は2016年にスタートした地域創造学環のフィールドワークの地として伊豆半島ジオパークの活動に関わったり、大学全体で取り組んでいる地域課題解決支援プロジェクトの舞台として、ここ伊豆半島でも教職員や学生がさまざまな形で関わったりしています。

このような活動をより活性化するために、2020年4月、本学では未来社会デザイン機構が立ち上げられ、その年の7月に、修善寺に東部サテライトを開設しました。このような私どもの動きに伊豆半島の自治体の皆さまにもいろいろな形で対応していただき、前回のフォーラムでもご報告した、2030松崎プロジェクトのような取り組みも生まれてきております。

和歌山の紀伊半島と同様に、この伊豆半島もジオパークに代表されるような非常に奥深い自然文化・歴史の宝庫ですが、やはり人口減少・流出、経済の縮減が特に進行している地域でもあります。先だって松崎町の町長さんとお会いしましたが、年間に生まれる子どもの数が一桁台で、人口減少が喫緊の大きな課題となっています。

このような地域ではありますが、非常に豊かな自然・資源を抱えており、それをいかにこの地域の振興に生かしていくのかということは、伊豆半島にとっても大きな課題であろうかと思います。その点において、先進的な取り組みをされている和歌山大学の皆さまのさまざまな知見をお借りしながら、私どもとしても伊豆半島にいろいろな提案をしていくことができたらうれしいです。

和歌山大学の皆さまは特に紀伊半島を舞台として長年、意欲的な活動を展開され、最近は紀伊半島価値共創基幹（Kii-Plus）を核にして、その活動をさらに拡充•進化させておられると伺っています。このような取り組みはまさに、われわれにとって先駆的な取り組みではないかと思っており、今日もいろいろな形で学ばせていただければと思っております。

また、フィールドワークの受け入れを経て、いろいろな新しいプロジェクトを共に立ち上げている伊豆半島の自治体の皆さまにもお越しいただいており、さらに今回はコメンテーターとして鹿児島大学の小栗先生にもご参加いただくことになっております。後ほどパネルディスカッション等でご登壇いただくことになるかと思います。相互に地域づくりや教育・学びの機会でさまざまな困難を抱える半島部に加えて、島しょ部も存在する鹿児島大学での取り組み、その知見と経験を基にコメントをいただければと考えております。

いずれにしても、二つの大学、二つの半島地域にとどまることなく、全国のいろいろな課題を抱える地域における、さまざまな取り組みの発信拠点となっていくことができればと思っております。引き続き長いお付き合いをさせていただければと思っておりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

報告１

静岡大学未来社会デザイン機構の展開

塩尻信義（静岡大学理事（教育・附属学校園担当）・未来社会デザイン機構長）

１．静岡大学未来社会デザイン機構とは

私からは、未来社会デザイン機構の展開のうち、特に今年度（2022年度）の活動についてご報告します。静岡大学は、地域と協働して、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に向けた活動を大学として総合的に進める体制を構築し、地域に住むすべての人々のウェルビーイングと持続可能な社会構築、分野横断的な教育研究の発展を実現するため、2020（令和2）年4月に未来社会デザイン機構を設置し、いろいろな取り組みを進めています。

この機構は、「バックキャストによる未来社会のデザイン」「多様なステークホルダーとのパートナーシップ（対話を重視すること）」「分野横断的なチーム単位で持続可能な事業を展開する」という三つの特色を持ち、地域連携・社会連携を進めています。バックキャストに関しては、最近ではいろいろなディスカッションの中でビジョンも考慮しつつ進めています。

未来社会デザイン機構の組織構成は、未来社会デザイン機構企画推進本部があり、それは防災総合センター、サステナビリティセンター、地域創造教育センターの三つのセンターから成っています。さらに実際の地域連携の東部での拠点として、東部サテライトを設置しています。

2022（令和4）年度から、サステナビリティセンターは5部門を4部門＋2チームの体制に変更しました（図1）。狭い分野あるいは内容で部門を設定すると活動しにくいため、教育・アウトリーチ部門、研究推進部門、連携推進部門、ダイバーシティ推進部門という大くくりにして、学内の教員等ができるだけ参加しやすく、かつ地域の皆さまとの連携を密に取れる窓口・ハブを目指して、地域連携を進めているところです。

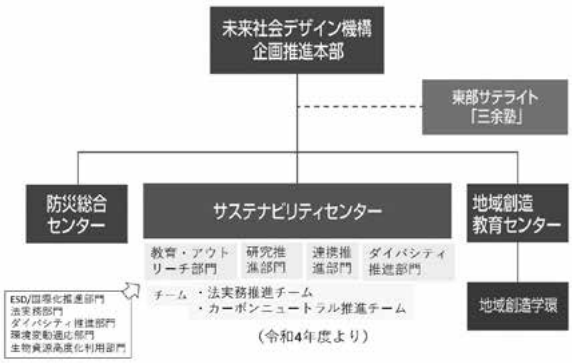

図1　静岡大学未来社会デザイン機構の組織構成

例えばサステナビリティセンターでは、カーボンニュートラルの取り組み、SDGs推進に向けた取り組みなどを行っています。防災総合センターでは、台風15号による静岡市の被害に関する緊急調査、2021年の熱海市土砂災害の検証に関する報告などを行っています。地域創造教育センターでは、地域課題解決支援プロジェクト公開シンポジウムや公開講座などを行って、地域との連携を強めています。

２．2030松崎プロジェクトについて

次に、企画推進本部と東部サテライト中心に展開している「2030松崎プロジェクト」をご紹介します。2030松崎プロジェクトは、松崎町の望ましい未来を町民の方々と一緒になって歩むため、松崎町、静岡大学、松崎町観光協会、伊豆半島ジオガイド協会の4者協定の下、2020年に発足しました。13の「2030松崎ゴールs1.0」に基づいたチームでの活動を開始しています（図2）。

例えば、ゴール1は「松崎の自然・安らぎ・体験のオンリーワンが育ち、何度でも来たくなる『中毒性』のあるまちになっている」、ゴール2は「『ささる』観光を多様な世代がプロデュースし、多様な発信とPRを展開している」です。「中毒性」「ささる」という表現は年が行っている者は使わない言葉です。実は、このゴールは、松崎町の中学生が提案してくれたものを、松崎町の将来に関心のある町民の方々、静岡大学の教員、学生たちが一緒になってまとめたものなのです。これは次代を担う若者が加わったプロジェクトです。

表1　2030松崎ゴールs1.0

1	松崎の自然・安らぎ・体験のオンリーワンが育ち、何度でも来たくなる「中毒性」のあるまちになっている。
2	「ささる」観光を多様な世代がプロデュースし、多様な発信とPRを展開している。
3	エコ・ツーリズムとサステナブル・ツーリズムが実現している。
4	地域の交通ネットワークと都市との相互アクセスが整備されている。
5	地域の資源・資産のユニークな価値が発見され、活用されている。
6	伝統の魅力が広く共有され、「祭り」などが継承されている。
7	のう（農）とりょう（漁・猟）の活動が受け継がれ、食べ物が新鮮でおいしい。
8	地区・世代を超えた人間関係が守られている。
9	子育てをしやすいまちである。
10	多様な選択肢のなかから、やりがいのある仕事に就ける。
11	都会的な飲食・買い物も楽しめる。
12	高齢者になっても活躍できるまちである。
13	三余塾の伝統が受け継がれ、市民たちの学び合いの場がある。

ここまでが昨年ご報告した内容です。その後の経過について、まずプロジェクト全体の内容がどのような形で進んでいるか、ワークショップの概要をご説明したいと思います。

2022年3月27日、4月17日には、松崎町のキャッチコピー「花とロマンの里」について検討し、松崎高校の生徒が1月19〜20日のワークショップで作成したものを基に「2030松崎ビジョン」を作成しました。その内容は、松崎町の次期総合計画策定のためのワークショップへ提言しました。

さらに、2022年5月27日、6月5日には、ゴールとチームを再編しました。再編に当たっては、松崎高校の探究学習で行われている内容と松崎プロジェクトがうまく融合・連携して、13のゴールsに加えて新たに五つのゴールを立て、現在「ゴールs2.0」という形になっております。新ゴールには防災、エネルギー、経済、職とケア、能力開発を加え、新活動チームとしては、防災、エネルギー、能力開発、高齢者など13のチームが出来上がりました。

2022年11月20日には、中間発表会で、プロジェクト・各チームの活動状況や課題の共有・検討を行いました。2023年3月19日には、年度最終報告会で、各チームの活動報告をしてもらうことになっています。

松崎プロジェクトのスタートは2020年で、既に2年近く経過し、より効率的・機動的にプロジェクトを進めるために、組織の再編を行いました。特にプロジェクトの主体性・民主性・協働・公共性・柔軟性・創造性を実現するためには、こういった地域連携プロジェクトの場合、町民主体の組織であることが重要なことです。代表に、次期総合計画策定を担う松崎町アドバイザーである竹之内教員に就任いただきました。プロジェクトの意思決定、情報共有を行う全体会を年2回、活動チーム同士やマネジメントチームとの情報共有、意見交換、方向決定を行う連絡会を2カ月に1回行うことにしました。マネジメントチームは2週間に1回程度行っています。

マネジメントチームは役場、静岡大学の教員・職員、ジオガイド協会、地域住民からなり、企画・取りまとめ、全体会や連絡会への提案を行います。事務局・庶務的機能を持っています。町民主体ということが松崎町の将来を考える上でとても大事ですから、全体会・連絡会も重要ですが、やはりマネジメントチームに役場、ジオガイド協会、地域住民の方々が入ってくることは非常に大切なことだと考えています。

各チームの活動については、農と漁・猟、三余塾、能力開発など、いろいろな勉強会やイベントを松崎プロジェクト全体の動きの中で共有し、より効果的なイベントになればと考えています。

さらに、2022年8月以降、松崎町の観光協会近くの町管理のコワーキングスペースで「ぷらっ

と2030カフェ」を月2回程度開催しています。金曜のお昼を挟んで5時間程度です。講師を招くなどして、多くの町民や学生などが集い始めています。もちろん講師を招く場合もありますが、形式的な場ではなく、町民の方々にもっと本音でいろいろな思いを語っていただける場となっています。そこには当然、静大生や静大の教員も参加しています。

松崎高校における探究的総合の時間である「西豆学」との連携もしています。松崎高校1年生全員（57名）を、インターンシップのような形でプロジェクトに受け入れ、体験的な学習の機会をつくっています。10〜12月に授業を実施し、1月に発表会を行いました。例えばあるチームは、車椅子での生活をしている高齢者が今までどおりにお墓参りをするにはどうすればいいかディスカッションしていました。

他にもいろいろな趣旨の活動があり、松崎町の将来について、高校生たちが探究学習の授業の中で考えています。高校生たちは実際に町を担っていく主体でもあるので、町の将来にとって非常にいい活動だと思っています。

松崎町からは新たに地域おこし協力隊3名が参加し、町との連携強化をしているところです。

3. 課題

いろいろな試みを行い、それなりの成果を上げつつありますが、当然のことながら課題はあります。

一つ目は、農と漁、エコツーリズム・サステナブルツーリズム、地域資源、三余塾における西豆学との連携など、活発に活動を展開しているチームや、新たなチームとしての活動を開始している防災、エネルギーチームなどがある一方で、活動をほぼ停止しているチームがあることです。さらなる活性化に向けてチームの統合・再編など、いろいろ仕掛けをしていく必要があると思っています。

二つ目は、やる気のあるメンバーはいても、協力メンバーや活動時間の確保、活動の方向性の設定、活動方法や資源の確立など、課題をうまくクリアできないでいるチームも多いことです。チームづくりやチームの運営にも課題があり、対応していく必要があると思っています。

三つ目は、勉強会・広報などの促進の工夫です。地域を知り、地域に認知されるプロジェクトとして、ぷらっとカフェは有望な取り組みになっているのではないかと考えています。

ここでは松崎プロジェクトに関して課題を挙げましたが、未来社会デザイン機構の実際の地域連携の現状に関しても、同じようなことがあります。未来社会デザイン機構の中での情報共有あるいは連携にも課題はありますし、一方で大学全体で考えたときに、未来社会デザイン機構は地域連携の一つの大きなエンジンではありますが、他の部局と連携することが、静岡大学の地域貢献を考える上でも、知の拠点ということを考える上でも必須のことだと思っています。いかに大学全体を知の拠点として地域連携に動かしていくのか、そういったところが大きな課題だと思っています。

大学全体の業務が非常に増える中、種々課題があることは承知していますが、地域連携も大学の活動として欠かせないものですから、今回の半島サミットで、いろいろな知恵や情報をいただければ幸いに存じます。

報告２

紀伊半島価値共創基幹（Kii-Plus）を中核とする多元的地域展開

伊東千尋（和歌山大学長・紀伊半島価値共創基幹長）

１．和歌山大学の概要

和歌山大学は、新制の国立大学として昭和24年に設置されました。その当時は学芸学部と経済学部だけの、いわゆるEE大学という形で発足しています。その後、地元からの要望により平成7年にシステム工学部ができ、さらに平成20年には国立大学で初めて観光学部を設置しました。

学部学生が約4000人、大学院生が約500人で、おおむね4500人の規模の大学です。それを支える教職員は全部で450名程度なので、静岡大学と比べるとかなり小さい大学です。

和歌山大学は、大阪府と和歌山県の境界辺りに位置しています。和歌山県全域と大阪府の南部をわれわれのテリトリーとしているので、南紀熊野サテライトと岸和田サテライトを置いています（図1）。和歌山県からの進学者数は約4分の1で、近畿圏の方が多く、約60％は大阪・兵庫から来ます。全国からの進学者は少なく約14％で、和歌山ローカルで活動しています。

図1　和歌山大学のキャンパスの位置

4学部構成で、教育学部、経済学部、システム工学部、観光学部です。教育学部は、人口減少が著しく、学校が複式をしていることが多いため、へき地・複式教育に重点を置いています。最近では小規模校の活性化支援事業をしています。

経済学部はかなり歴史のあるところですが、最近、エキスパート・コースを設置しました。特にアグリビジネス分野に重点を置き、第6次産業を基軸にして活動しています。

システム工学部は、国立大学の中でもかなり早いときから1学科制を取っています。1学科の中に10メジャーあり、2023年4月から8メジャーに改編します。10メジャーのうち二つのメジャーを学生が選択して卒業していくようなシステムを取っています。私が学部長のときに大胆な変更をして、現在の形になりました。これから先、産業もかなり流動化していくので、昔ながらの機械工学だけ、電子工学だけではなかなか対応できないところがあるということで、複数の専門分野をつくるべきだという考え方の下に1学科制を採用させていただきました。

観光学部は、国立大学で唯一、学部から博士課程まで持っています。学術的な部分での観光学を追求しておりますが、その中にも地域連携プログラム（LPP）を置いて、地域活性化にも取り組んでいるという特色を持っています。

２．地方国立大学に求められること

国立大学は当然のことながらヒエラルキーがあり、旧帝国大学、医学部を持つ大学、地方国立大学に分かれています。静岡大学と和歌山大学は、医学部を持たない中規模新制国立大学という分野になります。この大学の存在意義はどうなっているかというと、元々は日本国内で普

遍的な高等教育・先端研究を推進するということが国立大学の役割でした。しかしながらつい最近、数年前に新しい価値が付けられました。一つ目は、持続可能でインクルーシブな経済社会システムの実現に寄与することです。二つ目は、社会変革の原動力です。これは高等教育・先端教育とも関係があります。三つ目は、これは国立大学全般に言えるのですが、多様なステークホルダーへの対応です。多様なステークホルダーへの対応といった場合、大きな大学では産業界あるいは世界的な学会になりますが、地方国立大学の場合は当然ここには「地域」が入ってくることになります。地域といっても、地域住民も地域企業もあり、地域の自治体もあります。そのようなステークホルダーへの対応が非常に重要になってくるということです。

そのとき和歌山大学は、どのような考え方に基づいて地域連携をするか、国立大学としての役割を果たしていくかというと、社会に新しい価値を生み出し、大学としての価値を高めるブランディングをしていこうと考えています。戦略の一つ目は、大学の強み・価値の理解です。日本の国立大学として初めて観光学部を設置し、システム工学部で他には類を見ないような教育システムを取っているという強みがあります。二つ目は、社会ニーズの把握です。残念ながら、過去には、大学は象牙の塔といわれていたように、実は社会ニーズにあまり見向きをしなかったところがあります。社会のニーズと大学の強みとのマッチングが大事です。三つ目は、大学の関与機会の創出です。大学側から働きかけていくということも当然あるのですが、大学が求められているものに対して大学が手を出していくことも必要です。この三つが重なったところに新しい価値の共創が生まれてくると考えています。われわれはこのような活動で価値を創造し、さらに価値を展開し、その結果によって社会インパクトを与える大学ブランドの確立ができると考えています。

3. 紀伊半島価値共創基幹（Kii-Plus）

そこで地域連携をどのように考えるのかということで、私が学長になった後につくったのが紀伊半島価値共創基幹（Kii-Plus）です。Kii-Plusは、自治体や企業等とのパートナーシップによる教育研究および社会実装を通じて、共に新たな価値を創っていく取り組みを実践する組織と定義しています。ここで重要なのは、「共に新たな価値を創る」というところです。従来型の地域連携は、大学側がプレーヤーになっていて、大学の教員が地域に入っていき、研究活動の一環として地域連携をするというような考え方がかなり多かったと考えています。それでは、十分な人的リソースがなければ、その地域連携は必ずしぼんでいきます。大学運営費交付金はなかなか伸びず、人件費はどんどん上がっていくので人が減っていきます。減っていく中でどうやって地域連携を継続的に行っていくかといったときに、「大学だけではやらないという対応で行こう！」というのが、基本的な考え方です。

そのように平たく言ってしまうと、「では、大学は何もやらないのか？」という話になるので、われわれは価値を共創するということを主体に置くことにしました。その中で何かコアを置かなくてはいけないということになります。そのときに、和歌山県は農業県なので、食と農にかかる地域づくりや都市農村交流の取り組みがコアになります。これを実施するために、食農総合研究教育センターを置きました。さらに和歌山県は、静岡県と同様に地震災害が予見されています。南海トラフ地震が来ると、和歌山県の沿岸は津波であっという間に水没してしまうので、やはり防災は避けて通れません。ということで災害科学・レジリエンス共創センターを置き、この二つをコアにしてプロジェクトが進んでいます。

Kii-Plusのコンセプトは、柿の木に例えることができます（図2）。Kii-Plusの活動が結実して実がなります。大学としての実は何かというと「研究成果が出た」「論文を出せた」ということ

になるのですが、それだけでは地域にとってメリットがあるかどうか分かりません。われわれが考えているのは、なった実が熟して下に落ちること、すなわち社会実装です。実装することによってさらに肥沃な土地ができ、そこから養分を吸い上げさせていただいて、全体の好循環、「資金」と「人材」と「考え方」の好循環をつくっていくというのがKii-Plusのコンセプトです。その実現のために、さまざまなマネジメントを行っています。

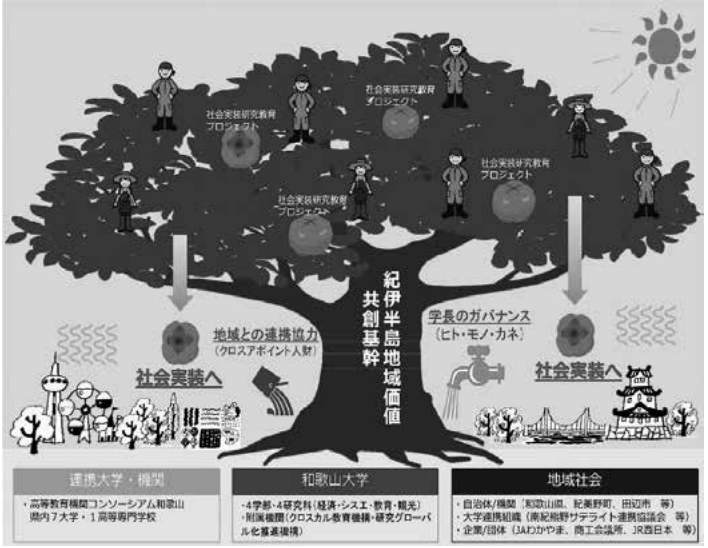

図2　紀伊半島価値共創基幹（Kii-Plus）のイメージ

Kii-Plusを構成するのは、価値共創オフィス、食農総合研究教育センター、災害科学・レジリエンス共創センター、紀州経済史文化史研究所、生涯学習・リカレント教育推進室、サテライトです。ヘッドクォーターである価値共創オフィスで大体のことを振り分け、具体的な活動はそれ以外の部分で、社会実装研究教育プロジェクトという形で行います。ここをどうやって回すのかというと、地域連携統括役（オフィサー）というものを置いています。自治体幹部OBを採用しています。本日参加している小川雅則特任教授は田辺市幹部のOBです。和歌山市幹部OBの方も雇用しています。このような人たちの目・耳を通じて、われわれの活動と地域のニーズとのマッチングを図っていくことが、われわれの活動の一つの特徴です。

もう一つの特徴は、価値共創研究員制度です。これは自治体・団体・企業から在職者を派遣してもらい、10～20％のエフォートで、1～2週間に1日だけ和歌山大学の研究員になっていただくというものです。この活動の面白いところは、実際に自分の役場での仕事を持ちながら大学に来ることです。通常、派遣になると、1年間や半年間行ってくるように言われ、自分の持ち場を離れ、その間、別の仕事をします。ところが、価値共創研究員には、実際に役場や会社で仕事をこなしながら、1日だけ大学に来てもらいます。そこで自分のしている仕事の課題を、和歌山大学の教員と共に解決していくという活動をさせていただいています。この活動により、かなりの成果が出ています。

このような活動を基に、われわれは地域連携の和歌山大学モデルをつくっていき、それをさらに発展させて半島支援まで持っていく。これにより、人口減少であえいでいる地域を元気にしていくような活動にしていきたいと考えているところです。

少し具体的に内容を示します。一つ目はトップ対話です。和歌山県下には30市町村があります。そして大阪府の南部、泉州には8市町があります。そこの首長と学長との対話を行い、既に二巡しました。コロナ禍がなければ本当は三巡ぐらいできているはずでした。その中からさまざまなニーズが出てきました。これはちょっと無理だろうというニーズも当然ありますが、話の中で面白いものが出てきて、成果も出てきています。例えば太地町では、太地町の中の課題解決に向けた学生のフィールドワークを実施しました。古座川町では、2011年に発生した紀伊半島大水害の体験談記録化（オーラリティ）を行いました。オーラリティというのは、要はその人たちの会話を残していくということです。岬町では、スポーツツーリズムモニターツアーの学生協力を行いました。このような中でもかなり面白く、成功したのが由良町のビジネスコ

ンテストです。地域連携というと、教育的なものが結構出てくるのですが、これも教育的なのですけれど、ビジネスコンテストというのは非常に面白い活動となり、かなりいい結果になりました。後ほど説明します。

二つ目は、価値創造研究員による人材交流と共創プロジェクト推進です。日本遺産・葛城修験の観光訴求力についての調査研究、県社協・市社協と連携した災害ボランティアセンターの設置訓練を行いました。今、「むすぼら」という学生ボランティア組織を整備しています。2021年の夏に和歌山市の紀の川をまたぐ水管橋が落ちてしまい、北部地域に水道水が全然来なくなったのです。ところが、その辺りに住んでいる人たちはご高齢の方が多いので、水を運ぶといっても10L運ぶだけで大変です。そこに本学のボランティアサークルが関与し、水を運ぶボランティアをさせていただき、うまくいきました。「ご近所観光（マイクロツーリズム）」も和歌山電鐵と和歌山市との連携で実施しました。実はこの取り組みが和歌山市で予算がつけられ、市の施策になっています。

三つ目は社会実装教育研究プロジェクトの展開です。これはさまざま行っています。「外国につながる子どもへの教育支援プロジェクト」は、和歌山にも外国から労働者が来て、労働者の子どもの教育支援は日本語ができなかったりするのでとても難しい問題であり、その人たちのためのプロジェクトです。「食祭テラスプロジェクト」は阪神百貨店と共創で行い、阪神百貨店の1階フロアのブースで、本学の大学生が和歌山のうまいものをプロデュースする「胸キュン！きのくに」を実施しました。「熊野古道街道プロジェクト」では、日本ユニストと共同で、歴史・文化の研究あるいは熊野古道の付加価値化を行いました。これらは地域ニーズ型プロジェクトですが、提案型プロジェクトも行っています。

先ほど述べた、トップ対話で出てきた和歌山県由良町でのビジネスプランコンテストは、かなりうまくいきました。これは実は私の方から町長に提案したのです。「どうやったら活性化するだろうか、学生にも来てもらいたい」ということだったので、「じゃあ町長、ビジネスプランコンテストはどうですか」と提案したところ乗ってくれました。トップ対話から実現に漕ぎ着け、2021年に開催したところ、全国から39件の応募があり、本学の学生も結構いて、多数の学生が現地で実地調査をしてくれました（図3）。そのようなことにつながっていった、非常にうまくいったエポックメーキングな活動になりました。

図3　和歌山県由良町でのビジネスプランコンテスト

今申し上げたようなKii-Plusの活動は、かなり示唆的なものがあります。つまり、地域連携を地域との共創型でやっていくことによって、地域連携に新しい価値が生まれてくるということです。地域とのパートナーシップの強化、組織対応力の強化、学生の地域魅力理解の促進ということが根底にあって、それを地域課題の取り組みや地域の価値の創造のようなものにつなげていく。あるいは、過疎地域には学生がいないのです。恐らく伊豆半島の南部も同じですが、大学がないので「大学生なんて見たことがない」とみんな言うのです。そこに学生を入れていくことによって地域の活性化が起こります。ですから、学生を巻き込むプロジェクトをどうやって作っていくのかということがポイントになります。そしてもちろん、共創によって地域の再生をしていきます。地域の魅力を理解して生かす力を伸ばしていくことが、地域連携にとってプラスになるということです。つまり、地域魅力をイノベートする人材を育

成することが、地域連携の根幹に関わるものではないかと考えています。

そこで気を良くして、さまざまなことをさせていただいています。これは2020（令和2）年に文部科学省の概算要求を通ったものですが、「地域とのパートナーシップに基づく国際理解教育の推進」という、留学生を地域で育ててもらおうという取り組みをしています。これはインバウンド対応としては非常に面白く、外国人が来ていないところでは、観光地の標識やJRの駅の標識の在り方は実は日本人対応だけで、外国人にはまったく分かりません。ところが、われわれのところにいる留学生を連れて行き「ここをこうしたら」「ああしたら」と意見をもらうことで、地域のインバウンド対応ができてきます。

ただ、それをやっただけでは留学生の便利使いという話になります。留学生が何を求めて日本に来るかというと、実は日本文化をかなり知りたがっているのです。私はつい一昨日ぐらいまでベトナムにいて、ベトナムの大学とも協定を四つぐらい結んできたのですが、とにかく日本語と日本文化を学びたい学生は山ほどいるのです。そこでわれわれが考えたのは、日本語と日本文化を核とする留学生の教育です。そのときに、和歌山というのは地域の文化遺産がものすごくあるので、これを活用すれば留学生にとってもおいしいですし、地域にとってもインバウンド視点が取れるという話になるので、そのようなやり方をして今、国際イニシアティブ基幹というものをつくり、そこで活動が始まっています。

和歌山には和歌祭という祭りがあり、そこの唐人行列に留学生がかなり参加してくれていて、留学生はとても面白がっています。衣装などは和歌山大学がお金を出して、全部ではありませんが作らせていただきました。また、日本文化の体験などをすると、留学生はとても喜びます。このような活動を地域で展開し、地域のお祭りに留学生を投入していくことができると、とても面白いことができるということがここから分かりました。

さらにもう一つ、由良町のビジネスプランコンテストに気を良くして、今度はアントレプレナーシップ教育も地域連携で行うことを考え、2023年4月から、イノベーションイニシアティブ基幹というものをつくります。地域イノベーションはなぜ起こるかというと、通常イノベーションというと技術イノベーションですが、技術イノベーションだけ持っていても仕方がありません。つまり、マインドが良くなければいけないのです。よく私が言うのは「パトスとロゴスの両方が要る」ということです。パトスがなければ何も起こらないし、ロゴスがなければ、あるいは技術的なベースがなければ何もできません。両方そろわなければいけないのです。その人材イノベーションを起こすところを、ぜひやりましょうということです。アントレプレナーシップ教育は、普通、大学生だけで行うのですが、そこに地域の人たちを入れて、アントレプ

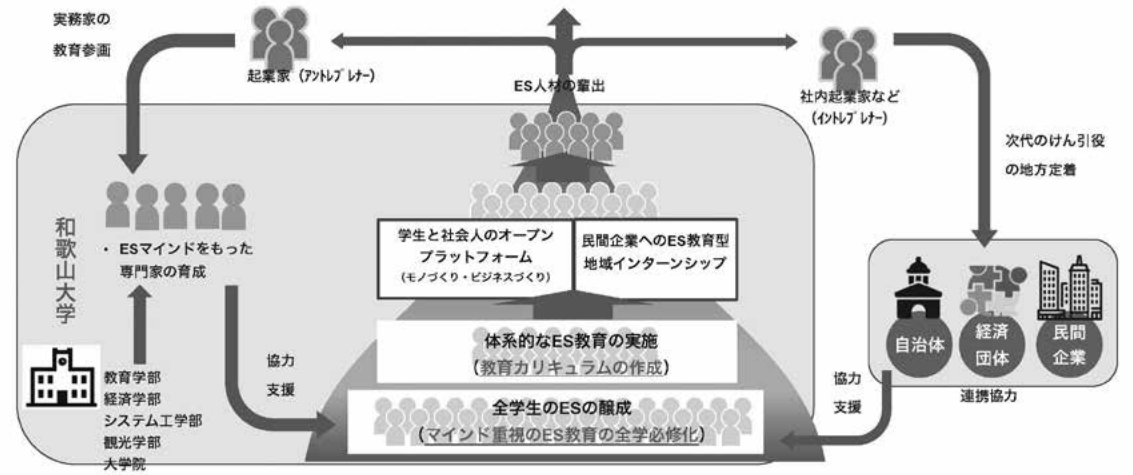

図4　人材イノベーションを通じた地域イノベーションンの創出

レナーシップ・リカレントと称して、地域の人たちも巻き込んだ形のリカレント・リスキリング教育をさせていただくのです。そのために、和歌山大学で既に持っていた学生自主創造科学センター「クリエ」のラボ、学生が自分たちで例えばソーラーカーレースなどをしているのですけれど、そこにも社会人が入れるようにします。社会人と学生が学べるような形にするために、これらを整備するというプランです（図4）。

実は過疎地・人口減少の地というのはオープンスペースが結構あるので、チャンスの場なのです。そのチャンスを生かす、マインドを持っている人たちをつくっていくことこそが地域連携の核になっていくという考え方です。アントレプレナーシップ人材を輩出することで起業家が生まれ、起業家がまた地域を活性化し、さらに大学生を教えていくような好循環ができると地域活性化が進むというような絵を描いています。

4. 価値共創の場としての地域拠点

本日の課題でもある地域拠点の話を最後に少しだけします。地域拠点には大きく三つの役割があると考えています。必ずしもきれいに分けられるものではありませんが、大学の出先機関としての役割、大学の活動拠点としての役割、コミュニティセンターとしての役割です。大学の出先機関は、大学の戦略に基づいて設置するものであり、出前授業など大学の研究教育をベースにしたものです。活動拠点とは、基地になる場所です。そうなってくると、当然のことながら大学の教育研究の場となります。コミュニティセンターについては、大学とコミュニティの連携の場としての役割、あるいは私はソシオフロントとよく言っているのですが、社会に対する接点としての役割が非常に重要になってくると考えています。

そこで、われわれの持っているサテライトをもう一回見直してみると、南紀熊野サテライトと岸和田サテライトがあります。そこは生涯学習の展開拠点でした。コーディネーターを配置して、そこで地域連携の推進をやってきましたが、明らかに大学の考え方に基づいて置いていたので、サテライトだけではうまくいかないことも多々出てきました。投じた予算の分だけ成果が上がっているのかということを考えなくてはいけなくなってもきました。生涯教育は当然大事でやらなければいけませんが、そのためにそこに何人も人を置けるかというと、なかなか置けません。そのような問題が出てきました。

そこで、われわれは地域拠点を価値創造の場に変えるという考え方を取ろうと考えています。そのときに重要なのは、地域拠点をオープンセンター化することです。つまり、地域に対して開かれた場とすることによって、大学だけでなく地域が使ってくれることになり、そこでコミュニケーションができるのです。そうすると社会・地域のニーズが分かるので、その対応をこの地域拠点でやるということが大事になってきます。

和歌山大学には、1963年に和歌山大学の学生の交流の場として設置された松下会館というものがあります。これは松下幸之助さんのご寄付でつくられたところです。ここにも生涯学習教育センターが置いてあり、今日も来ている西川一弘先生がここで活動していました。実はここは古くなったのでもう使うのはやめようと、私の前任の学長が決めたのですが、いろいろ考えてみると使い勝手がとてもいいのです。そこで、考え方を変えました。ここを先ほど申し上げたソシオフロントとして使いたいということで、社会人のリカレント教育などを行う場として整備を進め、2月の初め頃にリニューアルオープンしたところです。

そこで行ったのが、由良町のビジネスプランコンテストの2回目です。1回目は由良町で開催したのですが、由良町長が2回目を松下会館で行ってくれました。オンラインも併用しています。このような我々の地域拠点の考え方を基にすると、地域が大学の施設を使ってくれるのです。

われわれも協力はしているのですが、別に「使っていいですよ」と言っただけです。大学の名前も特には出てきていませんでした。そうすると、先ほど申し上げたソシオフロントとしての機能が出てきます。社会と大学の接点、特に社会人と学生の接点の場ができることが重要です。それから地域のニーズをこのようなところでつかむことができ、これが重要なのですがリカレント・リスキリングの場にもなります。これによって、地域をリブートしていくことができます。そして、アントレプレナーシップ教育をこのようなところで行うことによって地域展開ができるということで、地域連携を多元的に展開することができます。いろいろな種類の地域連携を、Kii-Plusをコアにして発展していくことにより、地域との価値の共創ができるというのが、われわれの考えている地域連携です。

その先の話ですが、われわれは、大規模拠点型から分散型拠点型に変えようと思っています。特に、地域のコワーキングスペースを拠点化すれば、元々皆さんで使うところなので、労せずして大学と地域社会のミキシングができることになります。さらに、その場所を学生のフィールドワーク基地として使わせていただくことで、非常に重要な活動ができてきます。そう考えたときに、大きな拠点を持つよりも小規模分散型拠点をネットワーク化した方が早いという話をしていて、空き家を活用できないかという話を最近しています。そのような形で、私たちの地域連携拠点は今、小規模分散型に動いているところです。

地方国立大学の役割としての地域連携、価値共創拠点の在り方、中核拠点型展開から分散型拠点展開へということをお話しさせていただきました。

報告３

東部サテライトを拠点にした取り組みと今後の展開

内山智尋（静岡大学未来社会デザイン機構講師）

私は東部サテライトに来て1年余りが過ぎたところで、まだ来たばかりの教員です。出身は伊豆半島の付け根辺りにある清水町で、韮山高校出身です。高校卒業後は東京の大学に行き、大学のときに中国に留学したのをきっかけとして、長い間、中国のJICAの仕事をしてきました。その間、日本に帰ってきてNGOで働いたり、名古屋の市役所にいたりと、行ったり来たりしていたのですが、また中国に渡って、ちょうど2年前に戻ってきて静岡大学で仕事をする機会に恵まれたという形でサテライトにおります。

中国ではずっと仕事をしながら地域福祉をテーマに研究してきて、専門は地域福祉です。今、教員私一人と、事務職員の石川さんと2人でサテライトにおります。少しずつ地域とのつながりをつくったりしながら、大学のサテライトの在り方を模索している状況です。

東部サテライトには運営に携わる先生方が数名おられます。今日も参加されている丹沢哲郎先生、山本隆太先生、小山真人先生、岸本道明先生といった先生方にいつも相談しながら運営しています。今日はサテライトにおける活動全般についてご紹介します。特に伊豆半島ということで、ジオパーク関連の事業に深く関わる活動も重要だと認識しています。

1．東部サテライトについて

2020年7月に、伊豆半島の中央部にある伊豆市の狩野川のほとりに静岡大学東部サテライト「三余塾」が設置されました（図1）。元は幼稚園で、幼稚園の建物の1室を大学のサテライトとして活用しています。全部で4部屋あります。他に静岡鉄道やスルガ銀行が入っています。理念は、「持続可能な社会とすべての人のウェルビーイングを目指し、未来社会のデザインに挑戦する」です。

図1　東部サテライトの位置（図中●印）

2．東部サテライトの主な活動

東部サテライトは、三つの場としての機能を果たすことが期待されています。一つ目は、協働のパートナーを見つける場です。人と人、ニーズとシーズ、プロジェクト同士を結び付けるという役割を果たす場です。二つ目は、学びの場です。市民や小中高生に対する公開講座を定期的に開催したり、地域づくりに役立つ講座も提供したりする場です。三つ目は、情報を得る場・仲間に出会う場です。新しい出会いや自由な対話があり、出かけやすく居心地の良い場所を提供する場です。

私は東部サテライトを「子どもから大人まで、地域に生きる私たちが学び合い、つながり、エンパワーされ、そして未来を共に築いていくためのプラットフォーム」となることを目指したいと思っています。

具体的な活動をご紹介します。協働のパートナーを見つける場としての取り組みは、まず「伊豆未来デザインラボ」があります。これは元々、狩野ベースに入る静大、スルガ銀行、静岡鉄道の3者が情報共有をする場として2020年8月に発足しました。岸本先生が中心になって立ち上げられたと伺っています。この会のメンバーがどんどん増え、今は約15社の企業が参加し、全部で約30人が毎月1回ミーティングをしています（図2）。この場で、企業が取り組む新しい動向や、SDGsを意識した取り組みなどを紹介し合って、お互いに刺激を受けながら、新たなコラボレーションが生まれたりしています。

図2　伊豆未来デザインラボ開催風景

「伊豆ビジネスセミナー」は、午前中の伊豆未来デザインラボに参加した企業が、今度は講師となって話をするセミナーです。伊豆半島の商工会や自治体を通じて募集し、個人事業主、民間企業、団体、NGOの職員など、いろいろな参加者がいます。約20名が集まって話を聞きながら、自分たちが直面している課題等も共有します。講座を聞いた後にグループワークをするのですが、その場で自分の課題をグループの人に持ちかけ、それについて一緒に話し合うような交流の場を持って課題解決を目指すという取り組みを全9回行いました。これはうまくいったというわけではないのですが、このような場を持てたことはとても良かったと思います。ただ、最初は約20名いた参加者が最後は5名になってしまいました。何か課題があったわけですから、ここは教訓として改善していかなくてはいけないと思っています。

来年度も引き続き、このようなセミナーの場を持ちたいと思っています。来年度の活動としては、伊豆半島の13の市町村の首長に呼びかけ、地域の課題などいろいろな話をしてもらい、そこに午前中のラボに参加している企業や他の関係者を呼んで、各自治体の課題を共有し、それに対する解決策をみんなで出していくような場にしたいと考えているところです。

また、大学生の取り組みに対する期待も高く、学生のアイデアを聞きたいという企業の方も多いので、学生を呼んで一緒に交流の場を持つなど、大学として何ができるかということを明確に示していく必要があります。企業と連携といってもどのように連携したらいいか分からないという実情もあり、やはり大学として、どのようなシーズがあるのかということを明確に示していくことも必要だと思っているので、企業の方との交流の場で、大学からの情報提供も積極的にしていかなくてはいけないと考えています。

学びの場としての取り組みには、公開講座があります。2022年度は「多彩な視点から伊豆を学ぶ・知る」というテーマで、5回にわたって公開講座を実施しました（図3）。延べ300名以上の人が、オンラインと対面で参加してくださいました。講座内容は、火山がつくった中伊豆の大地、伊豆の地域学習とジオパーク、伊豆半島における土砂災害、伊豆から考える地域の文学文化、伊豆の地域福祉のあり方です。さまざまなテーマで伊豆について学ぶという視点で実施しました。

図3　2022年度公開講座チラシ

賀茂キャンパスにおける市民向け講座「日本人の目からみた中国人と生活事情」も行いました。私が中国に長くいたことから、賀茂地域は中国人の観光客が非常に多いので、現地の人たちにもっと中国のことを知ってもらう機会をつくろう

ということで、私が中国の生活事情について、中国語講座を交えながらお話しする機会を3回持たせていただきました。3回目には中国にある旅行会社の人ともオンラインでつないで、この地域で「ジオガシ」といってジオサイトの地層そっくりのお菓子を作る方にも自分の事業について紹介してもらったりして交流しました。ちなみに、このジオガシは下田の道の駅で購入できるそうなので、ぜひ帰りに寄ってみて、お土産にしていただいたらいいかと思います。ただ、参加者が非常に少なく、3回で延べ約30名なので、ここはちょっと残念だったと思っています。

情報を得る場・仲間に出会う場としての活動には、住民対象の勉強会があります。一つは、2022年3月に開いた、狩野城に関する勉強会です。われわれのサテライトに住民の方が古文書を持って訪ねてきたのがきっかけです。伊豆の狩野城、狩野氏の山城の跡として有名なところですが、結構謎が多いところで、それに関する勉強会を東部サテライトで、小山先生が中心になって企画されました。歴史の先生などをお招きして勉強会を開き、現地ツアーも行いました。

もう一つは、2022年11月に開催した「いま伊豆古道を学ぶ、歩く」です。山本隆太先生が中心になって企画されました。狩野城の勉強会に参加したメンバーの一人が伊豆古道、昔、修験者が歩いた伊豆辺路という道を歩いていて、その人がサテライトに「それをもっと広めたい」「もっとみんなに知ってほしい」と相談に来ました。そこで山本隆太先生が勉強会を企画して、このような会を持ちました。國學院大學の先生にも講師になっていただき、伊豆古道について学ぶ機会をつくりました。

活動の二つ目は、2030松崎プロジェクトです。先ほど塩尻先生から、ぷらっとカフェが今後いろいろな場として有用ではないかというお話を最後にいただきましたが、本当に私もそうだと思っています。ぷらっとカフェをコワーキングスペースで月に2回開くことで、チームの人が本当にぷらっと訪れ、自由に交流して、その前を通りかかった住民も入ってきたりします。また、静大のフィールドワークと松崎プロジェクト自体は、これまで交流はあまりなかったのですが、このカフェが開かれたことで、フィールドワークの学生が2回ほど訪ねてきました。学生が実施しているフィールドワークの状況をわれわれも把握でき、プロジェクトの状況も伝えることができ、非常にいい情報共有の場になっていると思います（図4）。簡単な勉強会なども開いています。このような場を通して情報が共有されて関係が強化され、ネットワークも広がっていきます。もちろんチームごとにそれぞれ定期ミーティングをしたり、勉強会をしたり、西豆学（さいず）で高校との協働もあります。そのようないろいろな活動をしながら、それぞれのチームが、チームのゴールに向かって動いている状況です。

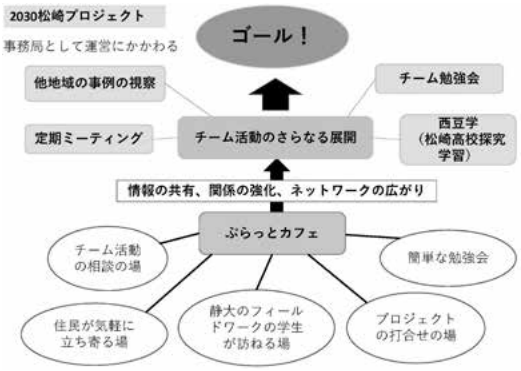

図4　2030松崎プロジェクトの展開

次に、三つの場にあまり当てはまらないというか、位置付けが難しかったものを紹介します。高大連携の一環として、高校における探究学習への関わりをしています。伊豆市の伊豆総合高校で行われている「総合的な探究の時間」の授業に、ぜひ大学生に来てほしいという要望がありました。そこで静大の大学生6〜7人が行き、2年生の授業の中で講師となって、パワーポイントの作り方、インタビューの仕方などの技術的な授業を行い、グループワークをしてもらいました。また、1年生が地域の人にインタビューに行く前のグループワークに大学生が入って具体的にアドバイスするようなサポートを行いました。

これが、これきりで終わらないようにしなくてはと思っています。今年度は単発で大学生が

授業に関わるということで協力しましたが、2023年3月に高校探究学習の探究サミットを開催する予定です。伊豆半島にある高校46校すべてに「探究学習の成果を発表しませんか」と呼びかけました。実際に今の段階で参加してくれるのは10校ぐらいですが、静岡大学の先生がファシリテーターになり、高校からの探究学習をテーマ別に分けて、分科会形式で探究の成果を発表し合って交流するという会を持つ予定です。来年度もPBL活動が本格化する中で、大学としてももう少し深くカリキュラムにも関われるような取り組みができたらと思っているところです（図5）。

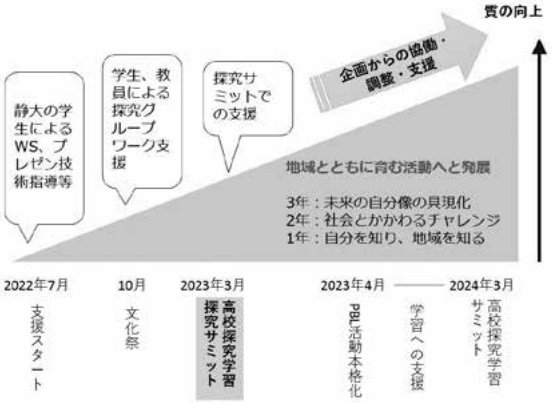

図5　高大連携の発展のイメージ

現在、松崎町でプロジェクトを行っていますが、将来的にはサテライトがある伊豆市で同じような取り組みをしたいと思っています。伊豆総合高校での総合学習への関わりを切り口に、地域とのネットワークもつくって、最終的には伊豆市とのプロジェクト展開まで持っていきたいと計画しています。

これは、また別の視点からの探究学習への関わりですが、伊豆市にあるNPOサプライズという団体が伊豆市の委託を受けて、伊豆市に住む高校生を対象に探究学習のサポートを行いました。この会は伊豆市に住む高校生を対象にした探究学習の支援ということで、全4回にわたってセミナーを開き、われわれはアドバイザー的な位置付けで、ディスカッションにアドバイスするようなサポートをしました。最終的に高校生10名が、自分の探究のそれぞれのテーマで伊豆市長に提案するということで、ちょうど先週、伊豆市長もこの会に来て、高校生のプレゼンを聞きました。

本当に面白い視点がたくさんあって、高校1年生の子が、伝統行事をどうしても残したい、伝統行事は本当に大事だし、自分も参加したい思いがすごく強いのに、区の伝統行事が高齢化で継続が難しい、ではどうしたらいいかということで、若者のメンバーを募集して自分たちがお手伝いする仕組みをつくりたいと区長に掛け合いました。

また、修善寺駅に緑がもっと欲しいということで、キュウリのカーテンを作り、それを修善寺駅を通るみんなで育てていくというプロジェクトや、伊豆市のお土産をどうやって売れるものにするかというプロジェクトもありました。静岡というと「うなぎパイ」が有名で、なぜうなぎパイなのかということで、うなぎパイの戦略と伊豆市のお土産の戦略を比較して、伊豆市のお土産をどうやって売ればいいのかということを自分なりに分析し、提案していました。

さらに、伊豆市の観光魅力アピールがいかに駄目かということを分析して、それを改善していくために、自分たち若者の声を聞いてほしいというプレゼンテーションもありました。とても熱い思いの高校生がたくさんいて、本当に地域の宝物だと思いました。

このような声を、私たちも大学としてきちんと受け止め、それをつないでいく必要があるということを、強く思います。具体的にこれからどうしていくかということは、また考えていきたいと思っているところです。

次に、伊豆半島ジオパークとの連携とです。小山先生や山本隆太先生が個別にジオパークとやりとりをされて、いろいろな連携をしています。ジオガイドを養成する事業の講師となってジオガイドの養成に携わる、ジオパークで行うイベント等に東部サテライトとして協力する、そのような連携をしているところです。ここも来年度、どうやってさらに連携を強めていくか

ということを、今後話し合っていきたいと思っています。

次に、ローカルラジオ局との連携です。伊豆市にあるFMISというラジオ局でサテライトの活動を紹介させてもらったり、伊豆市でフィールドワークの活動をしている学生と対談してもらったり、先ほど紹介した伊豆総合高校での探究学習への関わりを、学生へのインタビューを交えながら紹介したりということをしてきました。来年度は大学の先生がラジオ講座的なもので、この活動に関わることを企画しています。45分ぐらいのラジオ講座をやろうかという話をしているところです。沼津信用金庫など、企業とも連携しながらやれたらいいと思っています。

その他にもいろいろあります。サテライトというのは常にオープンにしている場所なので、地域からのいろいろな声があります。今、そのすべてに応え切れていないというのが課題です。地域の梅祭りを盛り上げたい、天城の森林事業者と連携した環境教育を行いたい、サテライトスペースを活用した子育てママへの支援をしたいなど、本当にいろいろな声があがってきています。サテライトとして、このような声を丁寧に受け止め、それをつないで、もちろんわれわれだけでは対応できないので、このようなことに対して一緒に考え、活動を企画したり、一緒に実践したりする過程でいろいろな先生を巻き込んだり、地域にある多様な資源を巻き込んだりして、これからも地域と一緒にいろいろやっていきたいと思っています。

学生の関わりがあまり見えなかったかもしれませんが、学生はいろいろな形で関わっています。ただ、サテライトには学生がいないので、学生を静岡から連れてくるのは非常に難しいと感じているところです。ジオパークのフィールドワークもありますし、そのようなフィールドワークで伊豆半島の地域に関わっていたり、企業からのいろいろな要望もあって、そのようなところに学生を行かせて活動してもらったりしています。ゼミ生が2030松崎プロジェクトに参加したり、地域のいろいろな活動に参加したり、先ほどの伊豆総合高校での探究学習などは興味関心のある学生に個別に参加してもらったりと、いろいろな形で伊豆半島における活動に参加してもらっているような状況です。

3. 伊豆半島での学生のフィールドワーク活動

今、ジオパークのフィールドワークが2チームあって、それぞれ活動しています。私もここに入っていて、私は福祉が専門なので、そのような視点で関わっていきたいと思っています。

ジオパーク以外にも、阿部先生がされている東伊豆町の取り組みや、松崎町の商店街のにぎわい創出や防災と観光の両立といったフィールドワーク活動に学生が参加しています。

4. 東部サテライトの今後の展開

東部サテライトが今後行うべきことは、三つの場としての機能を果たしていくために、粛々と活動していくことだと思います。ただ、それを実現するためには、教員の横の連携をもっと強化してほしいと思いますし、サテライトがどのような役割を果たし、どのようなものを目指すのかというビジョンを明確にして、それを共有していくことが、これからますます重要になってくると思います。

人口の話をすると、静岡県の市町村で、高齢化率トップ10のうち9が伊豆半島にある市町村です。それほど伊豆半島の高齢化は深刻です。このような社会的な背景がある中で、伊豆半島がこれからどう発展し、どのような成熟を目指していくのか、大学としても一つの方向性を持つ必要があると思います。どのような発展をしていくのかというところに、どう貢献していくのかという視点で考えると、サテライトの位置付けがもう少し明確になってくると思っています。私自身は、福祉的な視点から、開かれた小規模多機能自治、それぞれの地域がレジリエン

スを高めていくことが重要であると思っています。

先ほど学長の話にもありましたが、住民個人をエンパワーすることで地域がエンパワーしていく、学びながらプロジェクトを実践し、個人がエンパワーされて、それによって地域がエンパワーされるというらせんの動きができていくといいと思います。

そのためにサテライトは何ができるかということで、伊豆半島を拠点に研究者や専門家、仲間たちと学び合い交流する場をつくる、このようなところで研究者が成果を可視化したり、客観的な分析により実証したりします。オンライン講義・対面授業・ゼミ活動を通じて「知」の欲求を満たし、それを地域に還元する仕組みをつくることも大事だと思います。また、伊豆半島といえばジオパークが重要な事業なので、自然や歴史、SDGsや福祉、地域づくりなど、幅広い分野に触れて伊豆の豊かさを知り、伊豆の未来を共に考えるという役割をサテライトが果たしていければと思っています。

サテライトもまだまだ未熟な状況で、和歌山大学のいろいろな事例から学ぶことは本当に多いと思いますので、後ほどまたよろしくお願いいたします。

報告４

紀伊半島の歴史・文化を活かした地域と大学の連携

吉村旭輝（和歌山大学紀州経済史文化史研究所准教授）

1．紀州経済史文化史研究所と、その活動について

紀州経済史文化史研究所（紀州研）は、大学が創設された1949（昭和24）年から2年後の1951（昭和26）年に設立されました。当初は教育学部と経済学部の2学部しかなく、その2学部がフラットな状態で共同研究する場として、この研究所が設立されました。この研究所は、当初は経済学部のあった高松、現在松下会館がある場所にありました。研究所は大学とともに栄谷に移り、2008年に博物館相当施設となり、現在では年に1回の特別展、年2〜3回の企画展を行い、それ以外の時期は常設展を行っています。

何を展示しているかというと、大学設立前の和歌山県師範学校（教育学部の前身）や和歌山高等商業学校（経済学部の前身）といった前身校の資料、そして師範学校より前の紀伊藩校である学習館の資料が図書館に収蔵されているので、それらを根本資料としながら、さらにそこから戦後になって収集された、和歌山県の文化財指定になっている紀州藩の家老の『三浦家文書』といった、さまざまな古文書を中心に展示しています。また研究所では、特に紀伊半島を中心にさまざまな研究、教育、展示活動が行われています。

2016年には特別展「道成寺の縁起　伝承と実像」と企画展「和歌山移民　村上安吉のライフストーリー」を開催しました。静岡県も大変多いのですが、和歌山県も全国で6位に入るぐらい多くの移民を輩出した県でもあるので、そういった人たちの歴史を紹介する展覧会を毎年実施しています。

紀州経済史文化史研究所のやり方は、フラットな状態での研究、学部間を超えた研究ということで、学内にいるさまざまな研究者があまり交流がないということもあって、学部を超えた学内研究交流会を中心に開催して、さまざまな知見を共有していました。それが学内外にも派生して、紀州地域学共同研究会をコロナ禍前まで行っていましたが、今は行えていない状態です。教育部門に関しては、教養科目の「わかやまを学ぶ」をオムニバスで、文理を問わず実施しています。

今回の中心になる話は紀州研ボランティアです。来年度からはこれはミュージアムボランティアということでKii-Plusの所管になるのですが、紀州研ボランティアがやってきた活動を紹介したいと思います。まず私の所管でもある、祭礼への参加活動です。また、文化財の整理作業と撮影作業、展示の準備作業や企画立案、こういったもののボランティアを全学の学生から募集して、今年は15名の学生が参加しています。

2．地域の表象としての祭り／祭礼

全国各地、和歌山でも例外なく祭り／祭礼が行われています。しかし、和歌山では県指定の無形民俗文化財がなくなるといった現状がたくさんあります。それには少子化・高齢化・人口減少という大きな要因があるのですが、今日は和歌祭の御船歌の復興と唐人の復興を中心に話を進めていきたいと思います。

まず県下の「有名」な祭礼として、「紀州三大祭」があります。粉河祭、田辺祭、そしてもう一つが和歌祭です。実は、紀州研ボランティアでは過去、この三つの祭礼に学生をたくさん動員していました。しかしながら粉河祭、田辺祭はどちらかというと地縁性が非常に強い祭礼なので、実際に参加できない場面が多々あり、永続的に参加できるのは現在、和歌祭だけになっています。どういった祭礼か、少し映像で紹介したいと思います。

―映像開始―

この渡御行列の場面に、たくさんの学生が参加しています。この渡御行列が和歌祭のメインであり、さまざまな場面で学生が参加しています。昨年（2022年）の祭礼は四百年式年大祭で、150名の学生が参加しました。コロナ禍前は授業で呼びかけていることもあって200名ほど参加していたのですが、最近は減っています。

子ども神輿は教育学部の学生に非常に人気で、横に付いて子どもたちの世話をします。昨年は約50名の学生がこれに参加しました。

母衣（ほろ）は経済学部の学生とシステム工学部の学生に人気があって、こちらも昨年50名ほど参加しています。

学生の中に留学生を世話するサークルがかつてあり、面被は古くから伝統的に和歌山大生が参加している種目ですが、現在は活動していないようなので、私の方で一括しております。

これは御船歌の復興で、2010年に歌っている姿を映しました。

―映像終了―

このように和歌祭に学生がたくさん参加しているということですが、実は和歌山では100を超える祭礼が現在でも行われていて、例えば中紀地域においては御坊祭や印南祭といった、獅子舞や四つ太鼓が出る祭礼が盛んに行われています。

南の方に行くと非常に有名な熊野三山があるので、そちらの大祭礼があります。古座川地域には河内祭と呼ばれる国指定無形民俗文化財の祭礼があって、実はこの船の中で御舟謡（みふねうた）が歌われていて、非常にリンクするような祭礼です（図1）。

図1　河内祭

3. 和歌祭のはじまり

和歌山県の中では、昔の藩や紀伊の国や村、市など、さまざまなカテゴライズの中での祭礼が、今なお混在したような形で行われているということです。そこで、静岡県とも関係性が強いので、和歌祭の話を少しだけしたいと思います。

これは静岡県での話です。徳川家康が亡くなったのは1616年で、その際、実際に葬儀を行ったのが梵舜という京都の豊国社の社僧で、当時の駿府城主であった徳川頼宣が、久能山に神廟本地堂など久能山東照社を建てます。そういったことがきっかけになって家康を祀るようになっていき、その後、日光東照社に移されたとされています。最近、久能山に遺体が残されたままという新説もありますが。基本的に、その渡御ルートを差配したのは駿府城主であった徳川頼宣だったということで、徳川頼宣がこの祭礼をつくるにあたっての思い入れは非常に強かっ

たと考えられます。

徳川頼宣と、後の田辺城主である安藤直次の二人が、1616-17（元和2〜3年）に葬儀と日光東照宮に移す祭礼の差配をします。その後、徳川頼宣が1619年に和歌山の紀伊藩初代藩主としてやってきます。そこで最初に行ったのが、天台座主の天海を招き、90日間和歌の浦に逗留して天曜寺というお寺と東照社を建てて、全国に先駆けて東照宮祭礼を整備することでした。その祭礼が和歌祭です。

和歌山城下町には、和歌祭以外の祭り／祭礼は現在ほぼないと言ってもいいのですが、城下町の神面を集めて面被として登場させ、神様が徳川家康を祝福しているということとした可能性もあります。あるいは後に徳川家光によって整備された日光東照宮御神忌祭の元になった可能性すらあるのではないかというような規模の祭礼です。

この祭礼の特色は、京都を中心とする一つの御霊信仰の畿内（近畿地方）の祭りも包含したようなさまざまな芸能が出る祭礼で、特に城下町の町民が当初から参加する祭礼としては、東照宮祭礼のなかでも最古の祭礼といわれていることです。

日光東照宮の渡御行列に出てくるのは日光山の神人（じにん）で、地元の人ではありません。久能山東照宮御列祭では、現在神事のみが行われています。

4. 和歌祭の衰退と復興の歴史

しかし、和歌祭は1665（寛文5）年に縮小令が出されました。紀州研が持っている資料の『御用番留帳』（紀州藩家老三浦家文書）にそのことが載っています。家康の50回忌を起点として縮小されるのですが、50年たつともう城下町に根付いているので、町民の力によってさまざまなものが復興されていきました。

しかし、1871（明治4）年に、明治の廃仏毀釈によって中断されてしまいます。和歌祭が藩の祭礼であって、パトロンが非常に重要なため、自分たちでお金を生み出す祭礼ではなかったことも原因となって、後に外部からのさまざまな影響を受けていきました。しかし、和歌の浦の人たち、あるいは和歌山の人たちにとっては根強い人気があり、中断後すぐの1873年に復興されます。そして南海電鉄が敷設され、南海電鉄の宣伝文句の一つとして「天下三大祭りの一つ」とうたわれ、明治時代・大正時代には20万人を超えるお客さんがやって来るという大祭礼になってきます。お金がないので軍部と結び付いたりする時代もあったのですけれど、さまざまなパトロンを持ち、行われてきた祭礼でした。今から約100年前の1915（大正4）年には、家康の三百回忌の祭礼が全国的に大々的に行われるのですが、それも資金不足でできないということで、1920年に徳川頼宣の入国三百年祭として斎行され、全国から12万人を集める大祭礼になっています。

しかし、太平洋戦争でこの祭礼が途絶えてしまうと、すぐにまた1948（昭和23）年に、今度は和歌山市のミナト祭、その翌年に和歌山市商工会議所の商工祭のメインイベントとしてパレード化が進んでいきます。さまざまな場所で芸を披露していくようなものだったのですが、いろいろな芸能がパレード化によって失われていきました。

後に、それではいけないということで、平成になってから再興された際に御船歌が復興され、そして唐人もこの流れの中で復興されていくという流れがあります。

昨年5月15日に、報道ではゲストの松平健ばかりがクローズアップされていましたが、和歌祭四百年式年大祭が行われました。久々に和歌山城周辺での商工祭が再現されました。平成になってから、和歌祭自体が和歌の浦に戻され、和歌山城の周辺で行われることがなくなってしまったので、和歌山城の周辺に住んでいる人たちからすると和歌祭の認知度が下がり、「和歌祭

は和歌の浦の祭りでしょう」ということになってしまうので、その払拭と、和歌祭自体の人気回復をもくろんだやり方だったと聞いています。

今年からは元に戻るのですが、今後どうなっていくか注目されています。最近の特色として、棒振りなどを復興させましたが、獅子は企業が受け持ってくれます。また童子は小学生が受け持ちます。つまり、今、企業と学生の需要が地域にとって非常に強くなっているという現状もあります。

5. 芸能の復興と継承

祭り／祭礼継承には現代的な問題があります。一つ目は生業の変化です。祭礼を非常に重視していた農業や漁業といった第1次産業が少なくなってしまったことによって、土日以外に祭りが行えないということで、祭りの意味が失われつつあります。

二つ目は生活スタイルの変化です。時代の流行の問題があります。

三つ目は少子高齢化・過疎化です。農山村だけではなく都会も中心に継承者が不足しています。

四つ目は学校や社会の変化です。教育システムとしての青年団や青年会といった若者組がなくなってきています。これは先ほどのいろいろな報告でも同じような話になっていたと思います。

一つの事例として、上富田町の市ノ瀬では、盆踊りで行われていた県指定文化財の市ノ瀬の大踊りが、盆に行われなくなって小学校の運動会で披露されるように変わっていきました（図2）。

図2　祭りの継承問題の一例（市ノ瀬大踊りを小学校の運動会で実施）

和歌祭については、紀州経済史文化史研究所と和歌祭実行委員会が共同で地域の小学校でワークショップを実施しています。

芸能の復興にも問題点が多々あります。それは、先ほど松平健の話もしたとおり、マスコミやカメラマンが注目することにより、そこにのみ集中して観客が増えるということです。地域自体をいかにフラットに見て、いかに満遍なく、どのようにポイントを絞って目立たせていけるのか、そういったところは今後問われていきます。地域の個性をいかに価値付けていくのか、そこが重要になってくると思います。

そういった例で言うと、岸和田だんじり祭などはメディアで非常に注目されて有名になり、静岡でも知っている方が多いと思います。また、和歌山の山間部の日高川町の寒川祭は、写真作品がフォトグラフの雑誌に投稿され、入選か何かしたことによってカメラマンがバスツアーで祭りにやって来るのですが、隣村では全然祭りが盛んに行えなくなってしまった事例もあります。そういった地域の選別と呼ばれるもの、理系の生物系分野で言うところの標本化がなされている現状があります。

もう1点の問題は、私のような研究者が入ることによる問題点です。例えば私が祭礼に行って、現地の人に「これは元の姿と違うよ」と一言言うだけで元の姿に変わっていくということです。いい研究はできるかもしれませんが、問題はその変化していった過程を飛ばしてしまうことです。

もう一つのポイントとして法律の問題があります。1992（平成4）年に出された「地域伝統芸能等を活用した行事の実施による観光及び特定地域商工業の振興に関する法律（通称：お祭

り法)」は、地域祭礼や芸能を地域の観光資源あるいは商工業と結び付けていこうという法律で、それによって全国的に、民俗芸能や祭り／祭礼と呼ばれるものが、これまで保存しなくてはいけないといわれていたのが、活用という言葉に一気に変わっていきました。

活用という言葉に変わることによって大きく変化していったのは、地域です。地域の一つの選別化が、その際に進んでいったのです。大祭礼はさらに大祭礼となり、地域の商工業・観光と非常に結び付いていきましたが、小規模祭礼は軒並みつぶれていきました。地域の観光に向かないもの／向くものが、この法律によって選別されたという一つの大きな功罪があるということが考えられます。

6. 和歌山大学と和歌祭

ここで本題に入っていきます。和歌祭は現在、基本的には和歌の浦と呼ばれる国指定の名勝に選ばれた地域で行われている祭礼です。その地域では1989年に、「和歌の浦景観保全住民訴訟運動」と呼ばれる、後の鞆の浦のモデルケースとなった裁判沙汰がありました。この裁判自体は、運動したところが敗訴したのですが、和歌山大学の紀州研がそれまで和歌の浦に蓄積してきた研究と呼ばれるものの資料提供がこの裁判の基になっていることが考えられます。

それ以降、和歌祭も含めて、この地域での研究を重ねてきました。私自身、実践することと実際に古文書を読むことが基本だったのですが、2009年に和歌山大学に赴任した翌年、御船歌の復興に参画しました。復興してから2年間は、教育学部のミュージアムボランティアでもある紀州研のミュージアムボランティアで募集をかけて御船歌の参加者を募っていたのですが、和歌祭実行委員会側からの要望もあって、それに応えて、全祭礼の各部署に参加させるように、まずボランティアを変えていきました。

それ以降、2014年からは紀州研ボランティアと名称を変え、教育学部だけではなく全学から募集をかけ、さらには授業でも募集をかけていくように変えていきました。最大で約200名以上、現在では約150名の学生が参加しています。

最初に御船歌が復興し、それとともに拡大、学生が女子神輿、母衣、舞姫など、先ほど映像に出てきたものに参加しています。

7. 御船歌の復興

現在の和歌祭御船歌は藩船や唐船と呼ばれる曳船の中で歌われる歌のことです。当初は幕府御船歌、幕府公式の歌ということで、八代亜紀の「舟唄」ではないのですが、「御」が付く御船歌が歌われていました。それから昭和20年代、昭和30年代と継承されてきました。それが1980年に途絶えてしまいます。そこで、2008年の県の調査での音源発見を機に、県職員の人たちと共に、これらを復興させていきました。2009年には御船歌部を結成しました。和歌山大学の学生に必死に呼びかけて、数名参加させてもらいました。

図3　学生の唐船・御船歌参加（2010年～）

以降、練習を重ねて、コアメンバーが和歌祭の東照宮の奥の蔵を捜索すると、明治期の法被等も見つかって復興の一助になっていきました。

復興のときに参考になったのは、実践活動の大学側の取り組みです。「参画型民俗学研究」と

名付けました。例えば、現在は行われていませんが、祇園田楽は帝塚山大学、祇園祭の鷺舞は同志社大学、東京の神田祭は日本女子大学など、さまざまな大学が大学単位で祭礼の復興、あるいは参加を手助けしているという現状がありました。そこで「和歌山大学は和歌祭でしょう」というのがあって、最初はそこに取り組んでいこうということで始まったのです。

最初はクラブ・サークル化でコアメンバーが御船歌に参加しました。それから約10年たつと、今度は女性参加ということもあって、元々男歌であったものを大きく変化させ、現代風にカスタマイズして参加者を募り、現在では学生数がほぼなくなって、卒業生か地元の方々にすべてを委ねるように変化していきました。私も昨年まで副代表をしていましたが、今年からはあえて外してもらい、和歌祭全体に関われるように変えてもらいました。

御船歌は実は伊東市や沼津市にもたくさんあります。駿府との関係もあって何らかの関わりがあるのではないかと思います。共通する歌も多々あります。そういった意味でも、共同で何かできたらと常々考えている次第です。

8. 唐人の復興

唐人とは仮装行列の一つで、当時流行していた朝鮮通信使の姿を日本人が模した行列を祭礼に組み込むことが、1600年代後半にたくさんの祭礼で行われるようになりました。1748年に江戸に朝鮮通信使が来たときは、東北から中国地方まで、さまざまな観客が見に来たそうです。岡山県の唐子踊り、三重県津市の津まつりなどがあり、現在でも踊られています。

しかし、和歌祭の資料を見ると「羅紗の合羽」「かるさん」と書かれていて、これは朝鮮通信使ではなく、南蛮人と呼ばれるポルトガルやスペインの人たちの姿にあたります。和歌祭の絵にもこのようにポルトガルやスペインの人たちを模した姿が描かれていて、なぜそういった姿をしているのか、学生、特に留学生と共に研究を進めました。その結果、1633（寛永10）年のポルトガル船入港禁止以前の姿ではないかということが分かって、他の祭礼では例を見ない南蛮人の唐人姿になっています。

大学からの予算を使い、学生が復元作業において装束の考証をしました。留学生の授業で考証し、装束のデザインをして、さまざまな姿になりました。絵巻からは私が選びました。そして2017年に留学生がデザインした装束を着て、和歌祭に参加するようになりました。

私の授業では、他の部署に毎年、留学生が20〜30名、必ず和歌祭に参加していました。留学生側の学びの深め方というところが非常にネックになっていたので、留学生独自で、しかも和歌祭に古くからある文化を利用しながら何かできないかということで、このようなことを考えました。

地域には大歓迎されました。平成に入ってから和歌祭を和歌の浦に戻すこととなりましたが、城下への渡御がなくなり、市内での和歌祭認知度は極端に減少していました。唐人の参加がきっかけとなり、これまで失われてきた和歌祭のさまざまな芸能の復興のきっかけになるのではないかということです。地域が歴史を学びながら、さらに地域のアイデンティティを醸成していく、そういったものが見られます。

図4　唐人の復興に留学生が参加する（装束の考証）

もう1点、こちらの方を非常に重視していたのですが、留学生にとってのメリットは何かというと、地域の歴史をしっかり学ぶことが根底としてあります。

その上で祭礼に参加し、地域の人々と、単なる国際交流ではなく、より深い交流をするということで、将来的にモノやコトを深く見る視点を培う教育的効果を上げることを期待したというのがポイントです。特に唐人と呼ばれるものは外国人の姿なので、外国人として本当にやってきた自分たちをどのように見てくれるのか、400年前はどのように見られていたのか、そういったものを両面から体得できるという一つのきっかけにもなって、現在では10名を超える留学生が唐人に参加しています。

9. おわりに―祭礼の保存と継承

祭礼は全国各地で保存する祭りに変更されていっている現状があります。生きた祭りをどう取り戻すのかというのが大きなポイントで、学校・企業・地域外の人たちの参入をいかにくみ上げていくのかが大きなポイント・課題として残っています。

大学としてどのように取り組めばいいのかについては、特に「保存」「活用」「価値付け」がセットとなった新たな文化財の在り方を、紀州研ならではの取り組みとして、どのように検討していくのかが大きなポイントになってきています。

特に学生側からしてみると、観光化による祭礼の担い手の要望というものが地域にあって、「大学に期待する」とは言うのですが、実際には「動員」であり、人足でしかないという現状があります。それは学びでも何でもなく、学生側からしても単位の取得目的という問題点も包含されています。そこで何をすればいいかというと、実際に地域の問題点・課題を学生に見いだしてもらうことで、将来的にそれぞれの出身地に帰ったときに地域でどのような活動ができるのかを考えてもらう一つのきっかけになる、それこそが教育なのではないかと考えています。

地域振興と課題については、「学習するのは学生だけではない。地域とともに忘れられた『文化』『財』を再確認」ということで、地元にいれば気付かないものを外部の視点から見ることによって、地元の人たちは「これはこんなに価値があったんだ」という一つの価値付けと呼ばれるものが見えてくる、そこがこの活動でのポイントだと思っています。

今日の話は祭礼や祭での芸能復興の話が中心になりましたが、これは地域に残っている仏像・神社・さまざまな家屋などの文化財に関しても、同様のことが言えるという現状があります。文化庁もそれを見越して3年前、文化財保護法の改定も行われました。今後の「活用」は、表面上の活用ではなく、非常に深い意味での活用が求められていて、それに地域の大学がどのように関わっていくのか、それを今回の問題提起とさせてもらいたいと思います。

パネルディスカッション

阿部――これからパネルディスカッションを始めさせていただきます。最初に質問や確認したい点などをお寄せいただければと思います。まず始めに、今回、コメンテーターとしてご参加いただいている鹿児島大学の小栗先生、お願いします。

小栗――皆さん、こんにちは。鹿児島大学の小栗です。私がなぜここにいるのかと申しますと、今、司会をされている阿部先生からお声がけいただきました。鹿児島大学には大隅半島と薩摩半島があって一緒だよねという話がきっかけでした。ただ、あまりにも距離が離れていることや、私自身、静岡と和歌山のことをほとんど分からないので、一度お断りしたのですけれど、距離が離れているからこそいいのだと励ましてもらい今日参加しております。どうぞよろしくお願いします。

阿部――静岡大学、和歌山大学、伊豆半島、紀伊半島の取り組みの紹介を経て、静岡大学長の挨拶にもありましたが、学びに関しても、地域づくりに関しても、環境に非常にハンディがある一方で、自然、文化、歴史などいろいろな資源があるということが共通点だと考えました。鹿児島県に関しては、むしろ半島ではなく、島しょ部がそれに当たるのではないかなと考えております。そういった点でまたいろいろな有用な示唆をいただければと思います。後ほどまたよろしくお願いいたします。

それでは、パネリストの方々、四つの報告がありましたが、他のパネリストの方に質問などがあるかと思います。あるいは、短い報告時間でオーダーしたので、補足したい点などもあるかと思います。どなたからでも結構ですので、まずお互いに質問、コメントをいただいて、その後にフロアの方々、オンラインで参加の方々から質問をいただいて、最後にコメントをコメンテーターからいただきたいと思います。

塩尻――それぞれの報告に関して、大変勉強になりました。ありがとうございます。私からは伊東学長に質問があります。社会実装研究教育プロジェクトに、自治体OBの方、あるいは現役の方に入っていただいて、いろいろな成果を上げられているというお話をいただきました。大学の教員はそのプロジェクトには当然のことながら参加して主体的に動きをされていると思うのですが、その先生たちは、積極的に手を挙げて関わっておられるということでよろしいでしょうか。例えば、人数なども伺いたいです。また、そのような先生方は例えば、各部局、学部には属しておられると思うのですが、部局の実際のお仕事との関係で、そういった仕事がプラスアルファになっているかどうかを教えていただければと思います。

伊東――一番答えにくいところを聞いていただきました。正直に申し上げます。実は、地域連携に関わる教員はかなり限られています。静岡大学様の発表の中でも、全学展開という話がずっと出てきました。われわれもそれを狙ってはいるのですが、なかなか難しいところがあります。というのも、地域連携は必ずしも論文にならないものが結構あるのです。そこに手を出してしまうと、論文数が上がらない。だから若い人たちは昇進に関わってきますし、科研費も論文実績がないと取れないということもありますので、なかなかできない。

積極的に参加していただいている先生は、例えば観光学部、経済学部、それから教育学部の中にもいらっしゃって、そのような先生を中心に回っています。また、システム工学部でも建

築関係の先生方がかなり関わってくれています。防災関係では、IoT（モノのインターネット）の関係をされている先生が関わってくれているというのはあります。それはご自分の研究分野とも近いからやってくれているのですが、人数はかなり限られています。それを何とかわれわれは全学展開したいのですが、そのときに、「皆さんやってください」と呼びかけても決してうまくいかないというのが私の思いです。一人あるいは一つだけうまくいくプロジェクトをつくり、やってくれた人にしっかりと手当をして、「こういう活動が評価できるのだよ」という事例をつくることで、「じゃあ、これできるんじゃないの」と、それをよしとする人たちを増やしていくという、まず隗より始めよ方式で、今やっています。

また、社会実装研究教育プロジェクトも、大学の方から進めてやっているものもあるのですが、自治体からの要望に応える形でやっているので、そのときには専門の先生方をコーディネートしていくというやり方で進めています。

阿部――ありがとうございました。伊東先生の方からどなたか。

伊東――私からは、内山先生が発表されて、塩尻先生もおっしゃっていた、ぷらっとカフェの取り組みについて質問があります。極めて有効なコワーキングスペースになっているのではないかと思うのですが、内山先生がご講演の中でおっしゃったように、静岡大学からの物理的な距離がかなりあるので、学生をそこまで連れてくるのは大変ではないかと思います。学生にぷらっとカフェ、あるいは松崎町まで来てもらうための取り組み上の工夫は何かあるのでしょうか。

内山――難しいというのが現状だと思います。月2回、金曜日の午後という形で開催していて、松崎プロジェクトに関わる先生の出店に参加してもらうなど、非常に限られた大学生の参加というのが現状です。地域の人も仕事をされている方は平日なのでなかなか参加できなかったりするので、そのようなところも今後見直して、月1回は土曜日にしていけたらいいなと考えています。そのようになればもう少し学生も授業のない日に来やすくなるのではないかと思っています。われわれも学生の関わりをもう少し増やしたいと思っていますが、なかなか難しいですね。個人的なつながりに限られてしまっています。また、フィールドワークのフィールドが松崎町ですが、まだプロジェクトとフィールドの連携が進んでいないので、そのようなところで一緒にやっていける仕組みを作ることができればと思っています。

阿部――ありがとうございました。内山先生から、どなたか。

内山――Kii-Plusのお話をもう少し聞きたいなと思っています。自治体の人が、価値共創研究員として、1～2週に1回、大学に入って課題を一緒に考えるというお話があったのですが、もう少し具体的に、どのような自治体の人が入るのか、自分から手を挙げるのか、課題を一つ解決してそれで終わりなのか、期間、仕組みなどをもう少し聞きたいです。すごくいい取り組みだなと思って興味が非常にあります。

伊東――価値共創研究員という制度は、今、自治体と言われたのですが、自治体や企業、あるいは県の社会福祉協議会などから来ていただいています。その人たちが現場で抱えている課題を持ってきていただくことになっているので、その課題は、実は大学側ではあまりコントロー

ルしていないのです。ではその人たちはどうやって来るのかというと、実は首長とのトップ対話のときに、会った瞬間に、「今度の4月から送るからね」と言われたこともあります。ですので、トップダウンで送ってくる場合もあります。また、例えば常設のボランティアセンターをつくっているのですが、それをつくるためにはこのような人の力を借りたいねということもあって、大学からお願いすることもあります。

課題は1年で終わるものではとてもありません。うまくいったのが、コロナ禍で和歌山市の観光局から来ていただいた方が持ってきた、ご近所観光、つまりマイクロツーリズムの課題です。それについては、ご近所観光のモデルツアーのようなことをして、冊子を作って、それでこのような形でやったらどうですかというところで、1年やっていただいて、それでなるほどということで、和歌山市はそれを市の施策に取り入れて、実際には市として実装されたという例があります。

そのような形でニーズを持ってきてもらって、そのニーズをどう解決するのかということをやっているのが、この価値共創研究員制度です。先ほど言った首長からトップダウンで送るからねと言われたのは何かというと、葛城修験なのです。葛城修験を観光の資源として活用したいということがあって、市の首長からすると、これは市としては絶対進めたい、だから何とかしてくださいという形で送られてきました。

内山――そこに対応する先生方は、その課題に応じて引っ張ってくるのですか。

伊東――そうなりますね。今の葛城修験では、われわれのところにある国際観光学研究センターの外国人教員が入ったり、学生のサークルが入ったりという形で、学内の教員だけではなく、学生も含めた形で大学全体で取り組んでいる形になります。

内山――ありがとうございました。

吉村――それでは質問させてもらいます。内山先生に、学生の動員方法が非常に気になったのでお伺いしたかったのですが、伊東学長が聞こうと思ったことをすべて聞いてくださったので、その話ではないことを伺います。サテライトの取り組みは、行政、地域の自治会、相談者、どこからの要望が一番多いのかということと、サテライト側から働きかけて能動的にする割合、また受動的に要望が向こうから来る場合の割合をまず教えてほしいです。

もう1点は、先ほど伊東学長からも、地域に先生がなかなか来てくれない、論文の成果に結び付かないという話もあったのですが、伊豆半島での基礎的研究が静岡大学の中でどれぐらい進んでいるのかです。教員の中でのサテライトの活動の把握、またサテライトを教員がどれぐらい利用できているのかをお伺いしたいと思います。

内山――要望の種類というか、いろいろあって、どこがどれぐらいというのはまだよく分かりません。まだまだ周知されていないという現状もあります。サテライトができてまだ2年少しで、私も赴任して1年なので、大学内でもサテライトを知らない先生や学生も多いという現状の中で、地域の人になかなかお伝えできていないというところもあるのですが、今の状況からすると、自治体というのはあまりないですかね。私より他の先生方の方が詳しいかもしれませんが。サテライトにふらっと来る住民の方の方が、数的には多いですかね。伊豆市は割とこちらからアプローチというか、話を持ちかける方が多いかもしれません。向こうからというのは

今のところあまりありません。ジオパークの関係では、小山先生や山本隆太先生などにいろいろな相談があるとは思います。すみません、答えになっていませんが。

伊豆半島における研究の成果、論文の成果については、私は全然把握できていないです。大学の中で、もちろんジオパーク関係の研究は多くなされていると思うのですが、歴史や文学、そこでどれほど伊豆の研究が蓄積されているかは、他の先生に答えていただいた方がいいかもしれません。

塩尻――伊豆地域の基礎的研究については、私自身も全体を網羅しているわけではないのですが、基本的には自然科学系の研究はフィールド調査をされている方がいます。農学あるいは理学部の生物で、植物が主ですが、植生調査をしたりしています。また、教育のフィールドとしても使ったりしています。歴史的なところに関しては、そういったところに興味を持たれている方もいるということは聞いてはいますが、それぐらいの情報です。

先ほどの吉村先生のお話を伺って、大学として先生の場合は和歌祭の研究があって、それをベースに地域との連携ということですので、学生ボランティアについてはいろいろなディスカッションがあるかもしれませんが、研究と教育と地域連携が一体となっているという意味で、さらに先のゴールがある程度分かりやすく私自身には聞こえました。ありがとうございます。

阿部――ありがとうございます。私も報告を伺っていて、紀伊半島価値共創基幹の「価値共創」というのは具体例を思い浮かべにくかったのですが、吉村先生の歴史、儀礼を復活、また活性化させるということが、価値共創の一つの例だなと思いました。非常に具体的な例を示していただいて、ありがとうございました。柳田國男先生が遠野に関わって、最初は反発されたけれど、100年、200年という地域づくりの核になったという、その途中の経過を見ているような気がして、とても心強く感じました。

フロアあるいはオンラインから質問がございましたら、よろしくお願いいたします。村田先生、いかがですか。よろしいですか。お願いします。

伊東――塩尻先生が未来社会デザイン機構のお話をされたのですが、そのときちょっと気になったのが、バックキャストして事業を進めていくようなことを言われていたことです。未来社会を考えるとき、どうしてもわれわれは平均像を考えがちではないかと思ってしまうのです。地域ごとにそれぞれ考えている未来社会があって、それは必ずしも都会型ではなくて、地域の共生社会をつくっていくというものが出てくる可能性があって、そのときに、バックキャストして考えていくと、どのような未来像を描くかによって、今ある取り組みが変わってきてしまいますよね。そのような危険性がバックキャスト型の発想にはいつもつきまとうので、地域が本当に欲しがっている未来社会をどのような形で捉えるのかというのがちょっと気になったのですが。

塩尻――バックキャストでゴールをこう描くといったときに、そのディスカッションに参加している集団によってゴールはかなり変わりますし、描かれたゴールも、本当に直線的に実現できるものではない可能性も十分にあると思うのです。ただ、少なくとも松崎町の例で言えば、若い世代を入れながら、町民の方とディスカッション、対話をしながら、大学の教員、学生たちと一緒になってつくり上げているものなので、いろいろな将来に向けてのゴールとして適切なものではないかと思っています。

ただ、それが時間のスケールを振ったときに、どれぐらい実現可能なものになるのかということは、なかなか難しい部分があります。今度はまた現実に戻って、多少ビジョンも整理していく必要があるのではないかと私自身は考えています。ただ、これについては、未来社会デザイン機構のメンバーでいろいろな考え方があるので、私自身の個人的な考えです。少なくとも松崎プロジェクトに関してつくり上げているゴールsに関しては、それなりの形で共有し、皆さんそのようなものがあるということで理解が非常に進んで、町全体一体となって進んでいっているという認識でいます。前回の半島サミットのときも伊東学長からコメントをいただいたのを私自身も覚えておりますが、ありがとうございます。私の回答は以上です。

内山――実際、活動に関わっていて、ゴールを決めた後にそれを目指してやっていくのですが、ゴールを出すためにはどのような成果が必要か、その成果を出すためにどのような活動が必要かというロジックを取り込んで、突拍子もないゴールにならないように、ちゃんと成果と関連付けてやるということを、まだできていないのですが、プロジェクトを進めていく上で注意していきたいと思っています。

阿部――今のお話に関係するかどうか分かりませんが、受付のところに資料があります。もしお手に取っていない方は、帰りにお持ちいただければと思います。例えば、「松崎ミライ通信第17回」と書いてありますが、これは2030松崎プロジェクトの一環の広報に関わる取り組みの成果です。西豆学の一環でもあり、高校生がこのチラシをデザインも全部作ってくれました。バックキャスティングは私にとってもなかなか分かりにくい概念なのですが、中学生や高校生たちに案外響いてくれたのではないかと思っています。「2030年のときに地域の主要な担い手になっているということは、僕たちのことではないか」ということで、自分たちが主役だと考える、自分事にするきっかけになった。今は未熟だから、高校生だから、自分たちは本当の関わり手、主体ではない、その横で、あるいは後ろの世代でやればいいと思っていたのが、いや、今、自分事として関わっていいのだと考えるようになる後押し、スローガンに、バックキャスティングという言葉がなったのかもしれません。

地域課題解決支援プロジェクトの公開シンポジウムを12月末にいつも行うのですが、そのときにここ3年ぐらい、松崎高校の生徒たちにも参加してもらっています。そのときにバックキャスティングの図を使い、「松崎高校から見てこうだから、われわれは今頑張らなくてはいけないのだ」と一生懸命言うのを聞いて、一番うまく、一番効果的にその概念を使っているのは高校生なのかもしれないと考えました。われわれは「ビジョンが何とか」と頭でっかちでやっていたような気がして、高校生たちが非常に頼もしく思えました。

広報は一つのプロジェクトで、他にもいろいろなプロジェクトが進んでいるのですが、高校生たち、中学生たちが、自分たちが担っていっていいのだと考えるようになった。その中に総合計画に関わる部分もあります。そのような動きが他の地域でも広がるといいなと今思っています。

伊東――今の点、非常に重要だと私は思っています。主役が地域の、今であれば高校生、若者になっていますよね。われわれは「伴走支援」という言葉をよく使っているのですが、地域の若者たちを大学が伴走するような形で支援していくという形で、考えていただくのは地域であって、地域の人たちがどのような未来図を描くのか、特に若者たちがどのような未来図を描いているのか、それを具体化するような、あるいは実現するようなお手伝いをするのが大学の地域

連携の一番の柱ではないかと思うのです。ですので、松崎プロジェクトはすごくうまくいっているのではないかと思います。ただ、他の地域でこれをやろうとすると相当大変なことが起こるので、さあ、どこまで大学が手を出せるのかなというのは極めて難しいかなと思ってお聞きしました。われわれでもできないところがたくさんありますので、またノウハウを教えていただければと思います。

阿部――他のところでもどんどん広がっていけばいいのですが、松崎町は今の町長さんがちょっと変わっているのです。平成11年に行った社会教育主事講習に、役場の若手として参加した深澤さんという方が今の町長です。講習の後、ずっとコンタクトを取ってくれて、フィールドワークでも課が次々変わったのにずっと手助けしてくれました。20年間ぐらいずっとサポートしてもらったということがあって、静岡大学の取り組みというよりも、松崎町が素晴らしい心構えなのだなと思っています。だから、ノウハウ化がなかなかできないかなと思っています。

塩尻――今、伊東学長がおっしゃったように、地域の将来に関して誰が考えるのかというのは、地域の方たちなのだと思います。そのような意味で、松崎町のプロジェクトも、組織改編の中では、マネジメントチームに役場の方や町民の方などに入っていただく、それなくしては2030松崎プロジェクトは自立していけないと思うのです。ただ、あのような形で他の市・町がやれるかというと、なかなか大変なのかなと思います。ただ、私たちとしては、やはり一つの地域連携のやり方として、2030松崎プロジェクトをモデルとしてつくり上げられればいいなと考えています。共通のそのような市・町というのはあるはずなので、まずは2030松崎プロジェクトを成功させたいと思っています。伊豆市に関しても、松崎町のようなプロジェクトも考えてはいるのですが、また状況も違うのではないかとは思っております。内山先生の話にも若干そういった話が出てきましたが。

阿部――ありがとうございました。ここでフロアからもご意見、ご質問をいただきたいと思います。この会場をご用意いただいて、われわれが伊豆半島の中で、特に松崎町をはじめとする賀茂地域でいろいろ活動をさせてもらっているのをサポートいただいているのが、賀茂地域局の皆さんです。全体の感想やコメント、質問などありましたら、よろしくお願いいたします。

飯田――賀茂地域局地域課の飯田です。和歌山大学、静岡大学、両先生方、ありがとうございます。阿部先生にこちらの方にフィールドワークでお越しいただいて、コロナ禍前ぐらいからのお付き合いをさせていただいています。伊東学長はウェブの向こう側で「ぜひ伊豆に行きたい」と言ってくださっていて、「ぜひぜひ、賀茂キャンパスも開所しましたので」とお話ししていましたが、やっと念願かなって、ありがたいと思っております。

両大学の皆さんは学生を地域にということを考えておられますが、私どもも、管内1市5町の人口減少の課題について首長と議論するテーブルの中の教育の部門で、賀茂地域の子どもたちをどのように育てるか、6人の教育長、県の教育委員会が入って議論し、「賀茂地域教育振興方針」というものを立てました。その中で、高等教育機関がない賀茂地域で、進学も含めて高校卒業後をどのように捉えようかというときに、大学連携という目標を立て、フィールドワークで先発してここを切り拓いてくださっていた静岡大学の、当時は地域創造学環、平岡学環長、阿部先生のところからスタートしました。さらに、静岡県立大学、静岡文化芸術大学、3大学と管内1市5町の教育委員会との包括連携協定を結び、そこを象徴する形でここを開所しました。残

念ながらコロナ禍の状況があったのですが、引き続き、3大学との連携を深めながら、フィールドワークの聖地を標榜し、多くの大学生に地域の小中高校生と、将来の展望、さらにどうありたいかということについて、コミュニケーションを取ってもらいたいと考えています。

今の高校生は昭和の世代の私にしてみると、いろいろなことを求められて気の毒だなと思いながら、いろいろな自分の物差しを持ってこうなりたいと考えているので、その選択肢をどう広げるかということが重要です。地域の課題を解決したい、地域に貢献したいという子が育つための種まきの視点を、大学生が、先生方が持ってくださるというのは非常にありがたいなと思います。大学生が来てくれると、私どもは伊豆半島賀茂地域の魅力をぜひ発見してくださいと言います。同時に、中高生と積極的に交わってもらって、「ここのこの景色がいいよね」「これがいいよね」など、彼らに再発見させてほしいと望んでいます。住んでいると当たり前過ぎて気が付かない。これは大人もそうです。地域の住民の方も、普段の生活の中で自分にとっては当たり前の風景を、交わってくださった外の方が評価してくれることで、シビックプライドが上がり、さまざま地域資源を再発見し、それが「自分たちはこんなにいいところに住んでいて、子どもも育てることができて、それを送り出している」という自信になって、それが住民の方の笑顔につながって、それが初めて来た来訪者の方が「どうも雰囲気がいいところだな、また来ようか」と感じるという流れにつながって、観光に立脚した好循環が生まれると考えています。

これは長い種まきになりますが、フィールドワークの聖地ということで、3大学だけにこだわらず、さらに広げたいと思っています。特に、和歌山大学の皆さまには、今日よりも前からのご縁がありますので、ぜひここもフィールドワークの場所として考えていただければ幸いです。ご報告にあった船歌についても、私どもは県としても朝鮮通信使について文献を研究している部門もあるので、何か連携が取れたらと思っています。また、和歌山は南紀白浜がありますが、下田も白浜がございますので、そのようなご縁も含めて、いろいろなところで交流ができればと思います。

先ほど話が出た松崎町の深澤町長は、町長に立候補される前に、ここの設立に関わるような、地域の若者をどうしようかという会議に入ってくれていました。地域の先生ですら、「故郷に錦を飾れ」と送り出してこなかった昭和の時代があります。今の親は、「こんなところではどうしようもないから、自分のやりたいところで」というのがまだまだ残っています。その状況がコロナ禍で少し変わってきているかとは思いますが、小中高校生のマインドを最初に方向付けしてしまうのが地域の大人や保護者なのであれば、やはり地域の住民の方にもそのようなエッセンスを注入していかなければいけないということで、「2030松崎プロジェクト」や、伊東先生がおっしゃったソシオフロントのような機能がさらにまた重要になってくるので、われわれは行政として、基礎自治体の一つ上で広域にいろいろやりましょうという話になりますが、引き続き支援をしてまいりたいと思います。

東部サテライト「三余塾」は伊豆市に陣取られましたが、伊豆半島は全体で13市町あり、賀茂地区で6市町なのですが、天城を越えた伊豆市までが人口減少の仕方が似通っています。昔、伊豆長岡といったら、伊豆の国市から向こうと少し違うもので、6市町に本当は伊豆市を加えたような広域的な行財政体制を考えなければいけない時期があるのではないかと考えています。やっと待ちに待った和歌山大学の皆さまに初めて足を運んでいただきました。今日ここで旗を立てていただいて、4月以降もまたぜひお越しいただければと思います。

阿部――ありがとうございました。それでは、コメンテーターの小栗先生、よろしくお願いいたします。

小栗――まずは、この3年目になるフォーラムに呼んでいただいて本当に光栄に思っております。大学と地域の連携、地域の人と一緒にこういった経験交流をするというのは本当にうらやましく、素晴らしいなと思っています。

阿部先生からこのお話をいただいたときに、鹿児島の状況をお伝えすることによって、コメントに代えられる、貢献できるのではないかということでしたので、少し鹿児島の紹介もして、コメントをさせていただきたいと思います。

鹿児島県は離島県です。南北600kmに広がり、市町村の半分ぐらいが離島です。今日のご報告で、サテライトがある地域には高等教育が不在ということがありましたが、本県の離島も同じ状況で、大学が近くにないのでそもそも大学生というロールモデルがいません。さらに、地理的ハンディに加えて、教育機会の格差、情報の格差があります。特に近年世界自然遺産で注目される奄美群島は、本土とは異なる独自の歴史と文化をもち、支配と差別を受けてきた地域であります。そこで、まずは地域の方々が、自分の島、ふるさとのことをよく知り、島や地域の価値を再認識していくということが一番の基盤になるのではないかと考えています。

そして、今日は広域自治体や県の話はあまり伺えなかったのですが、鹿児島の場合は、離島が多いということもあり、大学と地域を結ぶときに、県が重要な役割を担っていると感じています。大学の教員と地域が結びつくことは非常に難しい部分があるのですが、今、鹿児島大学で取り組もうとしているのは、学生教育のカリキュラムを地域と結び、そこに社会人教育をつないでいこうということです。また、静岡と和歌山もそうではないかと思うのですが、近隣の大学との連携の中で本学がどのような役割を担っていく必要があるのかも一つ課題になっていると考えています。

鹿児島大学は8学部、10研究科です。地域連携に関わる組織をかなり畳んだというか、数が多かった組織を一つにまとめていき、今、実際、地域連携を核に担っているところは、南九州・南西諸島域イノベーションセンター、国際島嶼教育研究センター、地域防災教育研究センター、そして私が6年前まで所属していた生涯学習の部門です。今も兼務をしています。また近年、私が移籍した法文学部に、鹿児島の近現代教育研究センターというものも設立されています。私自身、ここ20年ぐらい、阿部先生とも、旧生涯学習教育研究センターの時代から懇意にさせていただいておりまして、いろいろな地域と大学をつなぐ仕事をしてきました。その経験を踏まえて今日のお話を伺うと、こんなことを感じた次第です。

まず感想になりますが、話のなかでバックキャストや対話を非常に重視されていることに共感しました。そのなかでも特に私が今回感銘を受けたのは、伊東学長の柿の木コンセプトです。地域拠点のオープン化ということで、大学の出先だけではなく、それに活動とコミュニティセンターを掛け合わせる、そういった拠点が必要なのだということに関して、私は本当に諸手を挙げて賛同というか、今後はやはりこういった方向性なのだろうなと感じているところです。

また、オフィサーあるいは現役職員の研究員がどのような形で来られているのかという話がありましたが、大学の外の方をどうやって積極的に大学の中に取り込むのかに関して、非常に巧みになさっておられるなと感じました。誰が主体なのかという議論では、結局地域なのだということでした。私の感じていることも、やはり大学が地域を巻き込むのではなく、地域が大学を巻き込むということが非常に有効ではないかということです。地域が大学を巻き込むとはどのようなことかというと、地域のニーズ、先ほど県のOBの方がオフィサーになっているということでしたが、地域の目線で、このようなことをやりたいからこの大学の先生だとか、この学生だとか、この施設だとか、そういったものが柔軟に展開できるような条件が整備されていることだと思います。そういう仕組みが機能するとうまく回っていくのではないかというこ

とを感じています。大学の先生も自分で何かをやるのは苦手なのですが、人にお願いされて喜ばれると結構まんざらでもないというか、頑張ってやろうという先生方はいるということを見てきていますし、そこがポイントだと感じています。

その中で、大学の役割は何なのかということで、私が今感じているものは三つあります。一つ目は、地元・学生・教員の共同研究／探求です。地域の課題、ニーズに関して、取り込まなければいけない本質的なものなのかということについては、大学が本来持っている共同研究や共同探求といった研究のやり方や、教育を学生と教員、地元が一緒にやっていくような形が一つ大学には求められるのではないかと思います。そのときに、先ほど論文にならないということがあったのですが、学内の中で評価、例えば、地域貢献に関するジャーナルのようなものを作って、それをきちんと文章化していくなど、何らかの評価基準を変えていかないと、なかなか難しいだろうなというのは、私も同感です。

二つ目は、知・情報の集積です。吉村先生がとても素敵な活動をされているなと拝聴したのですが、やはり大学に求められるのは、知や情報の集積と、それが必要なときに取り出せるという役割ではないかと思います。いろいろな学問分野の知というのもあると思うのですが、大学にはそこの地域の文化を育んでいくという役割があるとすれば、そこの地域の薄れていくものを発掘していく、そして地域の個性を確認していくという役割があるのではないだろうかと感じています。そして、昨年からずっと対等な関係やフラットな関係ということがあるのは本当に素晴らしいなと思っています。大学が上から目線でやるのではなく、対等でやっていくという関係が一番基盤になるのだろうと考えています。

最後は責任と役割についてです。こういった拠点づくりをするときに、必ず経費は発生しますし、人件費の確保も重要です。諸経費を含めて責任・役割分担をどのように地域の中で考えていくのか、痛み分けという言葉が適切なのか分かりませんが、県や事業者、広域自治体、自治体、大学、それぞれの役割を明確にしていくということも、持続性を担保する上では非常に大事だと、私も活動をしながら感じています。以上でコメントとさせていただきます。

阿部――ありがとうございました。コメントというより、今回のフォーラムのおまとめをしていただいたように思います。来年度ぜひまたコメンテーターという形ではなく、参加者として関わっていただければと思います。個人的には、伊豆もそうですし、紀伊半島もそうかもしれませんが、過疎化が進行していって、人口が劇的に増えるというのはなかなか難しいのではないかと思います。ただ、例えば、鹿児島県の島しょ部を見ると、一生の間に女性がどのくらい子どもを産むかという合計特殊出生率ベスト30のうちの10ぐらいが鹿児島の離島が占めているのではないかと思います。ここで子どもを育てて家族をつくりたいと思われる場というのが、伊豆半島も紀伊半島も目指す方向なのかもしれないとも思います。ぜひ来年度、変な言い方ですが、正式メンバーとして参加いただければと思います。

本当はフォーラムのときにパネリストの方々から一言ずつ最後にと思ったのですが、進行が下手でうまくできません。後ほど2時間ぐらい時間をつくってありますので、そのときにゆっくり、一言と言わず話すことにしたいと思います。一つ、先ほど賀茂地域局の方から、賀茂地域をフィールドワークの聖地にという話がありました。実は、地域創造学環のフィールドワークがこの賀茂地域でもたくさん行われて、それが実績になっています。この地域創造学環を立ち上げたのは、最初に挨拶をいただいた日詰先生です。学環という形でこれから続かないかもしれませんが、フィールドワークという正規の科目でなくても、ここで学びたい、ここで地域の人たちと関わりという学生たちに、また何らかの形でお力添えいただければありがたいです。

以上でフォーラムを閉じさせていただきます。

閉会挨拶

丹沢哲郎（静岡大学未来社会デザイン機構副機構長）

パネリストの先生方、本当にありがとうございました。また、ご参集いただきました先生方、大変な天気ではありましたが、たくさんのことを学んでいただけたのではないかと思っております。小栗先生から、コメントできれいに的確に本日の会についてまとめていただきました。本日の会に関して、私もいろいろ感じたのですが、2点だけ感じたことをお話しして、閉会の挨拶に代えさせていただきたいと思います。

一つは、和歌山大学の実践を聞いていてとても印象的だったのは、和歌山大学は、防災や文化など、地域貢献の切り口が非常に明確で、その武器を持っていろいろな地域に切り込んでいたことです。縦軸、横軸で言うと、縦軸に課題の解決する手段を持って、横軸、各地域に入っていくという形なのですが、静岡大学は逆で、特に未来社会デザイン機構の企画推進本部が活動している松崎町や伊豆、最近では地元の静岡市など、むしろ地域を先に定めておいて、そこをいろいろな視点で切っていくというやり方をしています。だから縦横の関係性、重きの置き方、アプローチの仕方が少し違うということです。ただ、われわれのやり方というのは、先ほどからのディスカッションであったように、県内地域でそれを全部するのかというととても無理ですし､他の地域や自治体から「なぜうちでやってくれないのだ」という話も当然出てきます。いろいろな限界があって、和歌山大学のアプローチ等も学ばせていただきながら、静岡大学サステナビリティセンターもそういったアプローチを取っているのですが、勉強させていただいて、またわれわれの活動の充実につなげていきたいと思いました。

もう一つは、これは前からずっと自分の中で考えていることなのですが、地域課題解決あるいは持続可能な地域社会構築を目指していくときに、何をもってゴールを達成したかということがなかなか難しく、アウトプットはいくらでも出せるのですが、それで地域が実際にどこがどう変わったのかという、アウトカムの部分が非常に示しにくいということです。われわれとしても、変わったなと実感を持てるところまでやりたいのですが、そこはかなり先になるのだろうとも思っています。アウトカムをどのようにわれわれが達成していくのかということを、ぜひこれからも両大学で考えていきたいと思っています。

以上、2点が私からの感想です。次回は恐らく和歌山大学で開催することになるのではないかと予想はしています。もしかすると、和歌山のどこかのサテライトになるのか、大学のある本部になるのか分かりませんが、また来年も行ってお互いに勉強したいと改めて本日思いました。できれば何か統一的なテーマで勉強できればと思ったりもしております。また阿部先生と相談して進めていければと思っています。本日は本当にありがとうございました。

地域課題解決支援プロジェクトの節目にあたって

静岡大学地域創造教育センター長
阿部　耕也

大学とともに取り組む地域課題を県内各地から公募するプロジェクトが立ち上がったのは2013年度末のことでした。2016年度には、地域社会の創造に貢献できる人材育成を目指す全学教育プログラム・地域創造学環が設置され、半年後には県内各地でフィールドワークが始まりましたが、松崎町、伊豆半島ジオパーク、東伊豆町などフィールドの多くが、地域課題解決支援プロジェクトの課題提案地から選定されました。

プロジェクト開始当初はイノベーション社会連携推進機構・地域連携生涯学習部門として事業に携わった訳ですが、2017年10月には同部門と地域創造学環、新設の地域連携室を統合した地域創造教育センターが設置され、このプロジェクトを推進することとなりました。

2020年4月には、新たに設置された未来社会デザイン機構の一員となりました。これまでの方向性を引き継ぎつつ、地域と大学との対話を通し、バックキャスティングで地域社会と大学のあり方を構想しながら様々な実践を重ねることにより、地域と大学との関係も新たなステージに入ったと実感しています。特に松崎町では地域創造学環フィールドワークに加え、2030松崎プロジェクトを中心に、より多くの学部・部局からの参加・参画が進んでいます。

地域からの課題提案を元に活動を展開することで、大学間・地域間の新たな連携・協働のあり方も見えてきました。静岡大学×和歌山大学研究フォーラム（半島サミット）も昨年度は賀茂キャンパスではじめて対面開催をし、今年度は和歌山大学南紀熊野サテライトにて実施されました。両大学の学長が出席し講評を述べ合い、また紀伊半島の田辺市長、伊豆半島の松崎町長も参加し、コメントをいただくことができました。組織形態や地域ブロックでの連携・協働ではなく、具体的な地域課題を軸とした（それゆえ国内にとどまらない）連携・協働へと広がる可能性を感じました。

成果報告書第1号を手に取ると、「松崎町役場」「伊豆半島ジオパーク推進協議会」からの提案を軸とした伊豆地域の課題群の進捗状況を中心に成果報告がなされています。10年が経過したプロジェクトですが、松崎町や伊豆半島とのつながりは、20〜40年前にさかのぼるような歴史があります。また、地域の高校生や中学生も巻き込み現在進めている試みは、何十年後かの地域づくりにつながるものかもしれません。本報告書に掲載された公開シンポジウムでも発表をしてくれた松崎高校の藤井天汰郎君は、2030松崎プロジェクトと松崎町フィールドワークに参加し、新聞の取材に「静大生との交流を通じて、今後の進路、将来の地元との関わり方が変わった」と語ってくれていました。

地域創造教育センターの役割の一つは地域人材育成に資することですが、その機会は大学開放・生涯学習支援・研修事業で行われる地域人材育成、地域創造学環での学生に対する地域人材育成だけではないのかもしれません。教育・人材育成の場面に見えないような活動群の中で、たとえば地域課題解決支援の現場（プラットフォーム）で展開する年齢や立場を越えた交流によって、関わる者すべてが地域にかかわる人として育ち合うのではないか、各地で展開するプロジェクト群を眺めていてそんな感想を持っています。

まる10年がたった地域課題解決支援プロジェクトですが、本書も含め9冊の成果報告書にみるように、地域の様々な方々との交流を通して、学生も教職員もたくさんのことを学んでいます。

様々な試行のなかで、具体的な地域課題を中心におきながら、相互の学び合いのなかで課題解決を考える実践が蓄積されつつあります。以前にも述べましたが、課題解決の取り組みが持続可能な営みとなるためには、この相互的な学びが背景にあることが重要だと考えます。

これまでの報告書の中でも述べきたように、地域課題解決支援プロジェクトは大学が地域づくりの担い手・パートナーになろうとする取組ですが、地域からの様々な働きかけ、協力、支援がなければ成立しない試みです。これまで同様、地域の皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

静岡大学
地域課題解決支援プロジェクト成果報告書　第９号

発行日―― 2024 年 3 月 25 日
発　行――静岡大学地域創造教育センター
編　集――大谷 悦子
連絡先――静岡大学地域創造教育センター 地域人材育成・プロジェクト部門
〒422-8529 静岡県静岡市駿河区大谷836
☎054-238-4817　E-mail：kaiho@suml.cii.shizuoka.ac.jp
ウェブサイト――https://www.lc.shizuoka.ac.jp/
印　刷――株式会社三創